
I S 天才以上完璧未満

狂雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 天才以上完璧未満

【Nコード】

N8119W

【作者名】

狂雲

【あらすじ】

ドイツで完璧として存在するために造られた人間リョーマ・ボーデヴィツヒ。

しかし彼は人間として必要な感情と味覚がなかった……。それでもすべてにおいて天才と呼ばれ軍に入りさまざまな訓練を義妹のラウラ・ボーデヴィツヒと共に受けてきた。感情の無い彼は道具として使われることにも疑問をもたずただ無表情に生きてきた。

篠ノ之束がISを作り世の中に送り出すまでは。

世界でたった二人の男のIS操縦者として女しかないIS学園に
きた一夏とリョーマ。
ハーレムを築いてく一夏の横でそれを眺めているリョーマの若干苦
労するものがたりである。

ブログらしきもの（前書き）

つい勢いで描いてしまったがこれ・・・大丈夫か？

なんとなくラウラに兄がいたら？と思って書いてしまった。

原作ブレイク？してますよそりゃ

主人公超チートですし

それでもいい人を見てください

プロローグらしきもの

ドイツのとある研究所内で……

『博士!!!! 人工授精が成功しました!!!』

『よし、あとは経過観察と我が子のほうの実験だけか』

大きなビーカーのようなもの……人工子宮の前に博士と呼ばれたまだ20代後半の人と研究員であろう20代前半の人が話をしていく。

『はい、人工の精子と卵子ではなく博士たちの精子と卵子なのでこれよりは楽に成功すると思いますが……』

『たしかにそうだが失敗する可能性も零ではないのだ。気は引き締めなければならん。』

『……そうですね、失礼しました。』

『これにも名前をつけねばならんな、……ふむ』

『あの〜』

『むっ、どうした』

『この名前は、わたしがつけていいでしょうか?!』

『ほう? どうしてかな……。』

『あの……。これを作るといった時から名前を付けるなら自分がつけたいな〜と……。』

『なるほどな……。いいぞ、姓はボーデヴィツヒで決定してるからな』

『わかっていますよ。……リョーマというのはどうでしょうか?』

『君が一番好きな偉人の名前か……。しかしドイツ人である君が一番好きな偉人が日本人とはね』

『わるいですかね? 一番好きな偉人が日本人というのは?』

『いや、それは君の問題だからいいだろう。……ふむ、リョーマ・ボーデヴィツヒか。それで決定しよう。』

『ありがとうございます!!』

『次の子はもう私たちが決めてあるからな。べつにかまわない』

『たしか・・・ラウラでしたっけ?』

『ああ、そうだ。これ・・・嫌リヨーマの義妹になるな』

博士はどこか嬉しそうにそういった。

研究所の奥から研究員が一人走ってきた。

『すみません少しいいますか。博士』

『むっ、どうした?』

『博士の奥方の体調がすぐれないようで・・・』

『分かったすぐに行く。ではここはまかせたよ。』

『わかりました。奥さんを大切に。』

『君に言われるまでもない』

そう言って博士は奥から来た研究員といっしょに足早に去って行った。

『・・・この子は完璧として生まれるのか、それとも・・・』

一人の研究員の小さなひとりがただ研究所内に消えて行った。
これがいまから十六年前のできごとである。

ブログらしきもの（後書き）

さてさてこれを読んでくれる人がいるのだろうか？

いたら乾燥・・じゃなくって感想をくれたらうれしいです。

ちなみに福音戦までしかしません

小説買ってないから。

いつか買おうと思うんでしたらこの続きでもかくかな？

呼んでくれた人がいたなら

ブログらしきもの2 (前書き)

まだ原作にはいきません

これが処女作なんで

いろいろとわからんですよ
それではどうぞ

プロローグらしきもの2

大分前の話をしよう。

あれは、10年前で俺・・・リョーマとラウラがまだ6歳と5歳だったころの話だ。

俺たちは遺伝子強化という実験の成功者たちだった。

なぜそんな実験をしたかまでは俺にはわからない。わかるのはその実験がとても難しいこととそのため何人もの犠牲があったことぐらいだ。

だがはっきり言って成功例である俺たちにはその実験にケチをつけることはできなかった。もつともケチをつける必要もないが。

俺はラウラより早く生まれたためにラウラより早く誕生日を迎える、まあラウラの義兄だから当然なんだが・・・ラウラは俺の事を本当の兄と思っているようでいつも「兄上」と呼んでくる。

普通ならばそんな義妹を可愛く思うのだろうな、義父も義母も頬を綻ばせているからな。

だがおれには、そんなことを思うことはできない。怒ることも喜ぶことも悲しむこともすべての感情が俺にはない。さらに味を感じることも出来ない。

べつにそれを苦に思ったことはない。義父たちには申し訳ないような顔をされたが別に気にしていないから問題ないのだが・・・。

義父たちは優しすぎる。上の命令で仕方なしに実験していたとはいえやはり自分の子まで研究に使うのは相当抵抗があったようだからな。

だが、上の連中はすぐに義父たちから俺たちを奪った。

俺たちは軍に入れさせられさまざまな訓練をうけた。まだ2、3歳の俺たちをだ。

だが、俺たちは遺伝子を強化された存在着々と力をつけていった。

だが俺たちのそんな日々はそう、俺が6歳、ラウラが5歳のときにある事件によって崩れていった。
義父たちにとっては嬉しいような虚しいような崩れ方だったが。

その事件が起こる少し前俺とラウラは模擬戦をしていた。

リ『ラウラ、お前の動きは単調すぎる。その行動をするならもっと速さをつけろ』

ラ『くっ！わかりました、兄上。いきます！！』

ラウラが地面をける。今互いにナイフ一本で戦っている。

ラウラには悪いが戦闘においておれの右に出るやつはおそらくこの世界にはいないだろう。

ラウラは様々なフェイントをかけるがまだ未熟すぎる。もつとも5歳がこれだけの動きが出来る方がおかしいがな。俺の事はおいてリ『まだぬるいな。』

ラ『あっ！』

俺はラウラのナイフをはじいたその時にラウラが持ってたナイフは折れたようだがまあいいだろう

リ『・・・今日はこれで終わりだな・・・。』

ラ『ありがとうございます。！！兄上』

リ『いつもの事だ。礼を言われることではない。』

ラウラがさらに何かを言おうとしたが急に俺たちに召集の放送がかかる。

リ『行くぞ、ラウラ』

ラ『はい！』

この時はまだ知らなかったあの事件が起こることを・・・

軍のお偉いさんのところに行くと義父たちもいた。

リ『失礼します。リョーマ中尉です。』

ラ『失礼します。ラウラ少尉です。』

俺たちがそう挨拶をするとお偉いさんがこちらを向いて話しかけてきた。

『うむ、よく来てくれた。話というのはだな。・・・この事なのだ。』

そう言ってモニターを指した。

そこにはウサ耳のカチューシャをつけた女性（中学2、3年だろうか）がなにやら物騒なロボットのようものの説明をしている。

リ『これは、何ですか』

『篠ノ之束という少女が自分で作ったと言っているIS、インフィニット・ストラトスというらしい。』

だが、あまりにもばかばかしくてな。こんな少女が宇宙空間での活動を目標にしたマルチフォーム・スーツを作れるわけがないと・・・、どうした？リョーマ？随分固い顔をして？』

リ『こんなものをこの人が作ったのですか・・・。これはすごいぜひ彼女を優遇すべきですね。』

敵に回したらこの上なくおそろしいでしょう』

おれはこの時でも無表情だった。

だが、普段から天才と呼ばれていた俺がこんなことを言ったのだからお偉いさんはとても驚いていた。

『それほどのものなのか？これは、とても信じられんが』

リ『世界もその反応をするでしょうが、我々は彼女を支援すべきです。ですがまだです。』

『まだ？』

お偉いさんも義父たちもラウラも不思議そうな顔をしていた

リ『はい、まだです。世界がこのISを認めないなら彼女は無理やりにも世界に認めさせようとするでしょう。ハッキングでもどんな手をつかってでも。なので今はまだ支援をするべきではない、で

すが協力的な姿勢を見せておけばどの世界よりも我々がISに対して一歩有利に立てるでしょう。』

『ふむ、リヨーマにそこまで言わせるか。ならその意見を使わせてもらおう。すぐに彼女に会ってくれないか？リヨーマ、ラウラ？』

リ、ラ『はっ。了解です』

俺たちは敬礼してその場を後にした。

『ボーデヴィツヒ夫妻』

夫妻『なんでしょうか？』

『感謝と詫びをしなければならんな。実験時につらい思いをさせただろう、申し訳ない。』

そして実験を成功させてくれてありがとう。助かったよ』

夫妻『そんな・・・もったいないお言葉です。』

そんなやり取りがその場で行われていた

リ『ラウラ、準備はいいか』

ラ『問題ないです。兄上』

リ『ではすぐに行くぞ』

ラ『はい！（兄上と二人で遠出とは・・・嬉しいな♪）』

そうして俺たちはいまだに発表を続けている篠ノ之博士の元に俺が作った自家用ジェット機・・・当時の俺は何がしたくてあれを作ったんだろうか。

ドイツから日本までももの5，6分で着いちまった。出来心は恐ろしいな。

リ『さて、ついたな』

ラ『うゝ（なぜ、兄上はあれに乗ってきたのに平気なんだ？運転手だからか？とゆうかなぜ操縦できるんだ？）』

リ『ラウラ、大丈夫か』

ラ『あっはい大丈夫です。兄上』

リ『では、行くか』

そうして俺たちは篠ノ之束の元へと歩いて行った

く篠ノ之束視点く

あゝあ誰も興味も示さなかったなゝ

まあべつにそれでもいいんだけどねそれならそれで別のやり方があるしゝ

リ『篠ノ之博士ですね』

うん？誰この子達？

リ『俺はドイツ軍所属のリョーマ・ボーデヴィツヒです』

ラ『同じくドイツ軍所属ラウラ・ボーデヴィツヒです！』

ふゝん、でもこどもだよねこの子等

束『で、君ら何の用？こっちは忙しんだけど』

ぶつきらぼうに無関心で無愛想に言う

ラ『なっ』

女の子の方は驚いたような怒った様子で声をあげる

リ『そうですか、ISのことでお話があったのですが』

えっなんだって？

束『ISのことです？』

なんだろう？ってよく考えたらドイツの軍にはいつてる？この子達か？

まあいいやISの事でって何だろうか？悪口でも言いに来たのかな

リ『はい、貴女が作ったあのISおれは深く気に入りました。ISの存在理由、また、その構造および武器等の技術すべてにおいて既存の科学を超えている』

束『……………』

何だろうかこの子は？誰も共感しなかったISを褒めている？ドイツはなにがしたいのかな？

この子等をつかってこの束さんになにをさせたいのだろうか？

リ『我々がしたいのはあなたの支援ですがまだ時期が早い』

束『時期が早い？』

世界が束さんに追いついてないことかな？それをこの子は見ぬいて
るのか、それとも軍（上）からの命令でこれをいつてるのかな？

この子は興味がもてるな

リ『この世界はあなたを受け入れてはいない。だから、あなたは自
分を世界に受け入れさせようとしている。どんな手段をつかってで
も。違いますか。』

束『へえそこまで考えてるんだ。それは上（軍）の考え？』

リ『いえ、俺の考えです。上も世界と同じ対応でしたから』

ラ『兄上は天才ですから！！』

女の子が自信満々にそういった

この子は・・・私と同じか

リ『我々ドイツはISの製作に賛成です。なので、少し恩着せがま
しいのですが』

そう言えばこの子はものすごい無表情だねまるで感情がないようだよ

束『何かな？』

リ『世界があなたを受け入れたときISのコアを我らドイツにほか
の国より多くもらえないでしょうか。そのかわり我らドイツは全力
であなた方をサポートします。』

束『！！なぜあなた方といたのかな？』

ちーちゃんは一切表舞台にでてきてないのに

リ『一人でこんなことをやるのは天才でもいませんよ。あなたには
気の許せる仲間がいる、だからこんなことをした違いますか。』

この子はやっぱり天才か・・・

束『ばれてちゃしょうがないね、条件はそれだけ？』

リ『あといまからISのデータを貰えませんか、俺はあなたほど科
学に特化した天才ではないがほかの科学者よりは数段ちがうので』

束『それなら問題ないよ。はいこれ』

と言って私はデータを渡す。

束『でも悪いことに使ったら容赦なくつぶすよ』

リ『ご安心を、これだけは命令を逆らっても悪用させません。約束ですからね。ありがとうございます。もしあなた方が困りならぜひ俺に連絡してください。番号はこれです。』

といって少年は紙を渡してきた。

束『わかったよ。もう一度名前をいってくれる？』

リ『リヨーマ、リヨーマ・ボーデヴィツヒです』

彼・・・リヨーマは最後まで無表情だった。声にも抑揚がなくまるで機械のようだった。

（リヨーマ視点）

リ、ラ『それでは、失礼します。』

そう言って俺たちはその場を後にした。

ラ『なんなのでしょうか？博士の最初のあの態度は！』

ラウラ、まだそのことを言ってるのか・・・。

リ『おそらく他人に一切の興味が無いのだろうな。だがおれには興味を持ったようだ。かるく興奮していたようだし。』

おそらく似たような天才に初めて会ったのだろうな篠ノ之博士は俺の横でラウラはすこし頬を膨らませている・・・拗ねてるのか？

興奮してたとかいってたからか

俺は無表情なのだから特に意味はないと思わなかったようだ

ラ『しかし、兄上。なぜデータをもらったのです？ISを貰えばはやかったのでは？』

機嫌がなおったな、まあ今手をつないだからだろうけど

リ『博士が事件を起こした後世界がISの危険性に気付く、そしてISを捕獲もしくは破壊をと世界は動き出すだろう。そのときISを持っていたらドイツまで狙われる、だからだ』

ラ『あ、なるほどさすがは兄上♪』

リ『帰りぐらいゆつくりと帰るか。あれは運転手以外気分が悪くなるから』

ラ『・・・（兄上、もっと早く言って下さい）』

そうしてその日はとても大きな収穫があつて俺たちはドイツに戻った

プロローグらしきもの2（後書き）

ラウラの性格が違う気がするな

そこはまだ5歳児だからと気にしないでください
表では真剣で裏では若干ブラコンってことで

とゆうかこんなに長くする気はなかったんだがな
まだ原作にはいかないっす次もね

次は彼の愛機がでてきます。武器がガンダムネタ満載ですが気にしないでいただきたい
それでは

プロローグらしきもの3 (前書き)

いかんせん!!!!!!

はやく原作にいかんと!!!!!!

でもリョーマの愛機が手に入る話と

第二回モンドグロッソの話しがまだ残っている

はっ!!! プロローグって書かなきゃいいのか

もうわからん

ってなわけで三話目どうぞ

プロローグらしきもの3

さてとあの篠ノ之博士がISを発表してから1か月たったある日のことだ

（リョーマ視点）

リ『よし、ISのデータ全分析終了。さすが篠ノ之博士まさか1か月かかるとは・・・』

しかしIS・・・なぜ女性しか乗れない？ラウラにさらに負担がかかってしまう

とくにこのヴォーダン・オージェ・・・ISの適合性向上のためのものだが不安すぎるな・・・

そこでいきなり俺の携帯が鳴る

リ『ん、だれだ・・・そういえば篠ノ之博士以外に教えてないな。もしもし』

束『早速で悪いんだけど今世界で日本を攻撃できる国にハッキングして日本にミサイル一斉発射させたんだ』

やっぱりそんなことしたのか

リ『それでなぜ電話してきたのです』

相変わらずの無表情で抑揚のない声でいう

束『いやーリっくんのほうのところにもハッキングしたのに防がれちゃってーいったいなにしたのさ？』

リっくんで俺の事か

リ『ハッキング対策を万全にしておいただけです。とくにミサイル関係の方を重点的に』

篠ノ之博士ならやりかねんとおもってプロテクトを100000くらひかけておいて正解だったな

束『まあいいや（リ（いいのか・・・かるいな））テレビみといって

ね〜それじゃ』

言うだけ言ってきたな。まあいいかテレビをつけるか

〜東視点〜

束『まったく、プロテクト100000枚はないよ。まったく1000枚しか超えられなかったよ』

千冬『お前がハッキング出来ないとはな、お前以上の天災かそいつは？』

字が違うよちーちゃん・・・。

束『そうじゃなくて相当前から準備してたみたい。』

千冬『こうなることを前からしっていたというのか？』

束『そうなるね。なんてったって束さんが認めた天才だからね♪』

ホントに予想外だよ。まったく。でも2341発もあれば十分かな

束『さあ、ちーちゃん。思いっきりやっちゃってきてよ♪』

千冬『わかってる。いつてくるぞ。』

そういつて白騎士はミサイルの群れに飛んで行った。

〜リョーマ視点〜

ラ『兄上、なにを見てるの？』

ラウラが後ろから声を掛けてきた

リ『世界が篠ノ之博士を受け入れる瞬間だ、お前も見とけ』

ラ『わかりました』

少し不機嫌になりながら横に座ったラウラの頭を撫でてやった

ラ『~~~~~』

機嫌が戻ったな、まったくなんとずるい義兄^{アニキ}んだろうかな。おれは。

しかしさすがISいとも簡単にミサイルを落としていくな

そういえばドイツ軍にISの捕獲または撃破命令をだすのやめさせ

ないとな

全てのミサイルが落ちたな

さて篠ノ之博士からISのコアをたくさんもらうために働くとするかドイツのために

そういえばISが発表されてからおれたちは義父たちと過ごす時間がふえたラウラや義父たちは随分幸せそうだ。

さて話が脱線したなまあそんなことしてるうちにお偉いさんの前まで来たが

『ドイツ軍だけISにこうげきするなか……。まあ何の問題もないな。もともとするつもりもなかったからな』

リ『そうでしたか』

心配する必要すらなかったか

そして世界は篠ノ之博士を受け入れた……。世界だけは。

束『さてISのコアをどの国が何個持って帰れるかはここに書いてあるから』

興味がなさそうに篠ノ之博士はそういった

「まってくれ！なんでドイツだけこんなにコアの数がおおいんだ！不公平だぞ」

束『うるさいな、ISを壊そうとした国より攻撃して来なかった国の方を優遇するにきまってるでしょ』

篠ノ之博士は国の代表達に早く消えてもらいたいらしい

「くっ」

それだけ言うと代表達はコアを持って去っていった。

そう篠ノ之博士は世界に受け入れられても人には受け入れられていないのだ。

リ『お久しぶりです。篠ノ之博士』

束『おお！リッ君！あいたかったっよ。これリッ君の国が持っているコアだよ♪』

束『あとこれもつけるよ♪』

束『なんだこれは？黒い玉？』

束『これは束さんでもうまく扱えないじゃじゃ馬ISだよ』

束『なんてももの渡してんだこの・・・ひ・・・と？』

束『あれこの子が反応してる？・・・すごいよリッ君！！いままでうんともすんとも言わなかったのに！！』

束『この球体からISについてのデータがはいってくる気がつく』

束『おお！ISの待機状態の姿が変わるなんて前代未聞だよ』

束『待機状態？とゆうかなぜ俺の腕に付いたんですこれ』

束『つまりこの子はリッ君のことが好きになったんだね』

束『なるほどどうやら遺伝子強化の影響かなんかで男の俺でもISが操縦できるようになったのか？』

束『恐ろしいなこれ』

束『名前はリッ君できめてね。ついでにリッ君が高校生になるまでは隠しておいて上げるよ』

束『それは助かります。ドイツでもそうしておきますか』

束『そうしなければドイツがこまるだろう』

束『それでは失礼します』

束『ええ！もう少ししてよ！リッ君！』

束『ですがおれも忙しいのですいませんが』

束『しょうがないな』

束『そうしておれはドイツに戻りISの開発および研究に没頭した』

束『ついでに俺もISが起動できると思ったらいろいろと大変だった。』

ISを操縦するにあたって耐G訓練と今まで以上の訓練をうけてきた
そして6年がたったとき俺とラウラはヴォーダン・オージエを施さ
れた

俺は両目、ラウラは左目に受けた。

俺は両目とも適合し相変わらず両目とも赤色だったが、ラウラはう
まく適合できずに左が金色になり右目が赤色というオッドアイにな
ってしまった

そのせいでラウラは軍から役立たずと呼ばれる用になってしまった

あの事件が起こるまでは……。

ブログらしきもの3 (後書き)

というわけで彼の愛機が手に入りました

何故彼がISを操縦できるのかそれは結局分からずじまいです

つぎは最後に言ったとおりある事件がおこります

まあ前書きでいっちゃったけど

感想とかくるのかなあ？

それでは

プロローグらしきもの4 (前書き)

よしプロローグは今回で終わるぞ・・・たぶん
それではいってみようかな

プロローグらしきもの4

前回はなしたことから1年たったころだ

第二回モンド・グロッソが開催された。

今回はおれも暇だったので見に行くことができた。

前回のモンド・グロッソで総合優勝し「ブリュンヒルデ」と呼ばれた織斑千冬がまた出場してるらしい

彼女は篠ノ之博士が唯一の親友であるの白騎士事件で白騎士であった。いまは白騎士ではなく暮桜にのっている

この暮桜は白騎士の後継機であるらしい武装は近接用ブレードしかないが、しかしそれだけで前回のモンド・グロッソを勝ち進んだんだからすごいな

まあ俺もできるが

次はいよいよ決勝つてときにいきなり俺の携帯がなった

リ『篠ノ之博士かどうしました』

束『たいへんだよ！たいへんだよ！リッ君！いっくんがいなんだよ！』

リ『落ち着いてください。いっくんとはだれです』

束『いっくんはちーちゃんの弟だよ！そのいっくんがいなんだよ！』

リ『了解した。すぐにこちらで調べる』

束『たのんだよ！リッ君！きみにかかっているよ』

そういつてきれた。さて

リ『俺だ』

ク『大佐？どうしましたか？』

ドイツにいるラウラの部下であるクラリッサ大尉に連絡する

こいつの情報収集力は目を見張るものがある
リ『篠ノ之博士のご友人である織斑千冬の弟である織斑一夏がいなくなったらしい。至急調べてくれ』

ク『了解しました。すこしお待ちください』

さてすぐに行動できるように外に出ておくか

うん？なぜ外に織斑千冬がいるんだ

千冬『くそっ！一夏！どこにいるんだ！？』

どうやら彼女の耳に一夏がいなかったのがしれてしまったようだ

2回連続制覇を弟のためにすてるか・・・？

もしや連続制覇をさせないためにか・・・？

まあ今考えても無駄か

リ『あせるな織斑千冬』

千冬『なんだと・・・！弟がいなくなったのに落ち着いてなどいられるか！！！！』

おっとクラリツサからか

リ『一夏の場所は分かったか』

千冬にも聞こえるようにする

千冬『ナンだと・・・？』

ク『はい。場所はここから5時の方向10キロはなれた青い屋根の倉庫の中です』

リ『わかった。感謝する。だそうだが、千冬さん』

千冬『感謝する』

そういつて千冬さんはISを展開して飛んでいった

そのご誘拐事件はあまり騒がれずに幕を閉じた

（ラウラ視点）

リ『感謝する。』

そういつて兄上は通信をきった。

ラ『クラリツサ』

ク『隊長？どうしましたか？』

ラ『兄上はなぜ連絡を？』

ク『なんでも篠ノ之博士の友人の弟さんが誘拐されたと』

ラ『なるほど』

兄上は約束を守ったとゆうわけか……

兄上……あなたと私では何がちがうのだ？私とあなたは兄妹だ。きょうだいたとえ血が繋がっていなくともたとえ生まれ方がちがくてもなのになぜ？あなたは完璧で私は不完壁なのだ？

兄上はヴォーダン・オージェに認められたのに私は認められなかった。

兄上は全てにおいて完璧だ、その強さも姿も、そう全てがだ

兄上は私のことをどう思っているのだろう？出来そこ無いと思っ
ているのだろうか……。

私は兄上に一度も「妹」とよばれたことがない

私には兄上がいまいちよく分からない、昔は兄上のことなら何でも知っていたのに……。

私には何が足りないんだ？力か？全てを叩き潰す兄上のような圧倒的な力か？

もう分からないどうすればいいんだろう

兄上……私を導いてください……兄上

（リョーマ視点）

リ『で、なぜ頭を下げている。千冬さん』

俺の前には頭を下げている千冬さんがいた

千冬『お前のおかげで一夏を助けることができた。だから……有り難う』

リ『頭を上げてください。これは篠ノ之博士との約束でしたので礼を言われることはありません』

千冬『しかしだな・・・』

しかたないな

リ『なら、こちらの頼みを聞いてくれますか』

千冬『頼み？いいだろう。なんだ？』

リ『俺の大切な「妹」がとある事情で訓練でいまいい成績がとれなくなりふさぎ気味なんだ。俺以外の教えを受けて「妹」にはもとのもどってほしい』

これは俺の本心だ。

千冬『そんなことならお安い御用だ。ただし、私の教えはスパルタだぞ？』

リ『かまわない。おれがやるとどうしても少し甘くなってしまう』

千冬『ほう？どうみてもスパルタのような見た目だがな？』

リ『それは俺の全ての感情がないからだ』

千冬『っ！？それは失礼した』

なぜ感情が無いというと謝るんだ・・・まったく

リ『謝られる要素がないな。べつに苦に思ったことがないからな』

千冬『・・・・・・・・（感情がないなんてどうしたらそんなことになる？）』

リ『では、「妹」を・・・ラウラを頼む』

くラウラ視点く

あれから3日程経過した

私がいまだに自分の存在理由について悩んでいると

千冬『ふむ、お前がラウラか？』

いきなり声を掛けられた

ラ『っ！あ、あなたは？』

今日の前にいる女性はビシッとスーツを着こなし顔は整っており男女問わず振り向くようでとても綺麗な人だった

千冬『今日から1年間お前を鍛えることになった織斑千冬だ。お前、最近成績が下がり気味らしいな』

ラ『っ！！』

自分が一番気にしていることをこの人はさらっと言った

千冬『だが、安心しろ。この1年で昔と同じ・・・いやそれ以上にしてやる』

それが私と教官の初めての出会いだった。

（リョーマ視点）

リ『ラウラ、お前には自信と強さが足りない。だから千冬さんに徹底的につぶしてもらえ』

おれは無表情のまま続ける

リ『期待しているぞ。「妹」よ』

ブログらしきもの4（後書き）

よし次はI S説明でもするか

しかし書いてると意外と言葉がでてくるな

それが読者の心を寄せつけるか引き離すかはしらんけど
感想とか書いてくれたらうれしいです

主人公およびIS紹介（前書き）

今回は紹介です

いやードイツ語ってめんどくさいね

調べるのに時間かったよ

それではどうぞ

主人公およびIS紹介

主人公紹介

リョーマ・ボーデヴィツヒ（16歳） 階級 大佐

人工の精子と卵子で造られた、いわば人造人間である

名前はリョーマが造られた時にとある科学者がつけた。坂本龍馬が由来である

身長は182で髪は銀髪、髪型は一夏よりやや長め。両目は赤で戦闘時は金色になる（ヴォーダン・オージェにより）

顔は言わずもがな美系である。イメージキャラはいない。恋愛に興味がないため、そういうのは敏感である（他者のときだけ）一夏がハーレムをつくってぎゃあぎゃあ騒いでるのをひそかに楽しんで（ときどきとばっちりがくる）

人工的に造られたため感情の全てと味覚がなくなっている。しかしそのおかげでセシリアの料理を普通にたべることができている

感情がないために常に冷静で無表情なため相手の印象は悪いが、話しているときと以外と親しみやすい性格である

全ての物事において天才で束も認めるほどである。

周囲からは完璧と呼ばれているがリョーマ自身は人間として不完全なので自分は完璧ではなく天才だとおもっている

とくに戦闘においてはこの世界でリョーマに勝てる人は皆無である。リョーマが6歳のときに束が開発したISの優位性にいち早く気づき束に協力する。そのさい束に気に入られる。

ひよんなことでじゃじゃ馬ISの操縦者になってしまった。

妹であるラウラには若干甘くラウラが一夏のハーレムの1人になったことによりハーレム関係で問題が起るとさりげなく一夏を葬ることに参加している。

16歳なのに精神年齢が20代後半クラスである。

IS紹介

シュヴァルツェア・オルカーン（黒いハリケーン）

色は黒を主体にところどころ青と赤と白のカラーリングになっている
開発当初の名前は轟天である

束でさえ作った後に一切扱うことが出来なかったコアを使ってリョ
ーマが作り変えた最強のIS

もともと第2世代型のISだったがリョーマの手により第4世代型
ISになっている

高性能、高機動、高火力の3拍子でチート以外の何者でもない機体
武器がガンダムパクリだが気にした時点で負けです!!!!!!!!!!

武器 色は黒が主体の青いカラーリングとなっている

ヴァイント・ホーゼ（竜巻）

レーザーソード兼レーザーライフル

つまりはOOのオーライザーのGNソード？です

ヴァイント・シュトゥース（突風）

遠距離荷電粒子砲兼レーザーマシンガン

GNソードとかと同じ原理で遠距離荷電粒子砲が折りたたまれている
トーベン（猛威を振るう）

中距離荷電粒子砲

ヴェスパーですねはい

ラーゼン（暴走する）

脚部レーザーソード

∞ジャスティスの足のあれですよ

えっなんでこれつけたかって？……………なんとなく？

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力
きょうかすいげつ
鏡花水月

ISの周囲に特殊な粒子を撒き散らすことで敵が攻撃した瞬間にその粒子が自機を形どり残像をつくる

そのうちに自分は移動し敵が残像に気をとられた瞬間に相手を攻撃すると言うチート

あまりに卑怯なので緊急時以外決して使わないようにしてある

IS待機状態

普段はリストバンドで左手首に装着されているがリョーマが別の形を想像するだけでその形になる

主人公およびIS紹介（後書き）

さてこんなもんなかな？

えISがチート過ぎる？

俺の頭の中はチートだらけだ

気にしたらまけた！！

それでは

学園生活初日から波乱の様子（前書き）

ようやく原作突入ですね

学園生活初日から波乱の様子

（リョーマ視点）

さて話を今に戻そう。あれから他の試験管ベビーだった奴らの男どももISにもしかしたら乗れるかも？と言って実験してみたが結局だめだった。

まあ、俺もオルカーン以外のISで実験してみたが駄目だった。

所かわって今IS学園受験会場にいる。どうも篠ノ之博士はおれが学園に受かると同時に世界にISを動かせる男として発表するらしい。博士の事だ。必ず世界が驚くことをしでかすだろう。

『ちょっと！その男子』

ん、なんだ煩いな

俺の後ろに女子が一人立っていた。

『なんで男子がここにいんのよ。ここはIS学園受験会場よ。男の来る場所ではないわ！！』

ホントにうるさいな

リ『ISが操れるからここにいるのだ。貴様らのような遊びで来ているのとはわけが違う』

世界では今ISをファクションとして見ている輩が多い。

そんなではことでは開発者の篠ノ之博士が泣くぞ・・・多分

『は？男がIS操れるわけないでしょ！』

リ『これから俺が受験を受ける、ウソかホントかよく観とけ』

『いいじゃない！！見てやるよ』

馬鹿な奴だな、まったく・・・ってなぜあそこに織斑一夏がいる。

しかもISを起動させたぞ

篠ノ之博士・・・そういうことか

『リョーマさん？早く来てください。試験を開始しますよ？』

リ『わかりました。今行きます』

そう言って俺はシュヴァルツェア・オルカーンを起動させる。
その時間0，1秒・・・よいい速さだな

『うそ・・・ありえない』

後ろで女子が驚愕しているが無視をした

さて、教師をさっさと倒すとするか

く誰かさん視点く

教師とリョーマが向かい合う

教師はラファール・リヴァイヴ、リョーマは自分の専用機シュヴァルツェア・オルカーン

『それでは・・・開始!!』

開始の合図とともに教師は後ろにさがりつつマシンガン撃つ。対するリョーマは接近しながら左手のマシンガンで相手のマシンガンの弾をすべて撃ち落とす。

『うそ！そんな』

教師が驚愕しているうちにリョーマは相手の懐まで従来のISでは出せない速度でもぐりこむ。

『しまっー!』

リョーマは右手のライフルの下に折りたたまれているレーザーソードをライフルに展開し相手のISを切り刻むようにふるった

そして教師のわきをすり抜け教師の後ろに立ちライフルとマシンガンを斉射する

『えっ？えっ？きゃああああ』

一瞬の出来事に教師が困惑していると衝撃が全身を覆いシールドエネルギーが0になった

『う・・・うそ』

教師とさっきまでリョーマを馬鹿にしていた女子が驚愕の声を上げる
それと同時に近くの壁が吹っ飛びその中に教師が一人目を回していた。

リ『なんだ、この状態は』

リヨーマの呟きに答える人はいなかった……。

（リヨーマ視点）

というわけで晴れてIS学園に入れたわけだが篠ノ之博士……ニユースで俺と一夏が世界で初、男のIS操縦者であると公開した……やっぱり篠ノ之博士の仕業か

当の篠ノ之博士は予想外だなんて言ってたがあの顔は絶対知っていたな

一『なあ』

おっとそうだった、ここはIS学園内の教室1ー1である奇遇にも一夏と同じクラスだった。しかも隣の席

一『あんたがリヨーマだよな』

リ『俺以外の男は一夏以外ないから、そうだな』

一『なんで俺の名前知ってた？ってああニユースか』

リ『いやそれよりまえだ、お前が誘拐されたとき知った』

一『っ！なんでそれを！？あれは公には……』

リ『なにせお前を探すのに協力したのは俺だからな』

一『なっ！まじでか……ありがとう』

リ『俺は篠ノ之博士との約束を守ったまでだ、だが礼は受け取っておこう。SHRがはじまるな』

そう言っただアの方を見るとドアが開き教師が入ってきた

受験の時壁破壊して出てきて目回してた先生だな

山『みなさん！初めまして山田真耶といいます！みなさん1年間お願いします。それでは自己紹介してもらいます』

そう言っただ一人ずつ名前を読んで自己紹介させている

俺は横にいる一夏に目を向けた……何をそんなに悩んでいる……いやあの顔は落ち込んでいる顔か

山『織斑君？織斑君？』

先生の声にも反応してない一夏・・・だいじょうぶか？

山『織斑君!!』

一『はっ!?!はい!!』

変な声になっているぞ一夏・・・こいつおもしろいな

山『いついま自己紹介をしていてあから順番で~~~~』

先生が一夏に説明しているのを少しぼんやりしながらみると一夏が自己紹介をはじめた

一『はじめまして。織斑一夏です・・・・・・・・・・』

ながい沈黙がみんなが何を言うんだろうと期待してる

でもあの顔は何も考えてないな

一『・・・・・・・・・・以上です』

ずしゃああああああああ

とか聞こえてきそうなほど皆こけた、こけたと言っても椅子に座ってるわけだから表現だが

スパアアン

一『いったあ!!』

なんだ、千冬さんか・・・いや織斑先生だなここでは

千『ろくに自己紹介も出来んのかお前は』

あの出席簿いったい何で出来てるんだ・・・普通叩いてもあんな音しないだろ

一『ちっ千冬姉』

スパアアン

千『織斑先生といえ馬鹿者』

一夏は痛みで悶絶している

千『さて諸君、私がこの担任の織斑千冬だ。貴様らを1年で使い物の操縦者にするのがわたしのしごとだ』

『きゃあ~~~~。あの千冬様~~~~。本物だわっ!信じられない♪』

黄色い声が教室内を飛び交う。煩い・・・。

それと10年間ISに乗ってた俺はここで何を習えばいい?篠ノ之

博士の次にISをいじくっていた俺が

千『まったく毎年毎年こんなのはっかりか……。こんなのかこの学園にはいないのか……。？』

知りませんし知りたくもないですよ織斑先生。

千『リョーマ、お前も自己紹介しろ』

面倒だが出席簿で叩かれるのはごめんだ

リ『リョーマ・ボーデヴィツヒです。これから1年間よろしく願います。』

『かつこいいくくく』

『織斑君といい、リョーマ君といいイケメンすぎる』

『結婚してくくく』

最後の奴黙ろうか

千『さて山田先生。授業を』

山『はっはい！』

山田先生雰囲気のにまれてる大丈夫か？これで

授業中

暇すぎる 基礎をやっているんだが俺は応用編すら楽々と解ける

ISのあの意味の分からん分厚い本なんて内容全部暗記してる

一夏は横で青ざめてる

女子どもは後ろで少し騒がしい

俺は暇だから寝てたいが何分斜め前に織斑先生がいるから寝れない暇だ……

山『さて、ここまでで誰か何か分からないことがありますか？』

いやあの分厚いもんよんでりゃ誰でも……。一夏お前読んでないなその顔

一『はい』

山『はい織斑君？どこが分からなかったですか？』

一『全部わかりません……。』

やっぱりだよ

千『織斑、ISの教本ちゃんと読んだのか？』

出席簿が震えてるんだがなぜだろう

一『あれ？あれなら古い電話帳と間違えて捨て・・・』

スパアアン

本日3回目か名物にでもなるなこれは

千『貴様にはもう一つくれてやる、一週間で全部覚えろ』

一『なっ、無理・・・』

千『分かったな（ギロ）』

一『はい』

ばかだな、一夏は

休み時間

一『ふあゝゝゝ』

一夏は疲れたように背を伸ばした

リ『徹底的な勉強不足だな』

一『そう言ったってここに入るって決まってからあれ貰ったんだし、しょうがないじゃないか。むしろリョーマはあれ分かったの？』

リ『10年まえからわかっている』

一『へっ？10年前？』

リ『ああ10年前に篠ノ之博士からISのデータを貰ったところから』

一『リョーマってドイツで何してたの？』

リ『軍に入ってさまざまなことをしていた』

一『そうなんだ』

そう言って話をしていると

『ちよつとよろしくて？』

と言って話しかけてきた女子がいた

髪は金で縦ロール肌は白く眼は蒼のイギリス人か

たしか代表候補生のセシリア・オルコットか

一『んあ？』

リ『どうした』

セ『まあ！なんですその反応は！せっかくこの私が話しかけているのですからそれ相応の態度をとるべきではなくて！！』

いや相応の態度だったが

セ『まあいいですわ、わたくしはイギリスの代表候補生のセシリア・オルコットと言いますわ。あなたたちの事はすでに存じ上げてますから紹介はいいですわ』

一『なあ、ひとついいか』

最悪に嫌な予感だ・・・許可しない
セ『なんですの？』

一『代表候補ってなんだ？』

ずしゃああああああああああああ

二回目か・・・しかも今度はちゃんとこけてるな

セ『代表候補を知らないとはやはりあなた方「男」は無知で愚か者ばかりですわね』

男って言い方にとげがあったな

リ『一夏、代表候補とはその名の通り国家の代表になれるような人のことだ』

一『へー、ちなみにリョーマもその代表候補なのか？』

セ『野蠻で愚かな男が代表候補になれる「リ」俺はドイツの国家代表だ』わ・・・け・・・』

一『つてことはこいつよりすごいのか？』

リ『そうだが、ちゃんと名前で呼んでやれ』

キーンコーンカーンコーン

セ『話の続きはまたつぎですわ！』
やれやれ

二時間目

千『そういえばクラス代表戦のための代表を選ばなければならんな、誰か立候補もしくは推薦する奴はいるか？』

『はい！織斑君がいいと思いまゝす』

一『えっ？』

『リョーマ君に一票入れまゝす』

リ『・・・・・・・・』

おれが出たら話にならんだろ

セ『このわたくしセシリア・オルコット、立候補しますわ！！実力から言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の男にされては困ります！男がクラス代表などこのクラスの恥にしかありませんし、わたくしにそのような屈辱を一年間も味わえと！？』

一『うるさいな、イギリスだってそんなに大層な国じゃないだろ？世界一まずい料理で何年覇者だよ？』

勝手にヒートアップするな一夏

セ『あなたは、わたくしの祖国を侮辱するのですか！！』

一『先に侮辱したのはそっちだ』

どんどん暑くなっていくな二人だけ

セ『ならば、決闘ですわ！！』

一『いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい』

セ『では、ハンデはどのくらいつけますの？』

一『おう、どのくらいつけりゃいいんだ？』

セ『・・・・もしかしてあなたがハンデをつけると・・・・？』

一『当たり前だろ？』

・・・・・・・・静まりかえり

そして爆笑。煩過ぎる

『織斑君いくらなんでもそれはないよ！男が強かったのは昔のことなんだから！』

いやおれならISに乗らなくても勝てるが

一夏はすこしむっとした表情で一『ならハンデはいらない』

セ『あら、ほんとにいいのですか？』

一『男に二言はない』

言い切ったな一夏、ならば

リ『俺も一夏に俺に集まってる票と合わせて推薦する』

一『えっ？それってどういうことだ？』

リ『さっき俺に票がはいっただろ、つまりそれを一夏にやることで候補から外れると言うことだ』

千『いいのか？リヨーマ』

リ『勿論』

千『では織斑とオルコットの決闘は一週間後第3アリーナで行なう』
その後は普通に授業をした

休み時間

『ちゅっといいか？』

誰だこの子は

女子としては割りと高い160cm黒い艶やかな髪はポニーテール
でまとめてある。顔立ちは美人の部類にはいる。誰かに似ているな・
・篠ノ之博士か？

一『箒か、どうした？』

箒・・たしか篠ノ之博士の妹さんの名も箒だったな
それにさっきの自己紹介でいったな篠ノ之だって

箒『ここではすこし・・屋上ではどうだ？』

一『ああ、べつにいいが』

一夏はばつが悪そうに俺をみた

リ『俺のことは気にしなくていい、行ってこい』

一『ああ分かった』

放課後

リ『みつけたぞ、一夏』

一『リヨーマ？どうした？』

リ『どうしたもなにもお前のISの訓練だ』

俺の後ろには箒もいる

あの後仲良くなっておいた一応

一『ISの訓練？』

箒『一夏、お前はISの訓練もせずにオルコットと戦う気か？』

一『あっ忘れてた』

こいつ・・・大丈夫か本当に

リ『ならこれから訓練を開始するぞ。織斑先生から許可はとってある。打鉄に乗れる様にしてあるから』

一『今すぐに？』

箒『当たり前だろ』

一『マジでか・・・』

俺と箒は一夏をおもいっきりいじめた。

その後

山『織斑く〜ん、リョーマく〜ん』

リ、一『はい、なんでしよう』

山『お二人が暮らす寮の鍵をもってきました〜』

そういえば、ここは寮生活だったな

俺の鍵は1026と書いてある・・・なんで俺と一夏でそれぞれ鍵をわたしてあるんだ

リ『一夏、お前の鍵は何番だ』

一『1025だけど』

箒『なに！1025だと!!！』

一『どうした？箒？』

箒『い、いやなんでもない』

さては、同じ部屋か箒の顔が赤いからな

リ『俺は誰かと相部屋なんですか』

山『いいえ、リョーマ君は今は1人です』

普通は俺と一夏だろ

山『あと二人は大浴場ではなく、部屋のシャワーを使ってください』

リ『分かりました』

一『えっ！何ですか？』

山『織斑君は女子達と一緒に入る気ですか？』

一『あっそうか、風呂にはいりたかったな』

リ『そのうちできるだろう』

山『はい、いま作っています』

一『ほんとですか？』

山『はいそうです。』

一夏・・・ひっぱるな風呂のくだり

リ『まあいいかもどるか一夏』

一『そうだなそれでは山田先生有り難うございました』

寮内で

リ『こっちが俺の部屋だな』

一『ならこっちが俺の部屋か』

リ『では一夏また明日』

一『ああ、また明日』

そういつて俺たちは部屋に入った

リ『少し疲れたな、今日は・・・いやある意味面白かったな』

なんて思っていると隣が騒がしい

なんだこんな時間に煩いな

俺は隣へとむかった

リ『何をしている、一夏と箒』

案の定一夏は箒と相部屋だった

一『いいところにリョーマ！助けてくれ！』

箒『リョーマ！一夏を抑えろ！』

リ『どっちの意見も拒否だ、しずかにしろ。煩い』

一、箒『すっすまない』

リ『喧嘩だとしても互いに竹刀は持つな』

一『ごめん』

リ『幼馴染が相部屋なのだから多少の事故も目を瞑れ、そのたびに騒がれたらそのたびに周りに迷惑だ』

箒『分かった』

リ『なら、いい。どうした、一夏驚いた顔をして』

一『いや、リヨーマがあまりにも長く喋るから』

リ『無表情だから少ししか喋らないわけではない。俺は感情の全てがないだけだから無表情以外の表情が作れないだけだ』

一、箒『……』

リ『別に気にする必要がないぞ、』

一『そッそうか』

リ『まあ、話し合いは静かにやってくれよ』

箒『分かった、すまなかったな』

リ『いや、そうだ一夏、これからも放課後に訓練するからな』

一『おっおう（また今日とおんなじことすんのかな？ あれはきつすぎるんだが）』

リ『それじゃお休み』

そういつて俺は自分の部屋に戻った

リ『ふうさてねるか』

そうして初日が過ぎた。

一週間後

山『着ませんね織斑君の専用機』

そう一夏には専用機が来ることになったのだ

箒『このままでは、不戦敗になりますよ』

そうその専用機がこないのだ

山『きましたよ！ 織斑君の専用機が』

一『これがおれの専用機……』

山『その名も『白式』です』

箒『白式……』

白一色ともいえるカラーリングである白式なかなかい機体だな

しかしどこか怪しい日本の技術はここまで進んではいけないはず
まるで篠ノ之博士が作ったようなISだな
千『時間がない、織斑すぐにいけ』

リ『一夏』

一『うん？』

リ『必ず勝てよ。でなければあの訓練の意味がない』

一『ああ、必ず勝つぜ』

リ『なら、いってこい』

一『ああ、いってくる！！』

そういつて一夏はアリーナへ飛んでいった

く一夏視点く

ここまで何とか生き抜いたんだ

絶対の勝ってやる。しかしリョーマのやつほんと容赦がなかったな
というかナイフ一本でISに勝つてなんだよ
チート過ぎるだろ。

でもそのおかげで大体の操作は憶えたからな

さてアリーナには既にセシリアがまっていた

セシリアの機体はたしかブルー・ティアーズだったな

でもそれぐらいしか教えてくれなかったなりョーマのやつ

もっと教えてくれてもいいのにリ『あちらにもこっちの情報がない
んだからあいこだろ』

まあそうだけど

セ『あら、逃げずに来ましたのね』

一『そりゃ逃げるわけないだろ。男なんだから』

セ『そうですか、では最後のチャンスを与えますわ。泣いて謝るな
ら許してあげますわよ』

一『悪いけど、謝るつもりはないよ』

警戒、敵IS操縦者が射撃モードに移行。セーフティのロック解除
を確認。

くるか!!

セ『では、これでお別れですわ!』

そういうなりセシリアは手に持っている武器スターライトMK?で俺を撃ってきた

俺はすぐに回避行動をとりレーザーをかわした

セ『よくかわしましたわね。ですが、いつまで持つかしら!』
まるで雨のようにレーザーが降り注ぐ

一『うおおおおおおお』

俺はそこに向かっていった

一『はあ、はあ、くそっ』

セ『男の癖になかなかしぶとかったですわね。ですがこれで終わりです。さあ、眠りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で!』

そういうとブルー・ティアーズから小さい装甲がとんできた
なんだこれは?

セ『さあこれでおわりです。いきなさい!ブルー・ティアーズ!』

セシリアがそういうとその装甲がこちらに向かってきた

何だこれ?まさかビット!!

一『ぐああああ!』

避けきれずにビットからの攻撃を食らってしまった

くそ!全距離からの攻撃か

俺の武器は近接ブレードの「雪片」しかないってのに・・・いやこれが使えるのか

だよなりヨーマ?

く回想く

一『近接武器の強み?』

リ『そうだ、なんだと思う』

一『うーん・・・だめだ分らない』

リ『それはな、近接しかできないと言う固定観念だ』

一『ん？それが何で強みなんだ？』

リ『敵からしたら相手は近接だけつまり遠距離から攻撃は決して来ないと油断する。かならず隙ができてしまうそこを狙い一気に接近し敵を叩くこれが近接の強みだ』

く今く

さらにビットの対策も出来ているこれなら！！

おれは気合を入れなおしビットに対応しつつ隙をねらう

そうしながら俺の手は無意識に動いていた

千『あの馬鹿者浮かれているな』

山『あ、えと、どうしてわかるんですか？』

千『さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、

一夏の昔からの癖だ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする。』

千『（さてどうなる・・・？一夏）』

くセシリア視点く

なんでですの？急に動きがかわりましたわ！？

ビットがどんどん落とされてしまう

ビットの弱点に気がついてこのままでは奥の手をつかうしかないですわ

一『これでおわりだっ！！』

いつの間にか彼が目の前にいた

セ『掛かりましたね。ブルー・ティアーズは4機だけではありませんせんのよ』

そういつて腰のミサイル装備のブルー・ティアーズを彼に向けて放つ

く一夏視点く

俺の目の前をミサイルがせまる

一『しまっー』

俺の視界は真っ白に染まった

（リョーマ視点）

一夏が煙に包まれるのを視認する

簡単なミスを確かにしたな

千、リ『機体にすくわれたな』

千、リ『・・・』

何故被ったかは置いておこう

煙が晴れると今までと違った姿の白式がいた

（一夏視点）

何だこれ？「フォーマットとフイッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。」

一『これを押せばいいのか？』

俺は確認ボタンを押した。その直後、膨大なデータが整理された。

セ『ま、まさか……一次移行！？^{ファーストソフト}あ、あなた、今まで初期設定だけの機体であそこまで戦ってたっていうの！？』

一『どうやらそうみたいだ』

武器は……近接ブレード「雪片式型」

一『これは……千冬姉が使ってた武器だよな……ふっ。俺は世界で最高の姉さんを持ったよ』

セ『？何を言っていますの？』

一『俺も、俺の家族を守る』

千冬姉がそうだったように。

一『とりあえず、千冬姉の名前を守るさ！』

そういうとそれに答えるように雪片にエネルギーが溜まる

一『いくぞっ！！』

千『ばかな奴だ全く』

千冬姉が何かいていたようだが俺には聞こえなかった。

セ『くっ』

ビットを全て壊しおれはセシリアに切りかかる

一『うおおおお!!』

セシリアに雪片が当たる瞬間

ビーーーーー

『試合終了。勝者ーセシリア・オルコット』

なんでだ? ん? シールドエネルギーが・・・ない!!

（リョーマ視点）

一『すまん、リョーマ。負けてしまった。』

リ『勝負に勝って、試合に負けた。それだけだ。』

一『でも!!』

リ『俺は勝てといった。お前は勝負にかった。それで充分だ。いや、充分すぎる』

一『ありがとう。リョーマ』

いい笑顔だな。無駄に、浮かれてなければ初期設定で勝てたと言うのに

まあここは褒めておこう専用機に始めてのってここまで戦えたのだから

リ『よくやったな。一夏』

おれは無表情のままそういった

それから2、3日後

『織斑君クラス代表おめでとう』
パパパーン

一『何でこんなことに?』

セ『それは私が代表を辞退したからですわ。』

一『なんで?』

セ『試合には勝ちましたが勝負には負けましたわ』

一『(リョーマもいつてたな)』

セ『あと私の事はセシリアと呼んでください。一夏さん』

一『ああ(なんだろう。態度がちがいすぎる)』

リ『(セシリアがおちたな。箒とセシリアに挟まれる一夏か・・・これはおもしろいな)』

『すいません。いいですか?』

俺たちの前に1人の女子・・・2年か

一『あなたは?』

まゆずみかおるこ

『わたしは2年の黛薫子です。織斑君にクラス代表になった感想を貰いにきました。それではさっそくクラス代表戦に向けて意気込みを』

一『えっと頑張ります。』

黛『それだけ?なら捏造するか。ではリョーマ君なんで代表候補を降りたの?』

リ『10年ISに乗っている俺よりまだ日の浅い一夏に経験をつませたかったからです』

黛『これは捏造しなくていいね。有り難う、それじゃ最後に織斑君を中心にみんなで写真をとるよ。ハイチーズ』
パシャ

そうして一夏のクラス代表パーティーは幕を閉じた

学園生活初日から波乱の様子（後書き）

疲れた

こんなに文が長くなるなんて予想外です

次はリヨーマとセシアの戦闘および彼女がでてきます
見てくれたかたには感謝です

嵐はいつも突然に（前書き）

今回はクラス代表戦の少し前のお話とクラス代表戦
彼女もついに参戦！！

言わなくてもわかるよね

それと今更ながら更新は不定期です

あとちょっととした失敗で本文が保存できんから時々書き途中で投稿
されることがあるのでご注意を

ホントすいません

それではどうぞ

嵐はいつも突然に

（リヨーマ視点）

セ『リヨーマさん！私と闘って下さい！』
なんだと？

リ『なぜ、そんなことをしなければならない』

千『リヨーマ、貴様は女子の頼みを聞かんのか？』

リ『する必要のないことは極力しないので。それに俺とセシリアでは勝負にならず俺が勝ちます。』

ちなみに名前で呼んでるのは本人の希望だからだ。

セ『それでもお願いできませんか？』

リ『……ならばお前にみせてやる。戦闘の天災の戦い方を。

もう二度と闘いたいたいと言えないようにしてやろう』

セ『……！では場所は「リ」第三アリーナの放課後でいいだろう』
「わかりましたわ」

セシリアはそういうと自分の席に戻って行った

一『リヨーマ、いくらなんでもいいすぎなんじゃ？』

リ『10年間自分のISをいじってた俺が試作機にときに敗けるわけない。それに前の戦いでセシリアの戦いの癖は覚えた。セシリアには悪いがセシリアでは俺には絶対に勝てん。もって5分がいいとこだ』

一『……。（俺あんなに苦戦してしかも負けたのにそれを5分で？自信がなくなるなあ……）』

リ『お前は白式に初めて乗ってあれだけ戦えた。だから自信を無くす必要はないぞ』

一『心を読まれた！？』

リ『顔に出ていたぞ』

一夏はむむむと言って黙ってしまった

しかし授業は退屈だな……。

〈放課後〉

リ『一夏わざわざここに来なくてもよかったんだが』

此処は第三アリーナのピットの中、ここにはいま織斑先生と一夏と山田先生と箒がいる

俺はすでに愛機、シュヴァルツェア・オルカーンを身にまとっている

一『いや、応援しようかな〜と』

リ『それなら観客席でも出来たぞ』

一夏がここにいるから箒まできたぞ

一『……まあ頑張れよ』

リ『言われるまでもない。「ドイツの死神」と呼ばれた天災を見せてやる』

そう言っておればピットから飛び出した

一『ドイツの死神ってなんて物騒な……』

千『戦場であいつを見たものはほとんど死んでるそうだ』

一『すべてじゃなくて？』

千『殺すなという命令が下りる時もあるそうだからな』

何て会話があったらしい

セ『きましたわね、リョーマさん』

リ『一夏達に捕まっててな、少し時間がかかった』

セ『気にしませんので、では』

リ、セ『勝負』

〈セシリア視点〉

いきなり全力で行かせてもらいます!!

セ『ブルー・ティアーズ!!』

私はブルー・ティアーズを展開しました

刹那、リ『動きは読めている』

彼の抑揚のない声が私の耳に聞こえた瞬間、ブルー・ティアーズがすべて撃ち落とされた

セ『なっ!』

リ『セシリア、お前はブルー・ティアーズを展開するとき展開の仕方が毎回同じだ。それでは、狙って下さいと言っているようなものだ』

まさか・・・一夏さんとの試合を観ただけでここまで出来るなんてリ『お前の武器は全部見せてもらったからな。今度はこちらが見せてやろう』

そう言うとは彼は左手のマシングンの下に折りたたまれている銃身を展開し銃口を私に向けた

（リョーマ視点）

リ『まずは荷電粒子砲、ヴィント・シュトウースだ』

そう言って俺は荷電粒子砲をセシリアのスターライトMK?めがけて放つ

セシリアはとっさに避けるが俺の荷電粒子砲の速さはふつうとは違うセシリアはよけきれずスターライトに当たりスターライトは爆散するセ『きゃああああ』

爆発に少し巻き込まれブルー・ティアーズのシールドエネルギーが少し減る

リ『次は中距離荷電粒子砲、トーベンだ』

そう言って背中にしまってある銃身をセシリアに向け、放つセ『くっ!』

セシリアは回避行動を続けるが、武器がないので反撃できない俺はさらにマシングンとライフルをつかいセシリアを追い詰める

俺のマシガンとライフルもレーザーなのでどちらも荷電粒子砲より劣るが威力は高い

セシリアの周りの地面を狙い姿を目視出来ないようにして高速で近づく

俺の愛機の最高速度は3000キロ普通のISは決して追いつけない速さだ

リ『次はレーザー、脚部に装着したレーザーソードだ』

セシリアの目の前にきてそう言い回転するようにセシリアを切りつける

セ『な！え？きゃああああ』

一瞬で目の前に来た俺に困惑していたが俺は無視してセシリアのシールドエネルギーを削る

セ『このっ！』

ミサイル装備のブルー・ティアーズをセシリアは放つが俺はそれを蹴って切り壊す

リ『おわりだ、レーザーソード、ヴィント・ホーゼ』

右手のライフルの下に折りたたためであるレーザーソードを展開、一気に切り付けセシリアのシールドエネルギーを0にした

リ『5分ジャストか。やはり代表候補は伊達じゃないな。普通なら2分でかたがつくんだがな』

セ『褒め言葉として受け取っておきますわ』

『勝者、リヨーマ・ボーデヴィツヒ』

くピット内く

リ『箒、なぜ一夏はああも落ち込んでいる』

箒『リヨーマがセシリアをいともたやすく倒したからだ』

リ『俺と一夏では経験が違うから当たり前だと言ったのに、まだ落ち込んでいるのか』

ああいうのはほっとくに限る

く次の日く

『ねく聞いた？二組に転校生が来るんだってく』

いまだに落ち込んでいる一夏を横目に見ながらその話を聞く

セ『こんな時期に転入生だなんて、私の実力をいまさら恐れての編入かしら？』

どの口がそれをいうんだか

『でも専用機持ちはこのこと四組だけでしょく。なら絶対勝てるよ！』

『その情報古いよ』

ドアから声がしたからそちらを向くと背の低い女子がこちらを指さしている

『中国の代表候補生、ファンリンイン鳳鈴音あんたたち一組に勝ちを渡さないわ！』

一夏が代表だからあり得るかもな

しかし中国代表候補か候補生がこの学園に来る必要があるのか・・・俺もだが

一『鈴。おまえ鈴か！』

一夏の知り合いのようだな・・・ということは一夏のハーレム要員だな、おそらく

鈴『そうよ、おど「一」なにかっこつけてるんだ？似合わないぞ』
なっ！なんてこと言ってんのよ』

セ『一夏さん！！あの人は知り合いなのですか？』

箒『そうだぞ！一夏！説明しろ！！』

お前らSHR前だということをわすれるな

千『おい』

鈴『えっ？』

スパアアン

鈴『いったくい』

千『いつまで教室の前にいる？邪魔だ』

織斑先生、気配消して立ってたくせに邪魔はないだろう

鈴『一夏！憶えておきなさい！逃げないでよ！』

この学園内でどこに逃げられる場所があるんだ

千『さて授業を始めるぞ』

S H R すっ飛ばしたぞ織斑先生

（昼食）

鈴『まってたわよ！一夏』

ラーメンもって待つかふつう

一『何してんだ？鈴、早く座ろうぜ』

鈴『わっ分かってるわよ、まったく』

一『しかし久しぶりだな、おばさん元気か？』

鈴『ええ、お陰様でね、でもビックリしたわよ？なんでI Sをつかえてるわけ？』

一『いや、それは俺にも分からないだよ』

二人だけで話すな。こっちの二人がご立腹中だ、飯が不味くなる。もっとも表現だが

俺には味覚何てないからな

セ『一夏さん！！いい加減説明してください。彼女は一夏さんの何なんですの？』

箒『そうだ！もしかして付き合ってるのか？』

それはないな箒、一夏は朴念仁だ。お前が一番しってるだろ

一『そんなわけないだろ。鈴は俺のセカンド幼馴染だよ』

意味の分からん単語が出てきたななんだセカンド幼馴染って

幼馴染は赤ん坊のころからの付き合いの奴の事を言うはずだったが

箒『なんだ？セカンド幼馴染って？』

一『箒は俺のファースト幼馴染だろ？だから鈴はセカンド幼馴染だよ』

一夏・・・俺でも理解できんことを話すな。話に聞けば鈴は箒がいなくなった次の年くらいつまり小5のときからの付き合いだそうだがそれはただの友達だ・・・一夏お前は馬鹿か

鈴『で、あんたが男でもう一人のIS操縦者でドイツの国家代表？』

リ『ああ、リヨーマ・ボーデヴィツヒだ』

鈴『ふーん、あんた強いのか？』

リ『お前なら5分ちようどで倒せる・・・つまりお前はセシリアと同等だな』

鈴『なっ！言ってくれるわね。私があんたなんか「一」鈴、リヨーマと闘ったらISが壊されちゃうぞ』「は？そんなわけないでしょ？」

リ『相手の実力が分からん奴はほっとけ。どうせクラス代表戦は一夏がでるのだから』

鈴『ふんっ！一夏クラス代表戦であんたがどんだけ強いかわかめさせてもらおうわ』

一夏を再び鍛えるとするか

あいつ急降下でグラウンドにクレーター作ったからそこの訓練もしないとな

リ『一夏』

一『うん？』

リ『今日の放課後から訓練再開だ』

一『マジでか！！！！』

お前のためなのにお前が嫌そうな顔をしてどうするもつとも訓練という名の拷問みたいなものだが

今回は鈴音のISの特徴を教えてもいいだろうし

鈴『ねえ訓練って何してるのか？』

リ『戦うかもしれない敵に教える気はない。』

一『リヨーマ・・・言い方にとげがないか？』

リ『俺は大概この口調だが』

とげがあるように聞こえるだけだと思うが

（放課後）

一『衝撃砲？』

リ『そうだ、今回の強敵は衝撃を相手に飛ばしてダメージを与える
見えない弾丸だ』

一『見えない攻撃をどうやってかわせと』

リ『相手の目線と銃口付近の空気のゆがみが見えれば問題ない』

一『簡単にいつてくれるな・・・』

リ『相手の目線ならばお前でも出来る。相手は攻撃した居場所を必ず
目視する。こんな風に』

俺は一夏の肩を見ながら肩を攻撃する

一夏はギリギリで防御した

リ『合格だ。今日はこれが続ける。』

一『おうっ！』

（寮内）

隣がうるさい

おそらく鈴音が一夏との相部屋を希望したのだろう。

そして、一夏の朴念仁が発動したのだろう。

リ『・・・・・・・・まあいいか。寝よう』

クラス代表戦当日

あれからいろいろあって一夏と鈴音のなかは若干悪い。一夏のせいで
リ『一夏。俺が教えた事ちゃんと生かせよ』

一『ああ、分かってるぜ』

しかしなんだ・・・嫌な予感がする

俺の嫌な予感は外れることを知らない。いつでも二人に加勢できる
ようにしておこう

そう思っていると一夏がピットを飛び出した。

そして二人の戦いがはじまった

リ『訓練のした甲斐があったな。前回より動きの切れがいい』

初撃を防ぎ攻めつ守りつ行動し、衝撃砲も難なくかわしているが接

近が出来ていない

リ『だが、一夏ならあれの弱点に気が付くはずだ』

その時、俺の嫌な予感がさらに危険を訴えかけてきた

リ『そろそろか。』

俺はアリーナに行けるように準備をした

（一夏視点）

あの場所だな！！リョーマが言っていた衝撃砲の弱点は！

その場所めがけて瞬間加速・・千冬姉から教えてもらったこれだけでけりをつける！！

一『うおおおおおおおおお！！』

鈴『しまっ！』

俺の攻撃が鈴に届く瞬間！！

いきなりアリーナが大きく揺れてアリーナに何かがおちてきた！？

（リョーマ視点）

くそ、アリーナが揺れた瞬間に全ての扉にロックが掛かった。これは解除に時間がかかるな

アリーナでは土煙が上がっている

しかしこのロックは以上に固いな、

一夏たちに向かってビームが飛ぶのが見えた・・・ビーム兵機とはどこの国のISだ

土煙が晴れるとそこには全身装甲の大型ISの姿があった

なんだあの大きさ、人が操縦しているとはおもえない。となれば無人機か

それにあのビーム兵機どこの国でも作れるはずがないとすれば・・・篠ノ之博士か

なぜ毎回あなたがでてくるんだ。一夏のためか？それにしてはやることがひどすぎるな

いまだに人の考えだけが理解できない

謎のISに一夏たちは若干苦戦しているようだ。こっちはもうすぐだからそれまで持っているよ
二人が何かを話しているようだ。その間奴は動く気がないようだ。
一夏達が動き出したな一夏が前で鈴音が後ろか・・・衝撃砲を使ってもう一回瞬時加速を使う気か
おっとロックが解除できたな
アリーナでは一夏が奴に一太刀浴びせているところだった
俺はシュヴァルツェア・オルカーンを身にまとう
再び一夏達を見ると奴が一夏を撃とうとしているところだった
こいつの最高速なら間に合うな

（鈴視点）

一夏の攻撃でまだ倒れないなんて！
しかも一夏はもう動けないのにその一夏を狙っている！
ここからじゃ間に合わない！！
鈴『一夏あああああああああ』
あたしはただ一夏に迫るビームを見ることができなかった
一夏にビームが当たる瞬間突然ビームが裂けた？
ビームが全て消えるとそこには一夏の前にレーザーソードを前に掲げたリョーマがいた

（リョーマ視点）

間に合ったな、しかしビームを切り裂くとは初めてだったが以外と大したことなくあったな後は
リ『いい加減、堕ちろ』
俺はヴィント・シュトウースを展開し奴に向けて放った
攻撃は奴の左腕を消滅させ奴は崩れた
一『サンキュ。リョーマ』

リ『少し遅くなっちゃったな』

一『いや、ある意味いいタイミングだったぜ』

鈴『一夏!! 大丈夫!?!』

一『ああ、リヨーマのおかげでな』

鈴『もう少し早くこれなかったの?』

リ『ロックが固くてなかなか解除できなかったんだ。』

鈴『まあ、一夏が無事だったからいいけど』

小声で喋ってるから一夏には聞こえてないが、俺は地獄耳だから聞こえてたぞ

〳数日後〵

鈴『リヨーマ! あんた、あたしと戦いなさい!』

リ『断る、セシリアに俺と戦った感想でも聞いてみろ』

おれは鈴に戦いを申し込まれていた

鈴『セシリア! リヨーマと戦った感想は?』

セ『っ! おっ思い出させないでくれます!!? 鈴さん』

鈴『セシリアがすごい怯えてる!?! いったい何が?』

リ『別に開始直後にブルー・ティアーズを全て落とし、その後スターライトも落として後はじわじわシールドエネルギーを削っていっただけだ』

鈴『悪魔みたいね』

リ『死神だ』

なんて会話をした

〳寮内〵

メールがきたな、誰からだ

ラウラか、なつかしいなどれどれ

ラ『いまからそちらに行きます』

ふむ、なぜ最初からこっちに来なかったんだ

まあ、いいか。ラウラもおれ以外で真の強さを持つ男にあうのは初

めてだからな。

一夏に惚れるかもな。それはそれでいいが、兄としては若干嫌な気分になるな

しかし、あいつは千冬さんに心酔しているからな一夏と一悶着しかねんな

こんなにラウラを心配するとはまるでシスコンみたいだなとかおもいつつおれは寝た

嵐はいつも突然に（後書き）

つかれたね

一応行っとく

リョーマはシスコンではない

ラウラのことを考えつつ一夏の安否を気遣っているわけだからな
もう一度言っとくりョーマはシスコンではない
いじょうです

嵐はすぐには収まらない(前書き)

今回は学年別トーナメントとその少し前のお話
では、どうぞ

嵐はすぐには収まらない

厄介なことは続くものだ

二度で済むならまだいいそれが三回、四回も続くと嫌になってくる

（リョーマ視点）

山『今日は転校生を二人紹介します』

また、転校生か

山『それでは、入って下さい』

教室に入ってきた二人を見てクラスがざわめく
何せ、入ってきた二人のうち一人は

『初めまして、シャルル・デュノアです。』

男だったからである

『お・・・どこ？』

シ『はい、こちらにおなじ境遇の人がいると』

『き・・・』

シ『き？』

『キャーーーーー』

またか、煩いそれとこいつらはこのシャルルだったかをほんとに男
だと思っているのか

『三人目よ、三人目！』

『それに美形！しかももってあげたくなる系！！』

こんな華奢な男がいるか、肩も丸い、あの丸さは男では絶対にあり
えない

シャルルの感想はこれぐらいでいいだろう

もう一人、俺はそいつの方が気になっていた。
なぜなら

千『お前も自己紹介をしろ。ラウラ』

もう一人は、ラウラ・ボーデヴィツヒだったからだ
ラ『分かりました。教官』

千『私は教官ではない。ここでは織斑先生だ』

ラ『ラウラ・ボーデヴィツヒだ』

沈黙

山『え？以上ですか？』

ラ『以上だ。貴様が織斑一夏か』

ラウラは一夏の前に立った。叩く気か。

一『そうだけど』

ラウラが一夏を叩こうとした瞬間俺はラウラの腕をつかんだ

ラ『放してください。兄上』

リ『登校初日から自分の評判を下げるな』

俺がそういうとラウラは叩こうとした手を下げた

ラ『織斑一夏。私は貴様を認めない』

めんどくさいことだ、まったく

（授業）

千『今日はまず、模擬戦をみてもらう。鳳、オルコット来い』

セ『なぜ、わたくしが・・・』

鈴『一夏のせいだからね、まったく』

千『ここでもいいところをあいつに見せれば好感度上がるだろうな』

セ『さて！私の相手は誰ですか？鈴さんでもいいのですよ？』

鈴『先生！早く始めましょう』

現金な奴らだな

千『お前らの対戦相手は・・・』

山『どつどつてください』

一夏の上から声がした、一夏は声の出所を探している。お前の上だ。

俺はシュヴァルツェア・オルカーンを展開し、一夏の上に移動

降ってきた山田先生の腕をつかみバランスをとらせた

山『リョーマ君ありがとうございます』

いったいどうしたら降ってこれるんだか

千『お前らの相手は、山田先生だ。山田先生は元代表候補生だったんだぞ』

山『でも、代表候補どまりでしたし』

なるほど、山田先生が専用機に乗って俺と闘ったら、10分はかかるな

さすが教師俺が戦った教師とは段違いだな

セ『二対一ですか・・・』

鈴『さすがにちよつと・・・』

やはり、あいつらは実力の差が分らないのか、馬鹿な奴らだ

千『安心しろ、お前ら二人でも山田先生には勝てん』

セ『なっ?』

鈴『ならやって見せますよ』

そう言って模擬戦が始まった。

セ『鈴さんが衝撃砲を無駄に撃ちすぎるからですわ!』

鈴『あんたこそ、行動を読まれ過ぎなのよ!』

二人とも言い合いをさつきから続けているがどっちも悪いのだから無駄なことなのにな

千『これで分かっただろ、今度からは先生をもっと敬うように』

それは山田先生があだ名で呼ばれているのを見たからこうしたわけかとこんな感じで授業は続いた

く放課後く

リ『そういえば学年別トーナメントが近いな』

一『あっほんとだ(また、訓練とかすんのかなあ)』

リ『一夏、今回は自分で頑張れ』

一『えっ? 訓練しないの?』

リ『今回は敵になるからな。敵を鍛えるほど俺はお人よしじゃない』

などと話していると

『ねえ、あれドイツの第三世代機だよ』

『ほんとだ、あの人も練習するのかな？』

という会話が聞こえてきたのでそちらを向くと

ラ『織斑一夏、貴様も専用機持ちか』

一『だったら、なんだよ』

ラ『私と闘え』

一『断る。闘う理由がない』

ラ『私にはある。私は決してお前を認めない。お前があの人の弟などどけっして認めない』

そう言っラウラはルールカノンを一夏に向けた

リ『そこまでにしろ。ラウラ』

ラ『兄上。これは私の戦いです。口を出さないでください』

リ『勝負がしたいのなら、学年別トーナメントでしろ。』

ラウラはしぶしぶといった感じで戻って行った

箒『一夏、奴はもしかして・・・』

セ『しかし、厄介ですわね。ドイツはどの国よりもISの開発が進んでいますから。第三世代機はどの国によりも性能が一段、二段うえですわ』

シ『ドイツは篠ノ之博士がISを発表したところからISに興味を持っていたらしいし。他の国より多くのコアを貰ってみたいだし。』

リ『IS関係は俺の担当だったからな。抜かりはない』

鈴『そのせいで、厄介なことになったでしょうが。あいつはあんたの妹なんですよ？ だったらあんたがどうにかしなさいよ』

リ『喧嘩を売られているのは、一夏だ』

一『確かに。なありヨーマ、なんでラウラは千冬姉の事をあんなに？』

リ『織斑先生は第二回モンド・グロッソの後、一年ほどドイツの軍で指導をしていた。その時ラウラは軍から役立たずと呼ばれていた

な、そんな時に織斑先生と出会い、指導を受けた、その時に織斑先生に憧れたのだろう。俺が知っているのはここまでだ、あとは知らない』

第二回モンド・グロッソの単語が出てきたとき一夏の顔が暗くなつたのを俺は見逃さなかった

（寮内）

リ『俺と相部屋か』

ラ『はい、兄上』

隣では一夏とシャルルが相部屋になつたらしい

リ『学園の様子はどうか』

ラ『ISの怖さを知らない、愚か者ばかりです』

リ『なじめそうか』

ラ『あんな奴らとなじめません』

まあ時間の問題だろう

ラ『兄上。兄上はどうして織斑一夏をかばうのです？』

リ『別にかばったわけではない。無駄な騒ぎを起こしたくなかっただけだ』

ラ『兄上。臆病になつたのでは？』

リ『ほう、小娘が偉そうに言うな』

ラ『・・・！』

ラウラはナイフを持って俺に切りかかってくる。俺はラウラのナイフを持っている手に手刀をたたき込みラウラを押し倒しリストバンドをナイフに変えラウラの首にあてる

リ『お前はまだまだ未熟だ、そんなお前が人の性格を勝手に判断か。思い上がりも甚だしいな』

俺はラウラの上からどいた

ラ『兄上』

リ『早く寝ろ』

俺はそう言って寝た

く数日後の放課後く

『ねえねえ、聞いた？第三アリーナで専用機持ちが模擬戦してるって』

一『専用機持ちが模擬戦？』

リ『一夏、シャルル行くぞ』

く第三アリーナく

一『なっ！なんだこれ？』

リ『ラウラ・・・何してる』

そこにはセシリアと鈴がラウラに一方的に攻撃を受けていた

リ『一夏、行くぞ』

一『ああ！』

俺たちはアリーナに入って行った

一『このやろおおおおおお』

一夏は白式を展開しラウラに突っ込んで行った。

リ『シャルル。鈴たちを頼む』

シ『うん、分かった。気をつけて』

俺はラウラと専用機のシュヴァルツェア・レーゲンに向かって行った

一『くっ！なんだよ？動けねえ』

ラ『ふん！この停止結界にこんなに簡単にかかるとはな、所詮貴様はその程度か』

一『くっそく』

ラ『これで、終わりだ』

そう言ってラウラはレールカノンを一夏に向ける

リ『やらせん』

俺はライフルをラウラに向けて、放つ

ラ『くっ』

一『サンキューリョーマ』

リ『下がってろ、一夏』

ラ『兄上。なぜ邪魔をするのです』

リ『騒ぎを起こすなど言ったはずだがな』

ラ『周りが勝手に騒いだけですよ』

リ『同じことだ』

ラウラは、俺に停止結界、A I Cをつかってきた

ラ『邪魔しないでください』

リ『A I Cの開発者にA I Cを使うとはな、だから、未熟だと言ってるんだ』

俺はA I Cをつかっているラウラの腕をつかむ

ラ『なっ?』

リ『いいからやめろ、I Sをしまえ』

千『貴様ら、何をしている?』

一『織斑先生・・・』

千『喧嘩をしたいのなら学年別アリーナでしろ』

リ『分かりました』

ラ『了解です』

保健室

セ『うっ別に貴方達が来なくても勝てましたわよ』

鈴『そうよ。助けてくれなんて言っていないわよ』

どの口が言うんだか

リ『それだけ怪我してるのによく言うな』

シ『好きな人にかっこ悪いところ見せたくないんだよね』

もう遅いぞそれ

セ、鈴『なっ何のことですか?』

ドドドドっ

一『なんだ?』

急に保健室のドアが吹き飛んだ・・・吹き飛んだな間違いなく

『織斑君! リョーマ君! シャルル君!』

大量の女子が押し寄せてきた

一、シ『なっなに？』

『これ！！』

一『学年別トーナメントタッグ申請書？』

『そう！』

『織斑君』

『リョーマ君』

『シャルル君』

『一緒に組もう！！』

なるほどね

リ『俺はラウラと組む』

一『俺はシャルルと組むよ』

『ええ』

そう言っで女子たちが肩をがっくりと落として帰っていった

セ、鈴『一夏^{さん}！一緒に組もう（組みましょう）』

山『無理ですよ、二人とも』

一『山田先生？』

山『二人のISはダメージレベルCです。トーナメントの出場は無理ですよ』

二人はさっきの女子たちみたいに肩を落とした

（寮内）

ラ『兄上。タッグを組んで下さい』

リ『ああ、俺もそう思っていたところだ』

ラ『兄上、絶対手を出さないでください』

リ『分かった、無理はするなよ』

ラ『ここにいるやつらに遅れは取りません』

その慢心があだになるぞラウラ

（トーナメント当日）

一『俺たちの相手は誰だろうな』

一夏は白式に乗りながら呟く

シ『そうだね』

シャルルは専用機、ラファール・リヴァイヴカスタム？に乗っている

一『やばい・・・緊張してきた』

シ『リラックスだよ、一夏』

一『おっ、相手がきまったぞ・・・て、マジ？』

『一試合目、リョーマ、ラウラペア対一夏、シャルルペア』

ラ『兄上は手を出さないでください』

リ『ああ』

一『決着をつけるか』

ラ『貴様に言われるまでもない』

くラウラ視点く

私に勝つ気があるのだな、愚かな

兄上にも見せておこう、今の私はもう役立たずではないことを

ラ『かかってこい、二人とも叩き潰してやる』

私はレールカノンを二人に向けてはなつ

二人は一旦距離をとると織斑一夏がこちらに突っ込んでくる

ラ『バカの一つ覚えか』

私は停止結界を発動させる

一『相手は』

シ『一人じゃないよ』

織斑一夏の後ろからシャルル・デュノアが出てくる

ラ『くっ』

私は二人から距離をとる

負けるわけにはいかない

それでも二人の動きに翻弄されていた

ラ『くそっ!』

私はいら立ちが大きくなってきた

シ『動きが単調になってるよ』

しまった!すでにシャルル・デュノアは私の懐に入っていた

シ『盾殺し(シールドピアス)これは痛いよ』

そう言われた後に激しい痛みが体を襲った

これでは負けてしまう!兄上の顔に泥はつけたくない

負けたくない、負けるわけにはいかない

力が欲しい、こいつらをつぶせるほどの力が

『力が欲しいか?』

声が聞こえる

『力が欲しいか?』

そうだ、力が欲しい

『なら、望め』

何度でも望もう、私は力が欲しい!!

『ならば、力を渡そう』

その瞬間、目の前が暗くなった

（リョーマ視点）

ラウラのISから黒い何かが出てきた。

あれはVTシステム・・・なぜだ俺はあれを乗せてない。俺のシュヴァルツェア・レーゲンに勝手に改造した奴は誰だ。あそこの研究所だ。レーゲンの開発を手伝いたいなんて言うから手伝わせてやったのにあれを乗せるとは、許せん
ラウラを包んだ黒い何かが形をとる

リ『あれは・・・織斑先生か』

黒い何かは織斑先生を形どり雪片も形どった

一『なっ!なんで千冬姉を?』

リ『これはVTシステム、モンド・グロッソの総合優勝者の戦闘データをそのまま再現・実行するシステムだ』

一『なんで、そんなものが？』

リ『俺がしるか。俺はあんなものに乗せたりはしない』

シ『一夏、危険だよ。下がろう』

一『いや、ここは下がれない。これは俺の問題だ』

シ『一夏？これは一夏の問題じゃないよ』

一『千冬姉の真似事何て許せねえ』

シ『でもエネルギーはどうするの？』

一『あっ！ない』

シ『もう！一夏ったら』

一『リョーマ、手伝ってくれ！』

リ『俺の問題だ。なんてかっこいいセリフの次はそれか』

俺はやれやれといった感じで一夏に近づく

シ、リ『シールドエネルギーを渡すぞ（よ）』

一『サンキュー二人とも』

一夏は雪片を部分展開するとラウラの前にたった

一『所詮は真似事だ。ラウラ、そこから助け出してやる』

でたな、天然誑が

一『はあああ』

一夏は気合の入った声と共に雪片を一振りする

（ラウラ視点）

暗い、暗い、なぜこんなに暗いんだ

私は力が欲しいんだ。なのになぜ身体が動かない

一『そこから助けてやる』

織斑一夏の声が聞こえた

周りから声から聞こえないのにあいつの声だけが聞こえる

ラ『貴様はなぜそこまで強いのだ』

一『俺はそんなに強くないよ。単純な強さならラウラの方が上だよ』

ラ『そんなはずない。お前は私に勝った。』

一『俺は強くない。でも守りたいもののためならどんな状況でも頑張れるってだけだ』

ラ『守りたいものだと？』

一『そう。箒や鈴、セシリア、シャルルみんな俺の守りたい人たちだ。その人たちのためなら俺は頑張れるんだ』

ラ『頑張れる・・・か。私にもあるのだろうか？』

一『ないなら、俺がなってやる。そして、俺もお前を守ってやる』
そう言われると視界が急に明るくなった

意識が遠くなる中兄上と目があつた

その姿はどこか微笑んでいるように見えた

そこで私の意識が消えた

（リョーマ視点）

あれからしばらくして保健室から織斑先生が出てきた

リ『先生、ラウラは』

千『全身の筋肉痛ぐらいだ。いま意識が戻っている』

そう言う先生は歩いて行った

リ『ラウラ、入るぞ』

ラ『はい』

リ『調子はどうだ』

ラ『筋肉痛だけで問題ないです』

リ『そうか』

そう言う俺はラウラの横に座った

ラ『兄上』

リ『ラウラ、強さとはなんだ』

ラ『え？・・・分かりません。前までは圧倒的に徹底的に敵をつぶすことだとおもっていました』

リ『分からないか、今はそれでいい』

ラ『兄上はなんだと思うのです？』

リ『それはな、誰かを守ることだ。一夏もおそらくこう答えるだろ

うな』

俺が一夏というときラウラは少し反応した

これは、惚れたな

ラ『兄上、兄上は私の事をどう思っていますか？』

リ『何を当たり前なことを。世界でただ一人の大切な「妹」だ』

そういつて俺はラウラの頭をなでる

ラ『兄上・・・／＼』

ラウラは昔のように顔を赤くしてくすぐったそうにしていた

ラ『兄上、私はいったい誰なんでしょう？』

リ『お前はお前だ、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。それ以外の誰でもない』

ラ『ですが、』

リ『お前は、ただの遺伝子強化されたれっきとした人間だ。俺等の両親だっているだろ。俺が悩んだことをお前が悩む必要はない』

ラ『兄上が悩む？』

リ『とぼけるなよ。お前だってもう知っているはずだ。俺とお前がホントの兄妹きょうだいではないことを』

ラ『確かにそうですが』

リ『この問題は俺が悩むだけだ、そして俺はもう悩みは解決した』
ラ『どんな答えを出したのです？』

リ『簡単だ。俺は俺だ。それ以外の誰でもない。お前の兄で、自分で言うのもあれだがさまざまな分野の天才で人造人間だ。』

リ『もう寝ろ。ラウラ、筋肉痛は意外ときついからな』

ラ『はい、おやすみなさい。兄上』

ラウラは俺に頭を撫でられながら眠った。

リ『自分が誰が分からないか・・・懐かしい疑問だ。』

自分の心の丈を二人とも話したからな。今度からは昔のように気軽に話せるだろう

「次の日」

山『えーと、今日は転校生というかなんというかなんだそのしどろもどろは』

そう言えば男子の浴場が出来たらしい。

シャルルと一夏で入ったらいいがいいのか、シャルルは女性なはずだが

シ『シャルロット・デュノアです。改めてよろしく。』

山『えー、デュノア君はデュノアさんでした』

『女の子？』

『そういえば、昨日男子の浴場が出来たって？』

『織斑君、相部屋で浴場入ってまさか、知らないってことは・・・』

鈴『一夏あああああ！あんたって男はああああ』

一『待て、鈴誤解だ』

鈴『死ねえええええ』

鈴は思いつきり衝撃砲をはなつ

煙が晴れるとそこにはラウラが一夏をかばうように停止結界を張っていた

一『サンキューラウツ！！』

ラウラはいきなり一夏にキスをした

俺の中で何かにひびが入ったような音がした

ラ『お前は私の嫁にする、決定事項だ』

ラウラはそう言い放った。

鈴『ふざけんじゃないわよ！！』

セ『そうですわよ！！そんなの認めませんわ！！』

一『いかん！殺られる！』

一夏は鈴とは反対のドアから逃げようとしたが

箒『逃がさんぞ！！一夏！！』

箒が日本刀を手に一夏に迫る

一『クソ！！』

シ『どこに行こうとしてるの？一夏？』

窓から逃げようとした一夏の前に盾殺しを構えたシャルロットが立ちふさがる

ラ『貴様ら、嫁に手を出したらどうなるか・・・分かってるな?』
ラウラが挑発する

一『リョーマ!!こいつらを・・・て、こわっ!!!』

リ『一夏、こいつらをなんだって、お前を一回切らせてくれたらその相談乗ってやろう』

俺はヴィント・ホーゼを構えて一夏にいう

ラ『あっ兄上?』

ラウラも恐怖に声が震えているようだ、俺のどこが怖いというのだ
リ『俺の妹を落としたんだ、それなりの覚悟・・・あるんだろ』

一『落とすって何?そんな憶えないんだけど!?!』

リ『ならば・・・切り殺してやろう!!!』

一『物騒!?!』

俺は一夏をかばうラウラをすり抜け一夏に迫る

ヴィント・ホーゼをしまい、一夏を思いっきり殴る

一『ぐはっ』

一『我が生涯、いっぺんの悔い無し』ガクッ

リ『つまらないな、それ』

そういつて席に戻る。

騒がしいのは楽しいことだ

嵐はすぐには収まらない（後書き）

こんな感じでいいかな？

結構思いつかないよこれ

リョーマがシスコンみたいになっちゃうな

でももう一回言う、リョーマはシスコンではない

しつこいぐらいにいうぜ

ありがとうございました

平凡とはこの学園にはない(前書き)

今回はただの？学園生活です
どうぞ

平凡とはこの学園にはない

くある日く

リ『食事会ね』

一『そうなんだ、リョーマもどうだ？』

シ『（ここでリョーマを誘うかな普通）』

箒『全員で料理を作ってみんなで回して食べようってことだ』

セ『明日で場所は昼の屋上ですわ』

鈴『ていうか、リョーマとラウラは料理できるの？』

ラ『私は出来ないが・・・あっ、兄上に料理を作らせるな！』

一『なんで？不味いの？』

ラ『そんなことはないが・・・、しかしだな』

リ『別にかまわんが、味は保障しないぞ』

一、箒、セ、シ、鈴『えっ？』

ラ『兄上』

リ『明日の昼だったな』

そう言っただけはあるいて行った

ラ『・・・兄上は本に載っているレシピ通りに作るんだ。なのに、ものすごくおいしいのだ』

鈴『なら、なんで作らせるなって言ったの？』

ラ『私だけの特別にしたかったのだ！』

全『・・・ぷっ』

ラ『笑うな！！』

シ『いや、なんか・・・ラウラってブラコン？』

ラ『なんだ？ブラコンとは？』

一『兄や弟の事が好きだってことだよ』

ラ『それなら当たり前だろ？世界でただ一人の兄上なのだから』

鈴『なら一夏はシスコンよね』

一『なッ』

シ、セ、箒『確かに』

一『そうだったのか・・・？』

〳次の日〳

セ『さあ一夏さん！！私の料理をどうぞ！』

そう言ってセシリアはサンドイッチを俺たちに向ける
リ、一『遠慮なく』

そう言って俺たちはサンドイッチを食う

一『〳〳〳グっ！？』

リ『なかなかだな』

一『（なぜだ？なぜこれがなかなかと言えるんだ？）
セ『一夏さん？どうなんですか？』

一『ああ・・・なかなかだよ』

箒『次は私のだ』

箒は重箱を出した

一『これはすごいな』

箒『さあ食べて見ろ』

リ、一『よし、いただきます』

一『こいつは上手いな』

リ『一夏に同じだ』

箒『そっ、そうか』

箒は嬉しそうだ

鈴『私のも食べてよ』

一『おっ酢豚か』

鈴『そうよ、食べたいって言ってたでしょ？』

一『おうっ！』

リ『ふむ』

一『うまいな〜これ』

リ『確かにな』

セシリアだけ感想がなかなかなんだな、一夏
シ『一応作ったんだけど、どうかな?』

シャルロットは

リ『グラタンとは・・・手が込んでるな』

一『どれどれ?』

シ『ごくっ』

リ、一『旨いな、うん』

シ『ほんと!ありがとう』

リ『最後はおれか、今回は美容と健康にいいハンバーガーを作ってきた』

全『(どうやってつくった!?)』

リ『これは最近ドイツで流行っている料理屋の人気の作品だ』

全『では、さっそく』

みんなが一口食べる

全『うっ』

リ『う?』

全『うまい!これは上手い!』

リ『そうか、自信がなかったが美味いか』

鈴『どうやってこんな味が?』

リ『公開されているレシピ通りに作ったただけだが』

全『(レシピ通りだけでこんなになるか?)』

セ、シ、箒、鈴『作り方は?』

リ『今度教えよう』

と割と楽しい時間だった

く放課後く

リ『やれやれ』

一『ごめんってリョーマ』

リ『謝るなら後ろの女子たちにしろ』

鈴『そうよ、一夏のせいだからね!』

セ『そうですわ! なんでISを担いでグラウンド50週なんて』

リ『俺たちは100週なんだからマシだろ』

鈴『でも、これはきついし。なによりリョーマを見てるともったいない』

一『そうだよ・・・なんで生身でISを、しかも片手で・・・』

リ『鍛えればこんなもの簡単だ』

箒『専用機はまだいいだろうが、訓練機では体にあまりフィットしないからきついぞ』

シ『でも、その代わり25週だからいいんじゃない?』

ラ『喋ってないで走ったらどうだ?』

会話どうり俺達はISを担いでグラウンドをそれぞれ100、50、25週している

理由は、一夏がセシリアの料理の食いすぎで気絶したため遅刻、織斑先生のお怒りを買ったのである

ちなみに俺は後10週で終わる

みんなはまだ20週、箒は5週残っている

一夏はまだ60週残っている

リ『さて、さっさと終わらせるか』

俺はさらに速度を上げる

一『リョーマ速過ぎ・・・』

鈴『そもそもISより速いって・・・』

ラ『さすがは兄上! 負けられん!!』

シ『僕も!!』

セ『私もですわ!!』

箒『私だって!!』

鈴『なら私も!!』

一『なんでみんなあんなに元気なんだ?』

一夏は1人走っていった

（寮内）

リ『おつかれ、一夏』

一『もう、動けない・・・』

リ『俺はもう風呂に入ったがお前は どうする』

一『もう動けない』

リ『俺は、寝るぞ』

一『お休み』

俺達は今相部屋である

ラウラはシャルロットと相部屋

箒、セシリア、鈴は分からない

こんな状況だ

こんな風にこの学園において平凡などない
それがまた面白いものだ

平凡とはこの学園にはない（後書き）

今回はこんな感じです

それでは

読んでくれた方々

感謝です

一夏の周りは暴風地帯（前書き）

今回はショッピングモールです
リョーマは常に安全地帯にいます

一夏の周りは暴風地帯

（一夏視点）

シ『ねえ、一夏。』

一『ん？どうした？シャル』

シ『今度の土曜日に、買い物付き合ってくれない？』

一『ああ、いいよ』

リョーマも誘ったとこうと

（寮内）

一『なあ、リョーマ。今度の土曜にシャルと買い物行くんだけど、一緒にどうだ？』

リ『それは、他に誰か来るのか』

一『いや、シャルがどうするんだか知らないけど多分、誰も誘ってないんじゃないかな？』

リ『なら俺は行かない』

一『え？何で』

リ『それぐらい気が付け、だから女子に「唐変木・オブ・唐変木ズ」と言われるんだ』

一『え？そんな風に呼ばれてんの？俺』

なんか悲しいな

リ『呼ばれる由縁にすら気づかんとはやはり重症だな』

リョーマが何か言ったようだが聞こえなかった

リ『シャルロットも大変だな、ラウラも箒もセシリアも鈴も』

なんかリョーマが珍しくぶつぶつと何かを呟きながらベッドに入っていた

一『なんだ、唐変木・オブ・唐変木ズって』

そう言いながら俺も寝た

（リョーマ視点）

さて一夏とシャルがデートに出かけたのを見送っていると一夏に恋心を抱いている俺命名「一夏のハーレムガールズ」

メンバーはいわずもがな、箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロット
面白そうな予感がするので俺もついて行くことにした

（ショッピングモール『レゾナンス』）

ふむ、広いなこのショッピングモールは、さて一夏は・・・あそこだな

一夏のハーレムガールズがこそこそ隠れながら一夏達を観察している俺は何食わぬ顔で一夏達に近づく

リ『一夏、シャルロット。』

一『あれっ、リョーマ結局来たのか？』

リ『お前らとはいかないと言っただけであって、買い物ぐらい来るさ』

一『そうか、じゃまた別の場所で』

リ『ああ、そうだな』

そう言っで一夏達は歩き出した

俺はラウラ達に近づいた

リ『そんなにこそこそとしていると不審者だぞ、お前ら』

もちろん後ろから

全『なっ！？』

ラ『兄上！驚かさないでください！』

鈴『そうよ！まったく』

セ『リョーマさん、どうしてここに？』

リ『買い物に来て何が悪い』

箒『なぜ私たちがここにいます？』

リ『丸見えだからな、お前ら』

見えないのは一夏達がさっきいた場所ぐらいだ

リ『つけるのはいいが、お前らが怒ることぐらいしか起きんだらう

な』

全『・・・・・・・・』

リ『俺はいく。お前ら程々にな』

ラ『兄上。私もついて行きます』

鈴『ラウラ！なに逃げてんのよ』

ラ『確かに嫁の行動も気になるが久しぶりに兄上と一緒に買い物
したいのだ／＼』

鈴、セ『（さすがブラコン、一夏さんよりそっちが優先とは）』

リ『お前ら行かなくていいのか。もう一夏達いないぞ』

鈴『な！ほんとだ』

セ『逃がしませんわ！って箒さんがいない？』

ラ『嫁の後をつけていったぞ』

セ、鈴『抜け駆けとは！！』

二人は全速力で走って行っ

た『さあ兄上行きましよう』

リ『そうだな』

俺たちも本格的に買い物に満喫し始めた

（水着売り場）

なにやら女子の試着室あたりがうるさい

リ、千『どこの馬鹿が騒いでるのやら』

なぜか近くに織斑先生と山田先生がいた

リ『これは奇遇ですね、千冬さん』

ラ『教官も水着を？』

千『教官と呼ぶなといったはずだぞ、ラウラ。そうだ、ここ最近着
てないからな。いつそのこと買ってしまったおうと思っ

山田先生は私服だが千冬さんはスーツのままだ

リ『千冬さん、その恰好では男も寄ってきませんよ』

千『お前に言われたくないし、第一寄ってくる男など興味がない』

リ『なるほど。そういえば一夏とシャルロットがここらへんにいる

はずですから探してみてはどうです』

千『そうか、ならそうしよう』

千冬さんはすたすたと試着室の方へ歩いて行った。さすがブラコンセンサーでもあるのかと思うぐらいの迷いのなさだ。

リ『さて、ラウラお前はどんな水着がいい』

ラ『兄上が選んでくれるのですか？』

ラウラは恥ずかしいような嬉しいな感じでそわそわしている

リ『一夏が見惚れるようなものを選んでやる』

ラ『なっなんと』

ラウラは顔を真っ赤にして答える

リ『さてと、どれがいいかな・・・』

そうやって水着を選んできると

『ちよつとあんたこれ片づけて』

女性が俺に水着を渡そうとしてきた

リ『調子にのるな、自分で片づけろ』

『あんた、立場が分かっていないようね』

そうやって女性は店員を呼ぶ

ラ『兄上、大丈夫でしょうか』

リ『立場はこちらが上だぞ。なぜなら後ろはIS学園だからな』

ラ『確かにそうですね』

店『あなたですか、どこの学生で？』

リ『IS学園だ』

店『！！それは失礼しました。』

店員は女性に説明すると女性は青ざめて逃げて行った

リ『ばかな女だ、男尊女卑でもあんなこと誰もしなかったぞ』

そんなことをしていると試着室の方から山田先生の悲鳴のような声が聞こえた

かすかに一夏の声も・・・

リ『これがいいかな、どうだラウラ』

ラ『こっこれは・・・似合うでしょうか／＼／』

リ『似合わないなら選んでないな』

シ『やぁリヨーマ、ラウラ』

声がした方を向くとハーレムガールズがいた

リ『シャルロット、一夏はどうした』

シ『織斑先生と買い物だって』

リ『なるほど、これラウラに似合うだろ』

シャルロットに水着を見せた。

シ『確かにラウラに似合うと思うよ。可愛いし』

箒『確かに』

セ『誰が選んだの？』

リ『俺だが』

鈴『・・・なんか軽く悔しい』

リ『というわけだこれにするか、ラウラ』

ラ『でっでは』

リ『よし、では買うか』

ラ『兄上、これまでの買い物も全部兄上もちでしたのでこれは私が』

リ『いいから、今日は俺持ちだ、久しぶりに兄貴させてくれ』

シ『そうだよ、甘えてもいいんじゃない？』

ラ『では、お願いします』

（寮内）

リ『おつかれ、一夏』

一『別に疲れてはないかな』

リ『千冬さんの買い物に付き合ってきたんだろ』

一『でも水着だけだったし』

リ『お前の事だ、白か黒かで黒がいいけど、ごまかして白って言うっ

たのに見抜かれて結局黒にしたんだろ』

一『見てたかのようなってみてただろ』

リ『いや、しらんが』

適当に言ったら当たるとはな

リ『さて、臨海学校は来週だったな』

一『そうだな、リョーマは水着あるのか？』

リ『買ってきた』

一『そうか。お休み』

やれやれ、こいつはどこでも台風を巻き起こすな、まったく
臨海学校か・・・若干の嫌な予感がするな

一夏の周りは暴風地帯（後書き）

こんな感じでした

次はいよいよ最後のはなしですね
でも番外編をいろいろ出します

「兄上の一日観察日記」 著ラウラ（前書き）

今回は番外編です

ついでに今回から書き方を変えてみます

では、どうぞ

「兄上の一日観察日記」 著ラウラ

くリョーマ視点く

『なんだこれは』

俺はラウラに用事があったのでラウラ達の部屋に行った。

しかし、実際ラウラがいなかったので待つことにした、シャルロットがお茶を淹れている間にラウラの机を見た際に「兄上の観察日記」というタイトルの本が目に入った

『ラウラ、見るぞ』

『いいの？勝手に見て？』

シャルロットがお茶を持ってきた。

『俺の観察日記だそうだからいいだろ』

『いいのかなあ？』

適当にページを開いて黙読した

くラウラの日記く

某月某日晴れ

兄上、朝五時起床

（いつから観察してるんだ）

室内で筋トレを開始、腹筋、背筋、腕立て伏せを各100回
五時半、ISスーツに着替えてグランドに移動

グラウンドで素早くストレッチをする

その後八時まで、五キロのグラウンドをひたすら走り続けていた

一周を20分で、二時間は120分だから六周、つまり三十キロ・

・すごい体力だ

さすが兄上

（すごいのか、当たり前だと思ったが）

八時半、授業開始、兄上は授業を聞いてるようでまったく聞いている
ない

そういう私も観察で授業が出来ていない

（何をしたいんだ、ラウラは、勉強を優先しろ）

十二時、今日の兄上の昼はチャーハンだった

兄上は最近中華にはまっているのかラーメンやチャーハンなどを食べている

（別にいいだろうが）

一時、授業の様子は午前と同じ

放課後、第三アリーナで一夏VSセシリア、鈴の模擬戦（という名のイジメ）をしている

『一夏さん！！今日という今日は許せませんわ！！』

『なんで？俺何かした？』

『はあ？あんた自分がなにしたのか分かんないの？』

『わかるかあ！説明もとむ！！』

ちなみに兄上は観客席で観戦している

私は兄上の隣で見ている

ちなみに原因は私が一夏（嫁）の布団で寝ることである

『さっさとくたばりなさい!!』

セシリアはスターライトMK?を構えて一夏に叫ぶ

それと同時にブルーティアーズも展開する

『なあ!それはさすがに死んでしまう!!』

とかいいつつ一夏（嫁）は回避行動を続けている

兄上はいつもの無表情で一夏（嫁）の動きがああだ、こうだと言っている

寮内、八時、兄上は再び筋トレを始める回数は朝と同じ

一夏（嫁）はそんな兄上を毎回化け物のような目で見ていたしかに兄上は化け物じみているが化け物ではないぞ

（あんまりフォローできてないな）

その後、ストレッチを開始する

それが終わるといつもの全国料理集を読み始める

十一時、睡眠

とこんな感じで兄上は日々を過ごしている

（リョーマ視点）

『ふむ』

『兄上どうしたのです・・・か。そっそれは!』

ラウラが日記を奪おうと飛び掛かってくるが受け流して関節を決める

『いつ、痛いです兄上!! ギブ! ギブ!』

『ほう、いつの間にギブなんて言葉を覚えたんだ、ラウラ』

とか言いつつラウラを放す

『シャルロット! なぜ兄上にこれを読ませたんだ!』

『リョーマが勝手に読みだしたんだよ』

『俺の観察日記だろ、なら読んでも別にいいだろ』

『兄上、用事があったのでは?』

『そうだ、実は明日買い物に行こうと思ってな、お前もどうだ』

『もちろん! 行かせてもらいます!』

『それ僕も行っている?』

シャルロットか・・・

『別に問題ない』

『ありがとう』

『・・・』

ラウラは少し不機嫌だ

『そうだ、一夏も誘うか』

『えっ』

ラウラにこっそり耳打ちする

「もし俺と一緒に買い物に行きたいのなら、一夏をシャルロットにあてることが出来るぞ。ましてや他の奴らも誘えば進展もしないだろうしな」

「なるほど、さすが兄上そこまで計算を」

『なにこそこそ話してるの？』

『いや、ちよつとな』

『そう』

シャルロットは一夏が来ることでデートでも想像しているのか嬉しそうに明日の支度を始めた

『さて、俺は戻るぞ』

『うん、お休み』

『おやすみなさい、兄上』

そういえば、いつから観察日記を書き始めていたんだろう
日記をつける必要があったのか
まあいいか

「兄上の一日観察日記」 著ラウラ（後書き）

こんなものを書いてみました

さて今回書き方を変えてみました

とある感想で以前では見にくいと言われたので

さてこれ読んで感想をくれたらうれしいです

それでは

穏やかではない臨海学校（前書き）

臨海学校で最終回って前に言ってたけど
小説手に入って書けるのでまだまだ続きます
どうぞ

穏やかではない臨海学校

（リョーマ視点）

『海っ！見えたあっ！』

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声を上げる
臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は
穏やかで、心地よさそうな潮風にゆっくりと揺らんでいた

『おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ』

そうつぶやくのは俺の前の席である一夏だ

『う、うん？ そうだねっ』

一夏の隣の席を見事勝ち取ったシャルロットだったが、出発してか
らずっと上の空である

『それ、そんなに気に入ったのか？』

『えっ、あ、うん！ まあ、ね』

前の席だから見えないがおそらくこの前の買い物でシャルロットに
何かプレゼントしたんだろう

『まったく、シャルロットさんたら朝から偉くご機嫌ですわね』

一夏たちの通路を挟んで向こう側、セシリアがむすっとした顔で言
ってくる

一夏も馬鹿な奴だな、見ろ、箒とラウラが黒い
でも二人とも、なんだかそわそわしている
そんなに水着が恥ずかしいか、一夏に見せるのが

『そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ』

織斑先生の言葉に全員が従い一気に静かになる

『今日から世話になる花月荘だ。従業員の仕事を増やさないように
注意しろ』

『』『よろしくおねがします』『』

織斑先生の言葉に続いて全員で挨拶をする、そしていつもお世話に
なっているとのことでの女将さんの登場。

『はい、みなさんよろしくお願ひします。今回の一年生の皆さんは
元気のよい方ばかりで。』

そして全員が旅館に入っていく中、俺と一夏と視線があった。

『あら、あなた方が』

『ええ、今回初めての男子となります。お前ら挨拶をしろ』

『初めまして、織斑一夏です』

『あら、弟さんですよね？』

『ええ、まあ不出来な弟ですがね』

『うふふ、千冬さんは弟さんには厳しいのねしっかりしてるように
見えるのに。それでそちらのかたは？』

そして俺の方に視線が向けられたので

『リョーマ・ボーデヴィツヒです。』

『お願いしますね』

挨拶が終わり織斑先生に連れられて部屋の前に来る

『織斑先生？』

『どうした織斑』

『部屋に俺たちと先生の名前がありますが・・・』

『同じ部屋だから当たり前だろ』

一夏の場合はハーレムガールズが来るから分かるがなぜ俺まで

『一応だ』

『一応ですか』

相変わらず人の心を読むのがお上手だ

く海く

『いや〜いい景色だな〜』

『久しぶりだな、海は』

俺も一夏も海パンだけである

『一夏、ずいぶんとほっそりしてるな、筋肉しつかりとついているのか』

『リョーマに比べたらないけどそれなりには鍛えてあるよ』

何て他愛無い話をしていると

『一夏!!』

『うぐっ! 鈴か? 降りろよ』

鈴が一夏に飛びつき肩車状態になっている

『やだよ! 下りないもんね!』

子供だな、見た目通り

『鈴さん! 何してるのですか!』

セシリアも駆けつけてきた

『いいじゃない、別に何しようとも』

『いいわけないですわ! (羨ましい)』

しぶしぶ鈴は一夏から降りた

ついでにほかの女子も集まってきてきゃあ騒いでいる

『一夏さん! オイルを塗って下さい』

『おっおう』

セシリアは一夏にオイル塗を頼んでいた

『一夏、オイルは塗る前に掌で温かくしてから塗るんだぞ』

『そうなの?』

『ああ、そうしないとあまり意味がない』

俺はそれだけ言うのと海に潜りに行った

海はいい感じに深く冷たく夏の暑さに対抗していた

もっとも暑さ寒さはあまり感じないから意味ないが

しばらく泳いでいると近くを船が通って行った乗組員がやたらとあちこちを見回して警戒しているからよからぬことをしているようだ

が何分証拠がないここは退いておこう

後ろを向くと浜がものすごく遠かった

10キロはあるだろう、泳ぎ過ぎたな

帰ってくる途中浜から少し離れた海岸に箒がいた

『何してるんだ、あいつは』

まあ事情があるんだろう

浜に戻ると一夏達がビーチバレーをしていた

ラウラがその少し横で伸びていた

何があったんだ、顔が赤いな・・・一夏に水着を褒められて浮かれたところにボールでも当たったか

『リョーマ！お前もやろうぜ』

女子の顔が若干青ざめる

『いいだろう、ただしお前の敵でな』

『まじで！？』

ついでに織斑先生も来て大変なことになっていた

く大食堂く

『セシリア、そんなに我慢することか』

『我慢することですわ』

セシリアは俺の隣そのセシリアの隣は一夏である

『セシリアいいな、男子二人に挟まれて』

何て言ってる女子がいるがセシリアはただ一夏の隣に座りたいだけだ
でも正座に慣れてないセシリアは相当きつそうだ
ちなみに一夏の反対側はシャルロットである

しばらく三人でぎゃあぎゃあ騒いでると

『貴様らは静かに飯を食えんのか？』

織斑先生の一言で一夏達は一気に静かになる

『リョーマさんは足が痛くならないのですか？』

『スパイ活動をするかもしれないからさまざまな動作をたたき込ま
れている』

『スパイって・・・』

『実際しなかったがな』

俺は刺身を一口

『箸も随分上手に使うのですね』

『まあな』

『ふ~~~~~』

シャルロットが何か悶えている

『一夏、何があった』

『シャルがわさび一気に食った』

『何してるんだ、シャルロット』

シャルロットはしばらく復帰できなかった

〵部屋〵

『織斑、久しぶりにマッサージしろ』

『マッサージとは』

『俺マッサージ上手いんだよ』

そしてマッサージを一夏は初めた

相当気持ちがいらしく艶やかな声を織斑先生は上げている
・・・おや、外に人の気配・・・しかもハーレムガールズか

『先生、外』

『うん？リョーマ』

襖に顔を向ける開けろと言うことか

ガララ

『『『『きやああ』』』』』

『何してる、お前ら』

『べべべ、別に何もしてませんわ』

『そうよ！ただ部屋の前にいただけよ』

『楔に顔近づけてか』

全員顔から床にぶつかっていた

『一夏、お前はいったい何をしていた!!』

『何って、マッサージだけど』

『』『』『マッサージ?』『』『』『』

『一夏、お前風呂に入ってこい』

『えっ、あ、はい』

一夏は風呂に入り部屋を出て行った

『リョーマジュース出せ』

『はいはい』

俺はみんなにジュースを、織斑先生にビールを渡す

『気が利くな、リョーマ』

『やれやれ、どうせ飲む気でしょ千冬さん』

『』『』『千冬さん??』『』『』『』

『ここでは』

『ビールを勤務中に飲む教師は失格だと思いましたが』

『ぬっしまった、はめられたか』

今更か、遅いな、ついでにみんなも気が付いた

『まさか、これ』

『そうだ、さて、直球に聞こうか』

一夏についてだろうな

『お前ら、一夏のどこに惚れている？』

『『『『ぶほっつ！』『』『』』』』

汚いな、ジュースを吹くな

『わ、私は・・・その・・・ち、小さい頃より腕が上がったのが良いと言うか・・・』

と、恥ずかしそうに、モジモジしている。箒

『あたしは・・・えっと・・・より男前になっているがいいなあ・・・て』

モゴモゴさせて、小さい声で言う鈴

『わ、わたくしは・・・なんて言えбайいんでしょう・・・か、格好いいからでしょうか・・・』

さらに凰よりもモゴモゴさせて喋るセシリア
何で女子たちの告白を聞かされてるんだ俺は

『・・・そうか』

千冬さん・・・なんだその嬉しさ半分寂しさ半分の顔は・・・やっぱりブラコンか

『僕———あの、私は・・・優しいところ、です』

ぽつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささとは裏腹に真

摯な響きがあった。

『ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ?』

『そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ』

シャルロットは照れ笑いをしながら熱くなった頬をぱたと仰ぐ、四人はその様子を羨ましいのか悔しいのか、じいーっとシャルロットを見つめた。

『で、お前は?』

さっきから一言も話していないラウラに、千冬さんが話しかけるとビクッと身をすくませながら言葉を紡ぎ始めた。

『つ、強いところが、でしょうか……。』

『あいつはリョーマに比べたら断然弱いぞ』

『……。そうですが、自分にはない強さが……。あるので』

ベッキッ!!

失礼、俺がスチール缶を握りつぶした音だ、気にするな

『あいつは、家事全般が出来るし、マッサージも上手い、付き合える女は得だな。欲しいか?』

『』『』『くれるんですか!?』『』『』『』

『やるかバカ』

千冬さんがそう言うのと、女子一同はええ〜……。と声なき突っ込みが聞こえた気がした。

『女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする、ガキども』

誰から、どう奪うんだ、別に誰かの男でもないし

『リヨーマ』

『なんです、千冬さん』

『お前は、ラウラが一夏を好きだと知っているが何とも思わないのか？』

『もう答えは出てますよ』

俺は板になったスチール缶を見せる

『相当だな・・・これは』

『まあこれはラウラの事ですからそこまで干渉はしないですよ・・・よほどのことがない限り』

『その余程がないことを願うぞ』

千冬さんは死にかねんと口だけで呟いていた

『そういえば、兄上』

さっきの俺と千冬さんのやり取りを聞いて若干真っ青になっていた女子たちだったがラウラがいち早く元に戻り質問をしてきた

『なんだ、ラウラ』

『兄上は教官といつ知り合ったので？随分仲がよろしいようですが』
『『それは気になってい（ましたわ）（たよ）（たのよ）（ぞ）』』』』

『第二回モンドグロッソの時だが』

『だが、それっきりだぞ？』

『そうなのですか』

『さて、お前ら、もう部屋に帰れ』

その言葉でこの場は解散した

〓次の日〓

ちなみに二日目はISの武装試験運用の日であるので専用機持ちは異常に大変だ。と、言うことで専用機持ちは他のやつらと違う場所で行われることとなっている。俺と一夏のは拡張領域がない、だから暇である。そして織斑先生が前に立ち

『それでお前らは専用機持ちだ』『あのう』、うん？なんだオルコツト』

『箒さんは違うのでは』

『ああ、その件か。それは『ちーちゃああああああん！！』・・
・あの馬鹿』

森から勢いよく何かが走ってくる
声からしてあの人しかないが・・

『やあ、会いたかったよちーちゃん。さあハグハグしよう、一緒に
愛を・・痛いよ、ちーちゃん』

森から勢いよく出てきたのは東博士だった。その後高く飛び上がったが見事織斑先生のアイアンクロード頭を抑えられている。

『なぜここにいたので、東博士』

『おおっ！リっ君！ほんとに久しぶり！いや〓男前になったね〓』

『東博士は相変わらずで』

束博士は俺の返しに嬉しそうに笑顔を作る
その後箒の元に行く

『やあ！』

『・・・どうも』

『ほんと久しぶりだねえ、こうして会うのは何年ぶりだろう。ほんと大きくなったねえ箒ちゃん、特におっぱいが』

がんっ！

『殴りますよ』

『殴ってからいったよ、リっ君、箒ちゃんがいじめるよ』

『俺に助けを求めないでください』

そしてこんな俺らのやりとりには一同はポカーンとしている状態であった、そんな時

『あ、あのうこの合宿では関係者以外立ち入り禁止の』

『これは、珍妙奇天烈なこと言うね。ISにおいての関係者は私をおいて他にいないよ』

『そ、そうですね』

山田先生ですら撃沈、大体この人を止めようなんて千冬さんぐらいだ。

『おい、束。自己紹介ぐらいはしろ。私達以外の生徒が驚いている』

『ええ、面倒だな。私が天才束さんだよ、よろしく。はい終わり』

そして全員がこの人があの篠ノ之束だと分かると全員が驚愕した、まあこれがあのISの生みの親だとは俺も言いたくはない。しかし

これだからこそそのISなのかもしれない。

『・・・それで頼んでいたものは・・・』

箒がそう言うのと束博士は待っていましたとばかりに眼を光らせて、そして上を指差して

『カモーン』

そう言うのと上空から銀色の正方形の物体が落ちてきた

『じゃ、じゃーん、これこそが箒ちゃんの専用機！その名も『紅椿』（あかつばき）！現在存在するISのスペックを凌駕する束さんお手製のISだよ！』

『げ、現在のISを凌駕するだと・・・』

ラウラがそう口にした、それは簡単言えば最新鋭にして最高性能のISということだ。しかもこの紅の色が眩しいほどに綺麗であった。

『でも、この束さんが造った現在のISだけだね』

『どういことです？』

一夏が代表して質問する

『りっ君が造ったりっ君の専用機シュヴァルツェア・オルカーンこれはさすがの束さんでも超えられないよ』

『そんなにすごいのかリョーマのISは』

『10年間も研究してたからな、まあ、束博士より進んでは思わなかったが』

『それじゃあ箒ちゃん、フィッティングしちやおつか。それじゃあリッ君サポートよろしく』

俺は言われて紅椿の後ろに回り、箒が乗った事を確認すると、俺はコンソールを開いた。

『おお、箒ちゃんまた剣の腕上達したんだね。うんうん、お姉さんとしても鼻が高いよ』

『・・・』

『無視されちゃった、けどいいもん。それでリッ君どう？』

『武器データ転送しますよ』

『うん、お願いね』

そしてものの一分で終了。

『う、うそ・・・ですよね、織斑先生。ISの最適化だけでも手動でやれば十分はかかるのに』

『いやあ、リッ君のおかげで三分のところ一分で終われたよ。うんうん、さすがこの東さんが認めた天才』

『三分で終わったんなら手伝う必要あったのですか』

『うんうん、もちもち。それじゃあこれでOK♪あとは自動処理にまかせてパーソナラズするだろうし、それじゃあいっくんのもみしてくれる、東さん興味津々なんだよう』

そう言うで一夏はすぐに白式を呼び、東姉はデータをよび、さつきと同じようにしている。

『ふーん、奇妙なフラグメントマップになっているね、やっぱし男の子だからかな?』

やはりフラグメントマップは通常ではないらしい、ちなみにフラグメントマップとはISの自己進化の道筋、人間でいうところの遺伝子である。

『あのう束さん、俺なんでISに乗れるんですかね?』

『うーん、わかんないな』

『あのう、それとこいつって後付武装ってホントにないんですか?』
『うん、だってこれ私が作ったわけだし。そういう風にしたら、よ、そしたらなんと第一形態から単一仕様能力が出来たんだな、さすが私』

『え、これって束さんがつくったんですか?』

『そうだよ、おっ! おわったみたいだね』

そう言うのと、紅椿の設定は終了しており箒がISの手を握ったり、開いたりしていた。

『お、できたようだねえ。それじゃあ試運転もかねて箒ちゃん飛んでみて思い通りにうごくだろうから』

そういうと箒は紅椿を空中に上げた、相当の速さだなたぶんラウラのあの眼で戦ってやっとうぐらいだろう。

『どう、紅椿は? 箒ちゃんが思っている以上に動くでしょう』

『……はい』

現在オーブンチャンネルでの会話なので俺らも聞いている状態だ。

『それじゃあまずは武器のデータを送るよ』

そして上ではそのデータを向け取った筈が二本の刀を抜き構えた。

『それじゃあ次に武器の解説をするよ、まずは右のが『雨月』、これは対一用の武装で刃部分からエネルギー刃を放出し、相手を蜂の巣にできるはずだよ、そして左にあるのが『空裂』、これは対集団用の武装でこの場合は斬撃の範囲を自動で展開してそのエネルギー刃を放出する武器だよ、それじゃあ使ってみよう』

束博士は言うや否やミサイルを発射するボタンを押した
海面からいきなりミサイルが飛んできた

『これでも・・・この紅椿なら！』

筈は一瞬でミサイルを落として見せた
しかし

『緊急事態だ、篠ノ之降りてこい』

先生の声から相当緊急なんだろう

俺たちはのちにそれを体験することになる

穏やかではない臨海学校（後書き）

こんな感じです

ありがとうございました

羽ばたく「紅」 墜ちる「白」 (前書き)

今回は一夏が福音に落とされるとここまでです
どうぞ

羽ばたく「紅」 墜ちる「白」

（リョーマ視点）

緊急事態の内容はこうだった

1. アメリカ、イスラエル共同で造られたIS「銀の福音」（シルバリオ・ゴスペル）が原因不明の暴走
2. その福音がしばらくするとこの海域にくる
3. なので俺たちで対処しろ

とのことだった

『織斑先生、福音のデータ、見せてもらえますか』

『構わん、これだ』

・・・なかなかハイスペックな機体だな、最高速が2650キロとはな・・・俺のオルカーンの方が速い
しかしこの銀の鐘は厄介シルバ・ベルだな、全砲身36門の同時展開による攻撃か

『リョーマ、お前には今回大佐として私と同等の権利と今回の作戦で指揮に徹底しろとの指示が来ている』

『・・・わかりました』

一夏達だけでどうにかなるのか・・・わからんな

『これだけの武装となると長期戦は厳しいね』

『一撃撃破ということだな』

シャルロットとラウラが話を始める

『ならば、一夏の零落白夜が一番か』

『しかし、福音に気付かれず接近するには相当の速度がいるぞ』

『ならば私の強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」がありますわ』

『では、それを『ちょっと待った』・・・束か』

『ちょっと待つんだちーちゃん！この束さんにとっておきの作戦があるんだよ！！』

『作戦だと？』

・・・そうか、今回もか、今回も貴方の仕業か

束博士は一回俺を見てにやりと笑う・・・確信した、この人だ

『紅椿なら換装^{パッケージ}装備無しで高速移動できるんだよ』

『で、ですが』

『オルコット、それはインストールしてあるのか？』

『・・・しております』

『ならば、束の作戦でいくか・・・気がのらんが』

『織斑先生、緊急事態なのでそのような言葉はあまり言ってもらいたくはないのですが』

『そうか・・・すまないな』

『なあ、シャル』

『なに？一夏』

『リョーマの顔ってさ』

『うん、まるで軍人だね』

『当たり前だろ、兄上の階級は大佐、さまざまな戦争、紛争を収め何万の兵を束ねてきたんだぞ』

『同年代とは思えないな、それ』

聞こえてないつもりだろうが、ばっちり聞こえてるぞ

『では、織斑・篠ノ之2名による目標の追跡及び撃墜、作戦開始は30分後。各員、ただちに準備にかかれ』

織斑先生の合図で皆が動き出した

（一夏視点）

どうしてこうなったんだ、なんで俺がこんな作戦を・・・
一撃必殺作戦何て・・・はつきり言ってリョーマなら絶対勝てるだろうでも、仕方ない切り替えよう

『じゃあ、箒。よろしく頼む』

『本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ』

作戦上、移動のすべてを箒に任せるので、一夏は箒の背中に乗っかる形になった。

『それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？』

『ああ、そうだな。でも箒、先生達が言ったけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるか分からない。十分に注意をして――』
『無論、わかっているさ。ふふ、どうした？怖いのか？』

『そうじゃねえって。あのな、箒――』

『ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいい』

『・・・・・・・・』

一夏はどうにもすっきりしない不安をかかえたまま、紅椿の背中へと乗った。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか?』

ISのオープン・チャンネルから千冬の声が聞こえる。

『織斑、篠ノ之の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ』

『『了解』』

『織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか?』

『そうだな。だが、無理はするな。お前は紅椿を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るともかぎらない』

『わかりました。できる範囲で支援をします』

箒のそれは一見落ち着いた返事のようなだがやはり口調は喜色に弾んでいた。

『一夏』

『どうした、リョーマ?』

オープン・チャンネルからプライベート・チャンネルに切り替わりリョーマの声が届く。

『箒は浮かれていていささか危険だ、もしもの時はお前がフォローしろ』

『分かった、行ってくる』

俺たちは福音に向かって飛び立った

（リョーマ視点）

『織斑先生、俺の出撃の許可を』

『出せると思ってるのか？』

『箒のあの浮かれ具合は問題です』

『・・・忘れてるのか？お前は私と同じ立場だ』

『・・・行つて来ます』

海岸にて・・・はるか遠くで爆発が見える
いくか

『兄上』

『どうした、お前たち』

『我々も連れて行つて下さい』

『断る、俺一人で充分だ』

『何でよ！』

『今は、一夏達の回収だから、そんなに人数はいらん』

『うっ・・・』

沈黙したラウラ達を無視して俺は飛び立った

『見つけた・・・これは』

一夏が銀の鐘の攻撃を受けて海に落下しているところだった

『一夏・・・一夏』

『箒、放心してる場合じゃない一夏をさっさと回収しろ』

『・・・！ああ、分かった』

『貴様の処罰は帰ってからだ、かくごしておけ』

『・・・ああ』

『くだらんな、力に溺れるなど』

『・・・！！』

俺は、福音に向けて、ヴィント・シュトウースを放ち距離をとらせた

『帰るぞ、箒』

『分かった・・・一夏』

福音は追ってはこなかった

羽ばたく「紅」 墜ちる「白」 (後書き)

こんな感じです

今回は時間をかけてお送りします

もう一つ俺が書いた I S 緑を纏うもの もよろしく
ありがとうございました

舞う「黒」 甦る「白」 (前書き)

今回で臨海学校編終了です
どうぞ

舞う「黒」 甦る「白」

（箒視点）

『・・・』

旅館の一室、壁の時計は四時前を指している

ベッドに横たわる一夏は、もう三時間以上も目覚めないままだった。その傍らにいる私はずっとうなだれている

リボンを失って垂れた髪がまるで私の気持ちを表してるようだった

『（私のせいだ・・・）』

一夏は先ほどの戦闘による怪我で体中に包帯が巻かれている

『（私がしっかりしていれば一夏はこんな目には――！！）』

ぎゅうっとスカートを握り締める、拳が白く色を失うほどに強く、強く握りしめた

『（私は・・・どうして、いつも・・・）』

いつも、力を手に入れるとそれに流されてしまう
それを使いたくて仕方がない
わき起こる衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある

『（何のためにいつも修行をしてきたんだっ・・・！）』

どんなに後悔してももう遅いことなど分かってる

『（私は・・・もうISには・・・）』

一つの決心がつこうとした瞬間

『あー、あー、わかりやすいわねえ』

こちらに一切の許可なく鈴が入ってきた

『・・・・・・・・』

『あのさあ、一夏がこうなったのって、アンタのせいなんですよ？』

ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態になっている

全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態は、同時にISのは除を深く受けた状態になる

それ故に、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚ませなくなってしまうのだ

『・・・・・・・・』

『で、落ち込んでますってポーズ？——っざけんじゃないわよ！』

突然烈火のごとく怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままの私の胸ぐらを掴んで無理やり立たせる

『やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ！』

『わ、私・・・は、もうISは・・・使わない』

『ッ———！！』

バシンっ！

頬を打たれ、私は支えを失い床に倒れる

『甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちつつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは——』

鈴の瞳が私の瞳を直視する

そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情

『戦うべきに戦えない、臆病者か』

その言葉で私の心の奥の闘志に火がついた

『——ど……。』

口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる

『どうしろというんだ！もう敵の居場所も分からない！戦えるなら、私だって戦う！』

言葉だけではない、これは私の気持ちだ

『やっとやる気になったわね、……。あーあ、めんどくさかった』

『な、何？』

『居場所なら分かるわ。今ラウラが——』

言葉の途中でドアが開く。そこには真っ黒な軍服に身を包んだラウラが立っていた

『出たぞ、ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で確認したぞ』

ブック端末を片手に部屋に入ってくるラウラを鈴はにやりとした顔で迎える

『さすが、ドイツ軍特殊部隊。やるわね』

『ふん……。お前の方はどうなんだ。準備は出来てるのか』
『当然。シャルロットとセシリアはどうなの』

『ああ、それなら――』

ラウラがドアの方へと視線をやる。そして、それはすぐに開かれた

『たった今完了しましたわ』

『準備オッケーだよ。いつでもいける』

専用機持ちが全員そろうと、それぞれが私を見る

『で、アンタはどうするの？』

『私は……。私は』

ぎゅうつと拳を握る。しかし今度は後悔ではない！

『戦う……。戦って勝つ！今度こそ負けはしない！』

一夏の仇とらせてもらう！！

『決まりね、作戦は筈を入れるBでいいわね』

『ああ、あとは行きながら確認だ』

全員がドアに向かうがドアがいきなり開いた

『どこに行く気だ、大馬鹿者共』

ラウラとほぼ同じ黒の軍服をきたリョーマが相変わらずの抑揚のない、声で言った

（リョーマ視点）

『もう一度言おう、どこに行く気だ』

『決まってんでしょ、福音のときよ』

『作戦が決まるまで待機といわれたはずだ』

『作戦なら私達で決めましたわ』

『実践をほとんど知らない小娘達の作戦か・・・反吐が出るな』

『それでも・・・反吐が出るような作戦でも僕達はやるよ』

『そうだ、一夏を傷つけられて黙ってられるものか』

『たとえば、兄上でも・・・邪魔はさせません』

・・・なかなかいい目をする
だがまだぬるい

『邪魔はさせないか・・・なら』

俺は戦闘態勢をとり殺気を飛ばす

数多の戦争を潜り抜けるうちについたものだ

威嚇の殺気ではない、殺すための殺気

ラウラたちは汗をかきながらも俺に向かう

『ふふっ』

『『『『えっ?』』』』

『ふふふ、はははははは』

俺はラウラたちが面白く「笑って」しまった

『はははは、いいだろ、俺もついて行ってやろう』

『あ、兄上?』

『俺は織斑先生と同等の立場だ、つまり、おれが作戦を考えたということにしておけばお前らは怒られずにすむ』

『試したってわけ?』

『まって、鈴でもあるけど・・・』

『兄上、今「笑い」ましたよね?』

『・・・! 面白いえば・・・そうか、これが・・・』

感情か・・・ふっかなかいいものじゃないか

一夏・・・お前はまだまだ強くなる

だから、はやくかけ上げれ次へと

奴は膝を抱え丸くなっていた

『作戦、開始』

俺はそう呟く

ラウラはカノンを福音に向けて・・・放った

超音速で砲弾は福音に向かい直撃する

『初弾命中。続けて砲撃を行なう』

福音から五キロ離れた場所に浮かんでいるIS「シュヴァルツェア・レーゲン」とラウラは、福音が反撃にうつるよりも速く次弾を発射した

その姿は通常装備と大きく異なり八〇口径レールカノン《ブリッツ》をそれぞれ肩に装備している

『（敵機接近まで・・・四〇〇〇・・・三〇〇〇——くっ！予想よりも速い！）』

あっという間に距離が一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る

その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を打ち落としながらラウラへ接近していた

『ちいっ！』

砲撃仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい

対して、機動に特化した福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

——避けられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた

『——セシリア！！』

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる青一色の機体——強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備した『ブルー・ティアーズ』によるステルスモードからの強襲だった

『敵機Bを認識。排除行動へ移る』

『遅いよ』

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う

それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩すが、一瞬のことで、すぐさま三機目の敵機に対して銀の鐘による反撃を開始した

『おっと。悪いけど、この「ガーデン・カーテン」は、そのくらいじゃ落ちないよ』

リヴァイブ専用防御パッケージは実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ

防御の間も得意の高速切替でアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する

『・・・優先順位を変更。現状からの離脱を最優先に』

全方位にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間全スラスターを開いて強行突破を計る

『させるかあっ!!』

海面が膨れあがり、爆ぜる

飛び出してきたのは「紅椿」とその背中に乗った「甲龍」だった

『離脱する前にたたき落とす!』

福音へと突撃する紅椿。その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パッケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる
両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設した二つの砲口がその姿を現す。計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた

『!!!』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。しかも、福音に勝とも劣らない弾雨。増幅された衝撃砲——言うなれば、熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった

『やりましたの!?!』

『——まだよ!』

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させてはいなかった

『銀の鐘最大稼働——開始』

両手をいっぱい広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。

——刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃がはじまった

『くっ!!』

『箒! 僕の後ろに!』

前回の失敗をふまえて、紅椿は機能限定状態にある。展開装甲を多用したことから起きたエネルギー切れを防ぐため、現在は防御時にも自発作動しないように設定し直したのだった

もちろん、そう設定し直したのは、防御をシャルロットに任せられるからこそである。集団戦闘の利点を最大利用した役割分担であった

『それにしても・・・これはちよつと、きついね』

防御専用パッケージであっても、福音の異常な連射を立て続けに受け続けるのは危うかった

そうこうしている間にも物理シールドの一枚、完全に破壊される

『ラウラ！セシリア！お願い！』

『言われずとも！』

『お任せになって！』

後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアが左右から射撃を開始する

『足が止まればこっちのもんよ！』

そして直下からの鈴の突撃。双天牙月による斬撃のあと、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせる。――狙いは、頭部に接続されたマルチスラスタ―銀の鐘

『もらったあああっ！！』

エネルギー弾を全身に浴びながら、鈴の攻撃は止まらない
同じく拡散衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けながら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪った

『はっ、はっ・・・！どうよ――――ぐッ！？』

片側だけの翼になりながら、それでも福音は体勢を立て直し、鈴の左腕へと回し蹴りを叩きこむ。脚部スラスターで加速されたそれは、一撃で鈴の腕部アーマーを破壊し、海へ墜すとす

『鈴！おのれっ——！！』

箒は両手に刀を持ち、福音へと斬りかかる

その急加速に一瞬反応を失った福音の、右肩へ刃が食い込んだ

『（獲った——！！）』

その思った刹那、左右両方の刃を手のひらで握りしめる

『なっ！？』

刀身から放出されるエネルギーで装甲が焼き切られるが、お構いなしに福音は両腕を最大にまで広げ、残ったもう一つの翼が砲口を開放して待っていた

『箒！武器を捨てて緊急回避しろ！』

しかし、箒は武器を手放さない

『（・・・ここで引いて、何のための・・・）』

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた

『（何のための力かっ！！）』

エネルギー弾が触れる寸前にぐるんと一回転する。その瞬間、爪先の展開装甲からエネルギー刃を発生させる

『はああああっ!!』

かかと落としのような格好で残った片翼を切り落とし、海面へ墜ちていった

『はっ、はあっ、はあっ・・・!』

『無事か!?!』

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は呼吸をゆっくりと落ち着けていく

『私は・・・大丈夫だ。それより福音は――』

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその時、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ

『!?!』

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った「銀の福音」が自らを抱くようにうずくまっている

『これは・・・!?! 一体、何が起きているんだ・・・?』

『!?! まずい! これは――『第二形態移行』だ!』

ラウラの叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける

『キアアアア・・・!!』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛びかかる

『なにっ!?!』

あまりに速い動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる

そして、切断された頭部から、ゆっくりと、エネルギーの翼が生えた

『ラウラを離せえっ!』

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められて止まった

『よせ!逃げろ!こいつは――』

その言葉は最後まで続かず、ラウラは眩いほどの輝きと美しさを併せ持ったエネルギーの翼に抱かれる

刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で食らい、全身をズタズタにされてラウラは海へと墜ちた

『ラウラ!よくもっ・・・!』

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンを呼び出す。福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた

ドンッ!!

しかし、その爆音はショットガンのもではなかった

胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした

『な、何ですの！？この性能・・・軍用とはいえ、あまりに異常な――』

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。瞬時加速

――それも、両手両足の計四カ所同時着火による爆発加速だった

『くっ！？』

長大な銃は接近されると弱い。距離を置いて銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまう

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃もできず、セシリアは蒼海へと沈められた

『私の仲間を――よくも！』

急加速によって接近した筈は、続けざまに斬撃を放ち続ける展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる

「うおおおおっ！！」

お互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押されはじめる

『(いける!これならっ——)』

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし——

キュウウン……

『なっ!また、エネルギー切れだど!?——ぐあっ!』

その隙を見逃さず、福音の右手が箒の首を捕まえる
そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいった

『ぐっ、うつ……!』

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しい声が漏れる
福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと
進化した銀の鐘が紅椿の全身を包んでいた

『(ここまでか……。情けない……。)』

ぽうっと光の翼が輝きを増していく、だが、箒たちの間を粒子が通る
福音は箒から手を離し距離をとる

『さっきから好き放題だな福音』

『リョ、リョーマ』

『下がれ箒、ここからは俺がやる』

箒は素直に下がっていく

『……ふっ、大切な友と妹を傷つけた罰、受けてもらうぞ、福音』

（箒視点）

ただ、眺めてることしか出来なかった

落ちていったみんなを拾い上げ、みんなで戦いを眺めていた

リョーマは福音のスピードの着いていくどころかさらに速く福音を
圧倒していた

銀の鐘をマシンガンで打ち落とし、接近してきた場合はレーザーソ
ードで対応し圧倒し、蹴りや拳で殴り飛ばす
じわじわと罅り殺しのように戦闘をしている

『リョーマさんのあの戦い方・・・私の時よりひどいですわ』

『ていうか、福音以上のスピードって』

『銀の鐘も完全に防いでる』

『しかし、兄上は何を待ってるんだ？どうしてすぐに片付けないの
だろうか』

たしかにアレだけの性能差なら一瞬でかたがつくはずだ・・・
一旦思考を止める・・・すると私の頭の中にはただ一つのことだけ
が浮かんでいた

――会いたい

――一夏に、会いたい

――すぐに会いたい。今会いたい

――ああ、ああ、会いたい

『いち、か・・・』

『？箒？』

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた

『一夏……』

ただ……きて欲しいと

イイインツ……！！

『!?!?』

後ろから音がして全員が振り向く
全員の視線の先には、白く、輝きを放つ機体がある

『あ……あ、あっ……』

じわりと目尻に涙が浮かぶ
わずかに潤んだ視界に見えるのは、白式第二形態・雪羅を纏った一夏だった

『一夏っ、一夏なのだな!?!? 体は、傷はっ……!』

私は少し涙声で一夏に聞く

『おう。待たせたな』

『よかつ……よかつた……本当に……』

『なんだよ、泣いてるのか?』

『な、泣いてなどいないっ!』

ぐしぐしと目元をぬぐう、一夏は優しく私の頭を撫でる

『ちょうどよかったかもな。これ、やるよ』
『え……？』

一夏は持っていたものを私に渡す

『り、リボン……？』

『誕生日、おめでとうな』

『あっ……』

『それ、せつかくだし使えよ』

『あ、ああ……』

『じゃあ、行ってくる。——まだ、終わってないからな』

そういうと一夏はリヨーマの所へと向かった

『』『』『ずるい』『』『』

『なっ、だ、だったらお前らも誕生日にもらえばいいだろ！』

赤くなりながら私はそう言い放った

（リヨーマ視点）

『リヨーマ』

『一夏……来るのが遅すぎだ、馬鹿者』

『いきなり罵倒！？』

『知ってたからな、さっさと終わらせるぞ』

俺はにやりと一夏に笑う

『えっ？リョーマ今わら』
『くるぞ』

飛んできた銀の鐘をマシンガンで打ち落とす

『時間はかけん、一夏とどめはおまえだ』
『了解』

俺は最高速で福音に近づき福音の両腕を斬り飛ばす
福音は俺のほうを向いて銀の鐘を放とうとするがもう遅い

『これで！おわりだー！』

一夏が左手をかざして福音の頭を掴む
エネルギーらしきものがひかり一瞬視界が白くなる
目が慣れると福音は動いてはいなかった

『織斑先生、福音の撃破を確認』
『・・・そうか、ご苦労だった』

・・・これ、人乗ってたのか・・・危うく両腕斬り飛ばすところだったな

接近するまで良く見えなかったがバイザーの下に顔が見えたのでギリギリで装甲だけ斬ったのだ

『さて、帰るぞ、貴様ら』

『今回は俺の指揮の下作戦を実行しました。なので、何も問題もあ

りませんよね、織斑先生』

『・・・ああ、ない』

『じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。――あっ！だ、男女別ですよ！わかってますか、リョーマくん。織斑君！？』

『ああ、俺はなんともないので、それと俺女子の裸興味ないんで』

『（ええっ何その返し方？というか、『脱いで』のあたりで女子がそれとなく自分の体を隠したのだが、若干傷ついたぞ）』

『そ、そうなんですか？それじゃ、みなさんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなったりますよ』

はーいと返事をして、俺たちはそれぞれにスポーツドリンクのパックを受け取る

『・・・・・・』

『な、なんですか？織斑先生』

じーっと一夏を睨んでいたの、一夏は居心地悪さからつい口を開いてしまった

『・・・しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな』

『え？あ・・・』

なんだか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられて表情は見えなくなる。さてと、部屋を出るとしよう。

『（仲間を、守れたよな。俺は）』

『とどめはお前が刺したからな、守れたんだ、お前が』

『また心を読まれた！？』

『その顔でよく言う』

～三人称視点～

『紅椿の稼働率は四二パーセントかあ。まあ、こんなところかな？』

空間投影のディスプレイに浮かび上がった各種バラメータを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む

子供のように。天使のように

月明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない

いつだって退屈そうな顔の、篠ノ之束その人だった

『んー・・・ん、ん』

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式第二形態の戦闘映像が流れていた

それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす

目の前にはただ海が広がり、高さは三〇メートル近い。落ちれば無事では済まないその場所でも、束の表情はけして変わることはない

『は～。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生がまで可能だなんて、まるで――』

『……まるで、『白騎士』のようだな。コナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な』

森から音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツを着た姿は、闇すべてを引き連れているかのような静かな威厳に満ちていた

『やあ、ちーちゃん』

お互いに振りむかない。背を向けたまま、束はさっきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける
どんな顔をしているか、別に見なくてもわかる――
そんな確かな信頼が、二人の間にはあった

『ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょうか？』

『……白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？』

『ぴんぽーん。さすがちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね』

かつて『白騎士』と呼ばれた機体はそのコアを残し解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方不明になり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた

『それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよねえ』

『・・・・・・・・』

千冬は、答えない。しかしそれに構わず束は続ける

『それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでだろうねー。私がしたから、確實あのコアは初期化されたはずなんだけどね』

『不思議なこともあるものだね』

確かにそれについては、わからないというのが本当のところであるそれは、束にとっても同じ

しかし、束は別にわからなくても問題はない

『・・・・そうだな。私も少ししたとえ話をしよう』

『へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ』

『例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違えさせ、そこにあるISをその時だけ動けるようにする。ことが出来るとして、そうすると、本来男子が使えないはずのISが使える、ということになるな』

『んー？でも、それだと継続的に動かないよねえ』

『そうだな。お前は、そこまで長い間同じことをしないからな』

『えへへ。飽きるからね』

『・・・・で、どうなんだ？とある天才』

『どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ』

『ふん・・・・。まあいい。次のたとえ話だ』

『多いねえ』

『嬉しいだろう？』

違いないね、と返して束は千冬の話に耳を傾ける

『とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、どこかのISの暴走事件だ』

束は答えない。そして、千冬も言葉を続ける

『暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ』

『へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね』

『ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピューターを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな』

束は答えない。千冬も、もう言葉は続かない

『ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？』

『そこそこにな』

『そうなんだ』

岬に吹き上げる風が、一度強くうなりを上げた。

『――――』

その風の中、何かをつぶやいて・・・束は消えた。

忽然と、突然と

『・・・・・・』

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる
その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた

（リョーマ視点）

二人に気づかれない場所で二人の会話を聞いていた

『やほっ！リッ君』

『束博士』

いきなり目の前に出てきたが予想の範囲だ

『冷たい反応だな』

『あそこで随分シリアスだったのにここではちがうんですね』

『人間誰しも変わるもんだよ！リッ君だってそうでしょ？』

『・・・そうですね』

最近では人が何を考えてるか分かってきている
それに

『感情がないリッ君が笑うなんてね』

『同感ですね』

『ねえ、リッ君』

いきなり真剣な顔になった

『リッ君はこの世界楽しい？』

『勿論、仲間が妹がいますから』

『そうなんだ・・・ねえリッ君』

『なんでしょう・・・一緒に雲隠れしようなんて言わせませんよ』
『・・・そう・・・』

沈黙が流れた

『ねえリッ君、リッ君は完璧？それとも天才？』

『何を当たり前なことを・・・天才ですよ』

『どうして？』

『完璧な人とはどんな人を指しますか？全ての分野で天才で感情と味覚がない人ですか？全ての分野で天才で他人に一切の興味がない人ですか？それとも欠陥が一つもない人のことですか？』

『多分、三番だろうね』

『なら、そんな人はいません、人間という限られた器には限度がある、俺から感情と味覚が失われたように、あなたの他人に興味を持てないように』

『そうか・・・そうだよね』

『あなたらしくない』

『ふふっ、そうだね』

束博士は俯いていた顔をあげた、その顔はいつもの顔だった

『じゃあね、私が認めた天才リッ君♪』

束博士が顔を近づけてきたが俺はひらりとかわした

『何でかわすのさ！』

『さあ、条件反射ですかね』

束博士は頬を膨らませていた

『ふふっ、やっぱりリッ君だね』

それだけ言うと森に消えていった

『ふっ天才か、束さんは天災だ』

向こうでなにやら騒がしいな

・・・一夏が箒をお姫様抱っこで逃げていた

『あつ、リョーマ!! 助けてくれ!』

『ふふっ、はははは一夏』

『げっ! リョーマが黒い! 笑ってるから前より怖い!』

『一夏私を抱っこしてるからだろ』

おれはオルカーンを展開する

『ちよっ! リョーマ! マジストップ』

『自業自得、死ね一夏、ラウラという嫁がいながら』

『リョーマが冗談言った! 嫁じゃないのに嫁って言った』

『一夏! テンションがおかしいぞ! しっかりしろ』

ふふっ、はははははは。楽しいな感情はやっぱり

他の感情もそのうち出てくるかも知れんな

舞う「黒」 甦る「白」 (後書き)

とこんな感じです

一夏の出演が少ないって？

はいそうです、すみません

有り難うございました

リョーマが過ごす夏休み初日（前書き）

今回さらに書き方を変えます

緑を纏うものと同じ書き方にします

それではどうぞ

リョーマが過ごす夏休み初日

朝五時・・・ピツタリに起床

「一夏は・・・まだ寝てるな」

それを確認して着替えを始める

ISスーツをきて腕立て、腹筋、背筋をいつもより多く500回する
今日から夏休みである

なので回数を増やしても何の問題もない

「497、498、499・・・500」

終了、ストレッチをして筋肉をほぐす

さて・・・走るとするか・・・

「あゝ、暑い」

何でこんなに暑いのだよ！まったく

今、朝九時・・・私、鈴は廊下を歩いていた

しかし、なんでこんなに暑いか！温度計見たら三十九度って！
ばっかじゃないの！

干からびて死んだらどうすんのよ

窓からグラウンドが見えた

「こんな暑いのに体動かすバカは・・・い・・・た」

なんで・・・リョーマがグラウンドを全力疾走してんの・・・？

てか、速！！えっ、あのグラウンド一周五キロだよね！？
携帯を出してタイムを計る……

「一周……一分？」

速すぎ……しかも前ラウラの日記を読ませてもらったときたしか
八時まで走っていたはずだけど……今九時だし……五時半から
走ってるとして

210週？……210×5……1050キロ？
てか、まだ走ってる……見てるこっちが暑いわよ
やれやれ……体力バカは……

「……ふう、これでいいだろう」

時間は……十一時か

「ずっと走っていたから五時半から十一時までの五時間半……3
30×5で……1650か

まあいい感じだな、汗も少しかいたし

「あきれた……さっきまで走ってたの？」

「鈴か……悪いか？走って」

「いや……走るのはいいけど……走り過ぎでしょ」

「身体を動かしてないとあまり落ち着かない性分だな」

「……あっそう……てかさ、暑くないの？」

「……まったく」

「羨ましいわね、暑くないなんて」

「寒さも感じたことないな」

「あんたホントに人間？」

「当たり前だ、ただ、遺伝子はいじくられてるがな」

「あっ・・・ごめん」

「気にする必要はない」

「・・・あんたはさ、自分がふつーじゃないってことを悩んだことは無いの？」

「普通な人などいない、お前は候補生という立場にいるだろ」

「そうね・・・そうよね」

「・・・お前は何しに来た、ただ話に来ただけか」

ちなみに今はストレッチをしている

鈴は若干ぼかーんとしている

「悪い？暇なのが？」

「なるほど、なら調理室で今研究中の冷えているのに美味しいカレーを作ってやろうか」

「なにそれ？美味しいの？」

「味は知らん、だが、ひんやりはしている」

「味は知らんで・・・」

何か不安と鈴は小さくつぶやいていたが

「で、食うのか、食わないのか」

「食うわよ、味見してやろうじゃんの」

移動中

「てゆうか、リョーマ、あんた料理部なの？」

「そうだ」

「初めて知ったわよ、味覚がないのになんで料理部入ったの？」

俺に味覚がないということはみんなが知っている

その時一夏が、だからセシリアの料理大丈夫だったのかと小声でつぶやいていたな

「料理は作っていて飽きないからな、それに料理なら女子、男子あまり関係ないからな」

「あっそうね、運動部はマネージャーしかできないしね」

何て話をしていると調理室についた

「あっ、部長！」

女子の一言で、調理室にいた女子が一斉にこっちを向く

「課題、すすんでるか」

「進んでる人とそうでない人がいます」

「そうか、世の中にはアイディアがたくさんある、今日は外でもでて、発見して来い」

「「「「はい！！」」」」」

鈴は完全に呆けている

「おい、鈴、大丈夫か」

「・・・は！」

俺は、冷やしカレーの準備を始めた

「リョーマ、あんた・・・部長だったの？」

「ああ、前部長は俺と「料理バトルをするのよ！」なんて言ってきた

たから料理作って食べさせたら「なあー」と言っで部長を勝手に俺にしないでと部屋にこもって料理作ってらしい」

「へえ」

鈴は料理器具をいろいろ手に持ちながら俺がカレーを完成させるのを待っていた

「ねえ、レシピってあるの？」

「ああ、作るときは必ずレシピを作るようにいつてるんだ」

俺はそう言っで鈴にレシピを見せた

「へー、ほんとに美味しいの？これ」

「だから知らん、これで、完成したんだがな、味が分からないから」
「そういえば、課題がどうか、言っでたけど」

「ああ、夏の暑さに負けるなIS学園、暑い時は冷めたもので乗り切ろう！と前部長が」

へーと鈴は一言つぶやく

「できたぞ」

「おお、おいしそうね」

見た目は完全にカレーである・・・が

「湯気が出てない、ほんとに冷えてるのね」

「もちろんだ、カレーにした理由は意外性が欲しかったからだが」

「ふむ・・・」

鈴はカレーを一口

「・・・おいしい」

「ほんとか」

「うん、カレーの常識を綺麗に覆したわね」

「そうか、なら俺の課題はクリアだな」

調理室を出て俺は鈴と別れた

暇だな・・・今は午後一時・・・走るか

「でね、一夏。リョーマが冷えたカレーをね」

「へー、あそこで走ってるリョーマがねえ」

「そうそう、あのグラウンドで朝と変わらず走っている・・・リョーマが」

な・・・リョーマ、・・・なんでまた走ってるのよ
もう五時だったのに

「おおーい、リョーマ！」

一夏がリョーマをよんだ

「ふむ、いい汗かいたな・・・で、何の用だ」

「リョーマ！ あんたなんでまた走ってるのよ、暑苦しい！」
「暇だったんだから仕方がないだろ」

「冷えたカレーがあるんだってな」

・・・240×5・・・1200キロだな

「ああ、作ったがどうした」

「今度作ってくれよ」

「別にかまわんぞ」

今日一日で・・・1200+1650・・・2850キロ、普通の人が走れる距離ではないな

「あんたは夏休みをなんだと思ってるの？」

「・・・思いつき身体を動かせる日か・・・」

「・・・そう・・・」

ちなみに、物陰でラウラが日記を書いていたことに気が付いたのは・・・誰もいないんじゃない？

リョーマが過ごす夏休み初日（後書き）

こんな感じです

ありがとうございます

ウォーターワールドの惨劇（前書き）

今回は原作で鈴たちが暴れたウォーターワールドのお話です
まあ犠牲者は鈴たちだけど
うぞ

ウォーターワールドの惨劇

グランド

ふう、今日は張り切って五キロを三十秒で走ってしまったな
五時半から初めて今十時半・・・300分×2・・・600×5・・・
・3000キロだな
さすがに汗の量が多いな
気分転換にプールにでも行くか

一時間半前

「一夏、ここいかない？」

「ウォーターワールド？」

「あんた知らないの？最近できたばかりでこの前売り買うのにも
二時間くらい並ばなきゃいけないほどなんだから」

「へー、でいつ行くの？」

「じゃあねー、十時にゲート前ってのは？」

「おう、分かった」

と一人抜け駆けをしている子猫・・・まな板鈴音がいた

「誰がまな板よ！！」

「うわっ、いきなり大声出すなよ」

「ああ、ごめん、何か空から変な声が聞こえたから」

「俺なんも聞こえなかったけど」

「あんたの耳が悪いのよ」

「ひどっ！」

「十時にゲート前よ、ちゃんと来なさいよ」

「分かってるよ」

原作を知ってる人ならお分かりだろう

彼は来ない

セシリアの話しはカット

「なんであんたと行かなきゃなんないのよ！」

「それは私だって同じですわ！なぜあなたと・・・」

「「一夏後で覚えておきなさい」^{さん}」

南無南無

ウォーターワールド

ふう、やはり夏はプールや海に入るのがいいと言うのはほんとだな
小さい頃から戦闘訓練と紛争介入しかしてなかったからこういう楽
しみ方は知らなかったからな
さてそろそろ帰るとするか

『では、本日のメインイベント！ 水上ペアタッグ障害物レースは
午後一時より開始いたします！ 参加を希望する方は十二時までに
フロントへとお届けください！』

そんなことをやるのか・・・どれ、見ておこうかな

『では、本日のメインイベント！ 水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！ 参加を希望する方は十二時までにフロントへとお届けください！』

『優勝したペアはなんと！ 沖縄五泊六日の旅にご招待！』

・
・
・
・

「セシリア」

「鈴さん」

私たちは互いを見合い、うなずき

「「これに出るわよ（でましよう）」」

ここに第一回大会にして歴代最強のコンビが結成されるのだった

「それでは！ 第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会のお姉さんが開始の宣言をしながら大きくジャンプした。着ている水着が大胆なビキニということもあってか、会場から歓声と拍手が巻き起こる。参加者は全員女性、観客のテンション也大いに上がっていることだろう

・・・なんであそこに鈴とセシリアがいるのだろう

「では皆さん！ 参加者に今一度大きな拍手を！！」

再び響く拍手。レース参加者は手を上げたりお辞儀をしたりと何らかの反応を示しているが、その中で一切の反応を示していないペアが一组。黙々と柔軟運動をしている

「「・・・」」

念入りすぎだろ、あの二人

「優勝賞品は沖縄五泊六日の旅！ 皆さん、奮ってゴールを目指してください！」

この賞品がそんなに欲しいか、そんなに一夏と行きたいのか
なんでもこのレースは妨害ありらしい、あの二人・・・おそろしい
ことしないだろうな

「いよいよレース開始です！ 位置について、よい・・・」

パアンツ！ と景気のいい競技用ピストルの音が響き、参加者二十四名十二組が一斉に駆けだした
鈴音とセシリアはラリアットを仕掛けてきた妨害ペアを余裕で避け、プールに叩き落とす際に水着を奪っていた。しかも、奪い取った水着は妨害ペアが落ちた反対側の観客席に丸めて放り込むなど陰険なことこの上ない

「トップの木崎・岸本ペアはご存じ先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！」

なんでそんなのがここにいるんだろうか
鈴たちは妨害を仕掛けてきたペアを相手にしてきたから体力は結構減ってるはず

勝機は薄いか

「こうなりや奥の手よ！ セシリア！」

「何ですの！？」

「突っ込んで！」

「わ、私がですか！？」

「速く！！！」

鈴に必勝の策があると信じ、単身セシリアはアマゾネスペアに呐喊した

「そこで反転！」

「え？」

戸惑いながら、セシリアは振り向く。振り返った瞬間に視界に入っ
たのは鈴の・・・足の裏

「ぶべえっ！！！」

女の子なら一生上げたくないであろう声を上げ、セシリアは思いつ
切り、思いつ切り顔を踏まれた

「むごい」

セシリアの顔を踏み台にして鈴は一気に跳躍、ゴールに飛び付い
てフラッグを獲得した。鈴音とは対照的に、セシリアはアマゾネス
二人のタックルを受けて数メートル下のプールへと落下、数メート
ル級の水柱を上げる

「ありがとう、あんたの御陰よセシリア。あんたのことは一生忘れ

ない・・・」

いや、セシリア死んで無いだろ

耳がいいので騒ぐ観客の大声のでも鈴が何を言ってるのか聞こえた

「ふ、ふ、ふ、ふふふふ・・・」

地獄の底から響くかの如く笑い声。プールからさっきの数倍の大きさの水柱が出来上がった

「私の、私の顔を足で。今日という今日は許しませんわ鈴さん!!」

ブルー・ティアーズを展開し、セシリアは憤怒の表情を浮かべて鈴に肉薄する。対する鈴もくるくる手の中で回していたフラッグを投げ捨て、甲龍を展開させて臨戦態勢に入った。

「なななあっ!? 何と、二人はIS学園の生徒のようです! まさかこの大会で二機のISを見れるとは思っていませんでした! ・・あれ、でも、ルールのにはどうなのでしょう・・・?」

もう鈴がフラッグとってるから大会終了だろ
俺は司会の人に近づく

「あれ? 何ですか?」

「いえ、観客の非難をしないんですか?」

「・・・そんなにひどくなる?」

「あの二人なら」

司会の人はいく秒間悩み

「みなさん！危険ですので早く非難してください」

観客全員ものすごい速さでいなくなった
さてと

「今日という今日こそは！！」

「ふん、あんたなんかに負けないから！！」

私はスターライトMK？を鈴さんに構えるその瞬間
スターライトMK？が少し重くなった

「なんですか？」

「・・・・・・」

「うそ・・・・」

そこには、阿修羅のようなオーラが出ているリョーマさんがスター
ライトMK？の銃身の先端に立っていました
その姿を見た瞬間私たちは

「（ああ・・・しんだな）」

生身のリョーマさんにISの私たちは手も足も出ずに水中に沈めら
れました

「「「すいませんでした」」」

「リョーマ君は被害を押さえてくれたんだから謝らなくていいのよ、
でもその二人」

「「はい」」

「こう言ったことは金輪際しないでくださいね!!」
「はい」

まったく

「うう」

「自業自得だバカ者ども」

「ぐっ」

結局賞品はもらえなかったようだ

ちなみに今回もこっそりと追跡していたラウラがいたそう

ドイツ人が踊る夏祭り（前書き）

今回は箒たち達の夏祭りにリョーマが言った時のお話です
どうぞ

ドイツ人が踊る夏祭り

（寮内）

なになに、篠ノ之神社にて夏祭りか
篠ノ之家伝統の踊りもあるか
面白そうだな

「ラウラも誘って行ってみるか」

「篠ノ之神社で夏祭りですか？」

「ああ、どうだ」

「いきます！もちろん！」

「なら、夕方の六時にゲートで」

「わかりました、兄上」

兄上が祭りに誘ってくれるとは！

「ねえラウラ」

「どうしたのだ？ シャルロット」

「服どうするの？」

「もちろん、制服だが？」

「お祭り行くのにいいの？」

「そもそもこれしか服は無いぞ」

「でも、リョーマが私服着てきたらどうするの？」

「ぬっ」

それは考えてなかった

「なら、いい考えがあるよ♪」

シャルロットの顔は素晴らしいほど輝いていた

「神楽舞を？」

「駄目ですか」

「うーん、一日で覚えられるものでもないし」

「覚えようと思えば覚えられると」

そもそも、男が踊るの駄目とは言わないのだな

「でも、箒ちゃんもいることだし」

「メインは箒ですから、終わってからの余興のようなものでいいですから」

「なら、やってみる？」

随分あっさりと了解するんだな

「箒ちゃん、久しぶり」

「お久しぶりです、雪子さん」

「見ない間に随分きれいになったわね」

「雪子さんも相変わらず綺麗ですよ」

久しぶりにここに帰ってきた

篠ノ之神社、私の・・・私たちの家

私たちがいなくなってからは叔母の雪子さんが神社や家を掃除してくれている

「それじゃあ、動きの確認しようか？」

「はい、お願いします」

いつも練習はしてたから、問題なく踊れた

あとは本番で緊張さえしなければ

・・・一夏は来ないだろう、言っていないから

「兄上！遅くなりました」

「いや、俺もちょうど来たところだ」

「では、行きましょう！」

「そうだな、しかしラウラ」

「なんででしょう？」

シャルロットめ、まさか、祭りだからと言って浴衣を着せるとは！

動きずらくて集合時間に遅れてしまったではないか

しかし、兄上も黒い男性用の浴衣を着ていた、銀髪に黒はやはり相性がいい

私の浴衣も黒一色である

なぜシャルロットはこれを持っていたのだろうか？

そう言えば、兄上の感想をまだ聞いていないが

「なかなか似合ってるな」

「ホントですか！」

やったぞ！兄上に褒めてもらった！

「よし、いくぞ」

「はい！！」

「懐かしいな、篠ノ之神社」

ここに来たのは、箒たちがいなくなってぐらか
ホントにいらなくなつてここで泣いたんだつたな
さて、神楽舞まで時間あるから少し見て回ろうつと

「ここが箒の実家ですか？兄上」

「ああ、そうだ」

ふむ、調べたとおりなかなか趣のある作りになっているな
神社の前の道路は出店で埋まっている
ラウラは初めての出店に目を輝かせていた

「箒が神楽舞を踊るまで時間がある、少し見るか」

「はい！兄上」

あとで雪子さんのところに行つておかないとな
出店を見ているといよいよ神楽舞が始まる時間になった

「ん、一夏」

「え？おお、リョーマとラウラ」

「む、一夏（嫁）ではないか、一人か」

「ああそうなんだ」

「だったら私を誘えばよかったではないか」

「他の奴らは」

「みんなには言っていないんだ」

一人で来たかったらしい
まあ、他の奴らは騒ぐだろうし
鈴とかセシリアとか、一夏がらみで

「はじまるな」

「お、そうだな」

「随分嬉しそうだな！」

「ナイフをしまえ、どこに持ってた」

「あ、いえ、非常用に」

と言って袖にナイフをしまっていた
箒の舞は女性独特のしなやかさを使った綺麗な舞だった
刀と扇を巧みに使い流れるように踊っていた
あれに比べたら俺の踊りは見劣りするだろう
なんせ一日訓練に昔から踊っていたわけではないから
一夏は隣で箒に見惚れ、ラウラにつねられていた
そうしている間に神楽舞が終わった

「じゃ、またあとで」

「一緒に行かないのか一夏（嫁）」

「兄妹の邪魔したくないから」

その心遣いはいがたいが、それをいつも発揮していれば少しはマシになるのだな

俺たちはそのあとさらに出店を回った

トントン

「ん、雪子さん」

「そろそろ出番よ」

「ああ、そうですか、分かりました」

「兄上？」

「舞台を見ているラウラ」

「随分可愛い妹さんね？」

「自慢ですから」

「ふふっ、その抑揚のない声だと自慢しているようには聞こえないわね」

「生まれつきなのでどうしようにも」

「これ、衣装」

「どうも、すみませんねいきなりでこんなこと」

「ううん、いいのよ」

衣装は神主の服だった

「うん？」

「まだだれか踊るのか？」

「いや、そんな予定はなかったが」

俺は途中で箒と遭遇して今一緒に出店を回っていたところだ
本来は箒だけ踊る予定らしかったのだがいま、誰か踊るらしい

「雪子さんか？」

「そうかもしれんな、しかしそれなら言ってくれてもいいのに」

そして舞台上上がった人物を見て驚愕した

「「リョーマ！」」

なぜ？しかもリョーマはいま神主の格好をして左手に扇、右手に刀を持っている

他の客も驚いてるなか踊りが始まった

箒とは違った力強くそれでいて流れるような動き

同じ舞でも男と女でこうも印象が変わると思ってたなかった

しかも髪の毛を後ろだけ出していてその銀髪が光に当たって何とも幻想的な雰囲気が出ていた

踊りの最後に刀の切っ先に開いた扇を乗つけるという大技を披露してリョーマは舞台を降りて行った

「ホントにすごい踊りだったわ！箒ちゃんと同じくらいよ」

「ありがとうございます、いい体験でした」

俺は衣装を返し浴衣に着替えラウラの元へ戻った

「ラウラ」

「あ、兄上！とても素晴らしかったです」

「そうか、ありがとう」

俺はラウラの頭を撫でた

「~~~~~／／／」

「さて、行くか」

俺はラウラの手を組み歩き出した

今日はなかなかいい日だった

向こうで一夏達がいい雰囲気になってたが無視した

ドイツ人が踊る夏祭り（後書き）

「・・・・・・・・」

「いきなりだんまりはよくないよりヨーマ」

「何の用だ、作者・・・狂雲」

「今回から時々こんなのやろうと思ってだな」

「もう一本でもやってるだろ」

「ぐさっ！」

「さていきなりだが俺の名前の由来の本当の意味を教えろ」

「・・・自分の名前を入れたかっです」

「なに」

「初めての小説だったから自分の名前を入れたかったんだよ！！」

「・・・そんな理由か」

「わるいか！！」

「別に」

「普段いっつも二次創作を頭の中で描いて遊んでいましてね」

「・・・・・・・・」

「それでいっつも主人公を自分にしてまして」

「・・・・・・・・」

「そんな時これ見つけましてね」

「それでこのストーリーで遊んでた時に」

「これ書いたら面白いかもって」

「それでドイツ語でIS名とか武器の名前探して」

「それで始めたのがこれですよ」

「なるほど」

「もっと喋れよ！！」

「貴様に喋る話など皆無と言ってもいい」

「・・・・orz」

「もう一本の奴で自分の名前を入れればよかったのではないか」

「最初はこれだけ書くつもりだったから」

「それにドイツ人っぽい名前なんてでてこねえ」

「愚痴はその辺で辞めろ」

「すいません、ダメ作者で」

「「それではまた来週」」

お気に入り登録件数50突破記念 「雑談」

「お気に入り!!」

「登録!!」

「50件」

「突破!!」

「」「」「」「記念!!」「」「」「」

「ついにここまで来たよ!!」

「うわっ! 狂雲さん、いきなり出てこないでくださいよ」

「今回の主役はこの俺だ!! 出てきて何が悪い?」

「全部」

「・・・そうですね、書き始めて二カ月でついにお気に入り
50超えた駄文を書く駄作者ですもんね」

「リョーマ、狂雲さんの沈みようがハンパないんだけど」

「いやね? お気に入り登録してくれた人にはほんとに感謝してま
す、ありがとうございます」

「これは相当きてるわね」

「いや、鈴、観察してないで何とかしてもとに戻さないと」

「戻らないんじゃないかな?」

「シャルロットさんの言うとおりですわ」

「ひどっ、扱いひどっ!」

「それでも他の人の小説読んできるとお気に入り
が10000超えたとかあってさ、ああ自分はほんとに文才がない
なあって」

「ホントなんだから仕方があるまい」

「ラウラ、とどめさすなよ・・・」

「最近では主にリョーマ視点でしか書いてないしな」

「話が脱線してる気がするが」

「雑談だからいいんだよ」

「あ、狂雲さん」

「とりあえず、パーティーだ、パーティー」

「また急に」

「急であつてもこんなことが出来るんだ」

「食べ物や玩具がたくさん!？」

「作者権限だ」

「それで、今後のストーリー展開はどうなるんだ」

「原作通り」

「あの俺は誰と結ばれるんでしょう?」

「・・・聞きたい?」

「」「」「聞きたくないです」「」「」

「じゃあ黙る」

「とあるルートで耳にしたんだが」

「何を?」

「実はいろんな小説を書きたいらしいな」

「どこでそんな情報手に入れた?」

「極秘だ」

「書かないからね」

「つまらないな」

「なんでこんなに会話が続かないんだ?」

「あんたに文才がないからでしょ」

「なるほど」

「納得しちゃだめですよ!？」

「これのお気に入り100件超えたりするのかな?」

「小説家張りの文が書けたならあっさり超えるだろう」

「それが叶うのに多分小説100個ぐらい書かないと無理ね」

「あと他の人たちの小説を読んで研究して」

「図書館でいろんな本借りて」

「前途多難」

「一言で喋るな」

「うゝん」

「今度は何だ」

「俺のもう一個の小説の伸びが悪い」

「これより駄文なんだろう」

「分からない、俺的にはどっこいだと思っただがなあ」

「ありきたりだとか」

「そうなのかな？」

「一番はやっぱり」

「もういいよそれ、ウザったい」

「あんたの事でしょーが!!」

「今日はこれぐらいでお開きにしよう」

「早いわね」

「俺が帰るだけけどね」

「特に面白くもなくつまらなくもない時間だった」

「つまり普通ね」

「多分また本文にお邪魔するよ」

「後書きで満足しろ」

「まあまあ頑張ってください」

「ありがとう一夏君、君だけ優しいな」

「年上には敬意を払わないと」

「絶対思っていないだろ」

「・・・作者なんで・・・」

「やっぱり、でも嬉しいことのは変わらないから」

「そうですか」

「お礼に君のヒロイン教えてあげるよ」

「ホントですか」

「ごによごによ」

「・・・／＼／＼」

「さて帰るとしよう」

「さっさと帰れ」

「最後に締めあいさつしないと」

「チッ」

「舌打ちとは君らしくない」

「・・・」

「まあいいや」

「」「」「」「読んでいただきありがとうございます！また週末に会いましょう！！」「」「」「」「」

@クルーズにてまさかの展開!?(前書き)

今回作者少し暴挙にでるかも

前にリョーマのヒロインって?

という感想貰ったので自分で暴走してみました
すみません

こんなのでいいならどうぞ

@クルーズにてまさかの展開!?

〽グランド〽

・・・今日は早起きして4時に起床
今6時半・・・5キロを30秒で270週・・・1350キロだ
なよく考えなくても30秒は速すぎか・・・
500メートルで0.3秒計算だしな
・・・自分のやりたいようにすればいいか
さて今日は外食にするか

〽レゾナンス〽

やはりここは何でもそろってるな
飲食店もかなりの軒数だ

・・・@クルーズか、面白い名前だな
ここにしよう

〽寮内〽

「どこで服を買うんだ? シャルロット」
「もちろん、レゾナンスだよ」

兄上、私は今シャルロットに私が着る服を選んでもらうために引き
ずられています

しかし、服は必要なんですか?

兄上は私になにも着ないで寝ることに反対はしませんでした

・・・賛成もしませんでした
はつきり言って私に可愛い恰好は似合うのでしょうか？
いまいち分かりません

そう言えば兄上を今日見かけておりません
いつもならグラランドを走ってるはずですが
どこに行ったのです？兄上

「そろそろ、放してくれ自分で歩く」

「そう？逃げないでよ？」

「逃げないから」

とりあえず首が締まってたんだ
危うく窒息死するところだった

くレゾナンスく

「いやくまさか最初の店であんなに時間がかかるとはねく」
「随分上機嫌だな」

ここはレゾナンス内にあるとあるオープンカフェ
8時から11時近間まで最初に入った服屋にいた
店員も客もずっとこっちを見て可愛いや綺麗など言っていたな

「しかしまあ、いい買い物はできたな」

「せっかくだからそのまま着てればよかったのに」

「い、いや、その、なんだ。汚れては困る」

「ふうん？あ、もしかして、お披露目は一夏に取っておきたいとか
？」

「なっ！？ち、違う！だ、だだ、断じて違うぞ」

そうだ！ただ服が汚れてしまうから着ないだけなんだ！
別に一夏（嫁）に見せたいからではない！！

「そっか、変なこと言ってごめんね」

「ま、ま、まったくだ」

「ラウラ」

「な、なんだ？」

「フォークとスプーンが逆」

「っくくくくく！！」

ぐう、何ということだ、こんな初歩的なミスをするほど動揺しているというのか！・・・不覚

「ご、午後はどうする？」

「生活雑貨を見て回ろうよ。僕は腕時計見に行きたいなあ。日本製の時計ってちょっと憧れだったしラウラはそういうのってないの？日本製の欲しいもの」

「日本刀だな」

「・・・女の子的なものは？」

「ないな」

即答

シャルロットはがくつと首を落としていた、別にいいじゃないか、教官が持っていたのを見て憧れたんだから
ふと、シャルロットが隣のテーブルの女性に気がつくのが見えた

「・・・どうすればいいのよ、まったく・・・」

年の頃は二十代後半で、かっちりとしたスーツを着ている

何か悩み事があるらしく、注文したであろうペロンチーノは冷め切ってしまったている

「はぁ・・・」

深々と漏らすため息には、深淵の色が見て取れた

「ねえ、ラウラ」

「お節介はほどほどにな」

私はシャルロットの言葉を先回りする
そんな反応にびっくりするシャルロットだったが、すぐに嬉しそうな顔をして続けた

「僕のこと、ちゃんとわかってくれてるんだね」

「た、たまたまだ。・・・で、どうしたいんだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

「え？——！？」

ふたりを見るなり、ガタンッ！とイスを倒す勢いで女性が立ち上がる
そしてそのまま、シャルロットの手を握った

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「「え？」」

＼女性の店＼

「ここが私が受け持っている喫茶店よ」

「「はあ」」

なかなか綺麗な装飾だなあ

こんなにきれいな店ならお客さんもたくさん来るんだろうね
あれ？おかしいな？

「この店員さんはいないんですか？」

「・・・いたんだけどね、二人は駆け落ち、一人はそのショック
で辞めちゃったのよ」

「・・・それは災難ですね」

「そうなのよ！それなのに今日本店の人が店に来るって言うんだか
ら・・・」

「大変ですね」

「・・・まったくよ、朝すごいイケメン君も捕まえたし、君たちも
来てくれたから、何とか助かったわよ」

イケメン君？誰だろう？

「そうだ二人に衣装渡さないかね」

「「衣装？？」」

「ええ、うちはメイド&執事喫茶なの」

「そうなんですか」

「おおーい、メイド服と燕尾服持ってきて」

なんで一着ずつ？

嫌な予感がするんだけど

それは全くその通りだった

「勝手に店抜け出して、帰ってきたら雑用ですか」

「「・・・え？」」

メイド服と燕尾服を持って奥から出てきたのは・・・

「シャルロットにラウラか、お前らもこの人に捕まったのか」

燕尾服を着た、リョーマだった

@クルーズに入ると店員らしき三人が言い争いをしており
それをしばらく眺めると（もちろん席に座って）

二人の男女が互いに腕組んで店から出ていき

もう一人の男性はその場に崩れ落ちた

すると奥の方から店長らしき人が慌てて出てきて

落ちこんでる男性に話しかけ、何があったのかを聞いていた
話し終わった男性はいきなり服を脱ぎ泣きながら出て行った

そこには茫然とする店長と気にしてもいない俺だけが残り

俺のコーヒーを飲む音だけが聞こえていた

するとその音で俺の存在に気が付いた店長にバイトをしないか？
つて誘われたため

OKを出した

「なんでOKしたの？」

「バイトというものがどんなものかしてみたくてな」

「ほらほら、はやく着替えないとお客さん来ちゃうよ」

店長はいつの間にか、メイド服に着替えていた

俺はラウラにメイド服を渡し、シャルロットに燕尾服を渡した

「なんで？」

「お前が着るから店長が持ってこさせたんだろ」

違うのか、ラウラに燕尾服は思いっきり違う、しかし、シャルロットなら男に見えなくもない

「……」

「あきらめろ、シャルロット」

「……ラウラ、似合ってるな」

「!! ほんとですか、兄上!!」

「あれ？二人兄弟だったの？」

「ええ」

「どーりで似てるな〜と思ったわけだよ」

シャルロットを完璧において行ってるな

「三時までだからあきらめろ」

「ううー、メイドが良かった」

「残念ながら、燕尾服2着、メイド服2着しかない」

がくつと首を落としてシャルロットは着替えに行った

「そう言えばこの店何ていう名前なんです？」

着替え終わったシャルロットが店長に聞く
すると店長はスカートの端を持って

「ようこそ、@クルーズへ」

と優雅に頭を下げた

「すいませーん！注文いいですか？銀髪執事さんで！」

「こっち注文追加したんですけど、金髪の執事さんで！！」

「銀髪のメイドさん！コーヒーを」

他さまざまな注文の声が店内を飛び交った

金髪の執事さんって呼ばれるたびにすこし傷つく

店長は店の奥でほぼ一人で料理やら飲み物やらを作っているときどきリョーマが手伝いをしている

本店の人もあの後割とすぐに来てこの繁盛ぶりに驚いていたでもなんでこんなに多いんだろうか

「いやーあいつの言ってることホントだったな」

「ああ、あんなに可愛い子がいるなんて」

「あの金髪執事さん、紳士ってかんじだよ」

「ほんと、あいつの言ってることなんて半信半疑だったけど、きてよかった」

「あの銀髪の執事さんほんとにかっこいいよね」

「・・・そうだ！あの人世界初のIS男性操縦者のリョーマって人よ」

リョーマの存在がばれてる！！

しかももしかして最初に来た人たちが仲間に言いふらしてるの？でも儲かってるんだから気にしないでおう

「金髪執事さーん」

「あっはい！」

仕事に専念しよ！

3時近くになると客の数もそれなりに減ってきた
このまま店が閉まるかな、と考えていた時

「てめえら、うごくんじゃねえ！！」

銃を持った3人組がいきなり店に入ってきた
一瞬、何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが次の
瞬間に発せられた銃声で絹を裂くような悲鳴が上がった

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

「（・・・お前が打たなければ静かだったのだが）」

俺はカウンターの下に身を隠す
いま気付かれるのはまずい、俺一人なら瞬殺できるが客がいること
だしな

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。大人しく
投降しなさい。繰り返し――」

さすがは駅前の一等地

警察機関の動きはこの上なく迅速で窓から見える店外ではパトカー
による道路封鎖とライオットシールドを構えた対銃撃装備の警官た
ちが包囲網を作っていた

「・・・なんか」

「・・・警察の対応も」

「・・・古・・・」

言うな、客

一世代くらい前の刑事ドラマみたいな感じだな

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員――」

「うろたえるんじゃないやねえっ！焦ることはねえ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

リーダー格とおぼしき三人の中で髭をはやした男がそう告げると、逃げ腰だった他の二人も自信を取り戻す

「そ、そ、そうなんだな。お、おらたちには高い金払って手に入れたコレがあるんだな」

ジャキッ！と硬い金属音を響かせてショットガンのポンプアクションを行う

そして次の瞬間、威嚇射撃を天井に向けて行った

「きゃあああっ！！」

蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳をつんざくような悲鳴を上げる

それを今度は髭の男がハンドガンを撃って黙らせた

「大人しくしてな！俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」

女性は顔面蒼白になって何度もうなずくと声が漏れないようにきつく口をつぐむ

「（リョーマ、デブの人はショットガン、チビの人はサブマシンガン、そして髭の人はハンドガン。他にも予備で何か持っている可能性もあるけど・・・）」

「（・・・あいつらの注意をこっちに向けさせれば・・・）」

目立たないようにしゃがみつつ俺とシャルロットは状況を冷静に分析していく

「（うん。だから、とりあえずは―――）」

「（どうした）」

もう一度店内の状況を確認しようと視線を動かして、そこで俺とシャルロットはぎょっとした

「・・・・・・」

「（敵を排除する際は見つからず迅速に息の根を止める事と教えたはずだが）」

店内で強盗以外にただ一人立っていたのはラウラだった
どこに消えたかと思ったら・・・

「なんだ、お前。大人しくしてろっていうのが聞こえなかったのか？」

ラウラの元にすぐにリーダーがやってくる
その手に握ったままの銃を、ラウラは一瞬だけ見て視線から外した

あの目線の動き・・・そういうことか

「（シャルロット、ラウラが動き次第、お前も動け）」

「「え？ああ、うんわかった）」

そう言ってシャルロットは即座に行動できる場所に移動した

「おい、聞こえないのか！？それとも日本語が通じないのか！？」

「まあまあ兄貴、いいじゃないッスか！時間はたっぷりあるんスカ
らこの子に接客してもらいましょうよ！」

「ああ？何言ってるんだ、お前」

「だって、ホラ！すっげー可愛いッスよ！」

「お、オラも賛成なんだなっ。それにめ、メイド喫茶に入るのは、
初めてなんだな！」

ふたり揃ってテヘへと嬉し恥ずかしな表情を浮かべる手下にリーダー
は眉間にしわを寄せながらソファにどかと腰を下ろす

「ふん。まあいい。ちょうど喉が渴いていたところだ。おい、メニ
ューを持ってこい」

ラウラはうなずくでもなく男たちを一瞥すると、カウンターの中に
すたすたと歩いていく

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

俺とラウラはカウンター内で目だけ合わせる

そして互いにうなずき合いラウラはカウンターの奥へ消える

今回、シャルロットとラウラの二人でこいつらを鎮圧する

もし最悪の事態になった時のみ俺が動く
それを一瞬で目を合わせただけでラウラに伝えた

すぐにラウラが持ってきたのは水が満載された水だった

「・・・なんだ、これは？」

「水だ」

「いや、あの、メニューを欲しいんすけど・・・」
「黙れ、飲め。——飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す
当然、氷水が宙に舞うがそれらを回転するような動作で掴み——
弾いた

「いってええっ！？な、なっ、何しやがっ——」

氷の指弾

それをトリガーから離れていた人差し指に突然の出来事に反応できず
にいた瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てる

そして犯人の怒号より早く、ラウラはデブの懐へと膝蹴りを叩き込
んだ

「ッざけやがって！このガキ！」

いち早く痛みから復活した髭がハンドガンをぶっ放そうとするが——

「させないよ」

髭の後ろから現れ殴り倒したのはシャルロットだった

「あ、執事服でよかったかな。うん。思いっきり足上げても平気だし」

ラウラに視線を奪われていたためシャルロットが背後へと回っていったのに気づけなかったのだ

「あ、兄貴っ！？こ、こいつッ——」

「させはしない」

サブマシンガンでシャルロットを撃とうとしたチビの、その背後に迫っていたのはラウラだった

「なっ！？このっ——」

「この程度でひるむなど下らんな」

そんなことを口にしながら、ラウラはチビを制圧した

その対応はふたり揃って慣れている——というようなレベルではもはや無い

より高度な戦闘を数多く経験している、その証明であった

ISの専用機持ちともなれば、どの国も『ありとあらゆる事態』を想定した訓練を課している

それが候補生であっても変わりはない

ISが展開不能な状態にあっても、状況を打破できるように鍛えられているのだ

無論、軍人であるラウラと非軍人のシャルロットでは、それぞれに持っている技能・対応能力・肉体能力に開きはある
しかし、この程度の状況ならば、特に問題はない

「目標2、制圧完了。――ラウラ、そっちは？」

「問題ない。目標3、制圧完了」

「・・・！ふざけんなあ！ばけがあ！！」

髭は気を失っておらず、デブが持ってたショットガンを二人に向ける
ラウラ達と髭の距離が離れすぎているため発射の阻止は出来ない
かわせることもできるが後ろには客がいるのだ

「しまっ――！！」

ドンっ！！

ラウラ達はとっさに目を瞑り痛みに耐えようとした
しかし、いくらたっても痛みが来ない
二人は目を開ける・・・すると

「・・・店内では火器厳禁ですよ・・・お客様」

黒の燕尾服に似合う銀髪を持つリョーマの背中だった

「う・・・そ・だ」

髭は啞然としている、それもそうだ、自分は間違いなくショットガンを撃ったのだ
不発ではなくしっかりと弾が出たはずなのだ
なのに、目の前に立つ男は無傷

外したのかと思いい目で銃弾を探す

「お前が探しているのはこれか」

リョーマの声に驚き髭はリョーマを見る

リョーマは両手を前に突出し、握っていた手をはなす
すると、手からつぶれた金色の小さい塊が落ちる

「ば・・・かな」

「馬鹿は貴様だ」

リョーマは髭に近づく

「ひっ！来るなあ！」

髭の顔は恐怖に染まり、ポンプアクションもせずにショットガンを

リョーマに向ける

リョーマは向けられたショットガンを掴み

グシャア！

「ひ、う、うわああああああ」

握りつぶした

「寝てろ」

一言つぶやき髭の腹に一撃いれる

髭は声も上げずに床に倒れた

「うわぁ・・・」

「さすが兄上・・・？」

ラウラが隣にいるシャルロットを見る
ほのかに頬が赤い

「どうしたのだ？ 頬を赤くして？」

「・・・え？ い、いや？ 何でもないよ！！」

しかし、ラウラは見逃さなかった、シャルロットがリョーマを見て
いたことを

「お、終わった・・・？」

「助かったの、私たち・・・」

「い、一体何が・・・」

危機を脱したことはわかるものの、まだ状況を正しく把握できてい
ない人々は、何度もまばたきを繰り返してラウラとシャルロットと
リョーマの姿を呆然と眺めている

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！ あ、ありがとう！ メイドさんに執事さんたち、ほんとに
ありがとう」

助かった実感が今になってはつきりと自覚できたのか、突然店内は
わっと騒がしくなる

その様子を見て、状況に決定的な変化があったのかと警官隊も詰め
かけてくる

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「ラウラ、リョーマ、まずいって代表候補生で専用機持ちなんだから、公になるのは避けないと！」

「それもそうだな。このあたりで失敬するでしょう」

案の定、警官隊の後ろには交通規制もなんのその、立ち入り禁止のロープを乗り越えたマスコミ関係者が大勢見えた裏口から出ようとカウンターに入ると

「今日はほんとにありがとう！！これバイト代」

店長が3人分の封筒を持って待っていた

「特別に、リョーマ君と同じ分入れておいたよ」

「「いいんですか？」」

「いいのよ、あんなこともしてくれたしね」

「マスコミなどには俺たちの名は伏せてもらいたいいのですが」

「うん、分かってるわよ、あの身のこなし普通の人じゃできないもんね」

「「「ありがとうございます」」」

「なかなか貴重な体験だった」

「出来ればもう2度と会いたくないよ、強盗」

「兄上はバイトの事を言ってると思うぞ」

「えっ？ そうなの？」

「ああ、あんな奴ら戦場において赤子同然だ、そんな奴らに貴重などと言う言葉はもったいない」

「ええ、普通強盗にあった何て体験しないよ？」

「まあ、それはそうだが、戦場は命の奪い合いだ、それにくらべて

あんな状況など何の恐怖も感じない」

「・・・」

「（やはり、シャルロット・・・いやしかし、一回の出来事でか？）」

」

兄上の話しをシャルロットは悲しそうな顔で聞いていた

「ところで、どこか行きたいところあるか？」

「え？」

「まだ、時間があるからな」

「・・・だったら、向こうの公園行こうよ」

「公園？」

「うん城址公園。元はお城なんだって」

「ほう。それは興味深いな、日本の城は守りにやすく攻めに難いと聞く。城跡とはいえ、一見の価値はありそうだ」

「だがシャルロットは城跡じゃなくて違うものが目的だろ」

「うん、そうなんだけどよくわかったね」

ラウラと違ってシャルロットは城の作りがどうのと言う性格ではない

「なんとなくだが、それで何があるんだ？」

「クレープ屋さんだよ。クレープ屋さん」

「うん？クレープ屋？なぜだ」

「えっと、休憩時間にお店の人に聞いたんだけど、ここの公園のクレープ屋さんでミックスベリーを食べると幸せになれるっておまじないがあるんだって」

「『オマジナイ』：：：というのは、日本のオカルトか？」

「ジंकスって言った方がいいな」

「ああ、験担ぎということですか」

「・・・それでいいだろ」

「ええ」

俺の言葉になるほど、とうなずくラウラに対して、シャルロットはちよつとだけ困った顔をするが気にしない

「なら探すか」

「どうかあれではないですか？」

探すまでもなくすぐに見つかった

まあ、女子高生が局所的に多くいるんだからすぐに見つかるか

「じゃあ行こうラウラ」

「金はどうするんだ」

「いいの、荷物持ってくれたお礼」

シャルロットはそれだけ言うとなラウラを連れて行ってしまった

しばらくしてふたりが帰ってきた
持っているのはもちろんクレープ——なのだが少しシャルロットがしょんぼりした顔になっている

「どうしたんだ？」

「うん。目的のミックスベリーは終わっちゃったみたい」

なるほど

それは確かに残念だな

「それなら何を買ってきたんだ？」

「えっとね、イチゴが二つにブドウが一つ。ラウラが選んでお金も払ってくれたんだよ」

「兄上はこちらです」

そう言ってラウラがくれたのはイチゴのクレープだ

「んむ、んっ。これ、おいしいね！」

「そうだな。クレープの実物を食べるのは初めてだが、うまいと思うぞ」

噂のミックスベリーを食べられなかったことに少し沈んでいたシャルロットだったが、出来立ての柔らかさもあってその味に声を弾ませていた

俺は味が分からないから感想は言えんが

二人の表情を見るに相当なのだろう

ふと目線を感じそちらを向くとシャルロットが俺のクレープを見ていた

「・・・食うか」

「え？ いいの？」

「食いたそうに見ていたが」

「う・・・」

「ほら」

「う、うん。あーん」

シャルロットは真っ赤になりながらイチゴを食べた後ろでラウラが笑った気配がした

・・・イチゴとブドウ・・・ストロベリーとブルーベリー・・・それをなぜやらせた？ ラウラ

「ちなみにあのクレープ屋だがな、ミックスベリーはそもそもないぞ」

「え？」

「やはりか」

「はい、メニューにありませんでした。それに、厨房にもそれらしい色のソースは見当たりませんでした」

「そ、そうなの？よく見てるね」

「当然だ。あれがもしテロリストの偽装だったらどうする。あの距離でグレネードが起爆してみろ。ISを急速展開しても命に関わる」
「・・・そういう観点で見てたんだね」

何かを期待してたのかラウラの発言を聞いてがくつと肩を落とした

「だが、ミックスベリーは食べられただろうか？」

「え？」

気付いてなかったのか

「ああっ!？」

今気づいた！

だからラウラは僕にブドウ、リョーマにイチゴ渡したのか

・・・でもなんで気付かれたんだろう

ううゝどうしよう、考えたらなんかごちゃごちゃしてきた

あの時、リョーマの後姿に見惚れてから、変に意識しちゃう

でも、一夏の事も気になる

どうすればいいの!!

・・・何してるんだ、シャルロットは
なにを考えているのかは知らんが傍から見ると変な人に見えるぞ

「・・・ラウラ」

「は、はい!？」

「お前、あとで覚えてろ」

「なぜ!？」

「シャルロットは一夏一本だろ」

「・・・(まさか、戦場に居すぎたために自分が好意を持たれてる
ことに気が付いてないのか?)」

戦場に居すぎたため、そして感情がほぼない。恋愛感情もない、ま
してやシャルロットが自分に惚れてる何て知りもしないためにリョ
ーマは気付いてない

I S 学園には鈍感しかないようである、まる

@クルーズにてまさかの展開!?(後書き)

どうだろう？

リョーマ、デュノア社へ（前書き）

今回は完璧オリジナルです
どうぞ

リョーマ、デュノア社へ

ドイツ軍基地内へ

「フランスに第三世代機の設計図を？」

「はい」

ここに来た理由は、俺のISを見せるのと、シャルロットについてだ

「たしかにフランスはどの国よりも第三世代機の開発におくれている、しかしそれだけではないか？」

「俺の仲間にデュノア社の社長の娘がいます」

「たしか、シャルロット・デュノアだったか？」

「はい、そのシャルロットが親である社長に命令され織斑一夏のISのデータを盗もうとしたのです」

「なんと」

「それは未遂に終わりましたが、もしシャルロットが国に帰れば」

「デュノア社が証拠隠滅のために監禁もしくは、消すか」

「可能性は高いかと」

「ふむ・・・しかしだな」

断られれば後がない

「ISの事に関して最高責任者は私ではなく、君だ」

「つまり、好きにしていると」

「そういうことだ、だが報告感謝する」

「軍人としては当たり前です」

「最近の若い者はそうしなくてね」

なるほど・・・教育しなければならぬようだ

「そう言えば、ボーデヴィツヒ夫妻には会ったのか？」

「まだですが」

「なら会うといい、ここ二、三年会ってないだろう？」

「そうですね、そうします」

「・・・なかなかいい表情をするようになったな」

「仲間がたくさんいるもので」

俺は敬礼するとその場を後にした

「ふむ、相当気の許せる仲間がいるようだ」

最初に会ったところは誰も寄せ付けないような鋭さがあったが
今では少しだが丸くなっている

あれなら軍の奴らともやって行けるだろう

リョーマの強さ、かつこよさに憧れている奴らがたくさんいるからな

く研究施設内く

「ただいま、義父さん、義母さん」

「「っ！！お帰り！リョーマ」」

二人は勢いよく俺に抱きついてきた

それと同時に嬉しさがこみ上げてきた

やはり、感情とはいいいいものだ

そのあと、ISについてや、仲間の事、ラウラに好きな人が出来た
こと、シャルロットのことを話した

「デュノア社長か・・・一度会ったことがある」

「そうね、自分のためなら何だってやる男だったわ」

「やはり、そうか」

「それでどの設計図をわたすんだ？」

「俺が学園で書いた奴を渡す」

「学園で？」

「そう、・・・これだ」

「・・・・・・」

今渡した設計図はシャルロットから事情を聞いた後に、シャルロットの癖、動きの特徴、戦い方をもとにして書いたものでありシャルロットの専用機とも言えるような機体になるはずだ

「この特殊武装の掌部小型ビーム砲というのは？」

「それは左右の掌底部に内蔵された青白い光を放つ小型ビーム砲で砲と言うよりは、むしろ開放型のビームジェネレーターに近いデバイスになっている。密着状態の敵機を砲撃する等、主にゼロ距離戦闘時にその真価を発揮するが、中距離でも実弾のライフル以上の威力がある」

（ガンダムSEEDDESTINYのデステイニーガンダム参照）

「なるほどね」

「ビームと実弾の二種類があるがそれは？」

「さまざまな状況に応じて使い分けれるようにした」

「なるほど・・・それで、名前は？」

「ラファール・・・ラファール・デエース、疾風の女神だ」

「フランス行きの飛行機内」

アポを取ったところ明日空いてるといことなので早速フランス行きに乗った

俺はもう一度ラファール・デエースの設計図を見る

色はラファール・リヴァイヴ・カスタムIIと同じオレンジを主体にしてある

武器は特殊武装の掌部小型ビーム砲のニーズヘッグ

アサルトライフルのフギン

ビームライフルのムニン

連装ショットガンのフェンリル

姿勢制御用のウイングに搭載されている荷電粒子砲のスレイプニル
近接武器はビームランスのグングニル

実剣のグラム

これらを筆頭にさらに武器が仕込んでありはっきり言ってラファール・リヴァイヴ・カスタムIIと大差ない状態になっている

それにニーズヘッグは白式の零落白夜に近いものになっておりシールドバリアーを貫きシールドエネルギーに直接ダメージを与えることが出来る

さらに、ニーズヘッグは燃費が良くシールドエネルギーが最大まであったとして百回放てるようにしてある

俺は設計図から目を離しデュノア社長との話しを有利に進めるための言葉を考えることにした

「デュノア社内」

「リョーマ・ボーデヴィツヒ様ですね、ではこちらです」

わざわざ、案内までするとはな

そのまま案内について行き最上階のとある豪華な扉の前に来た

「こちらに社長がおります」

コンコン

「はいりたまえ」

言われるままに部屋に入った

そこにはやや痩せ気味の中年の男性が座っていた

「では、そこに座って下さい」

「失礼します」

俺は社長の向かいに座る

「初めまして、私が社長のシリウス・デュノアだ」

「初めまして、ドイツ軍IS関連最高責任者リョーマ・ボーデヴィ
ツヒ大佐です」

「なかなか豪華な肩書ですな」

「そちらにはかないませんよ」

「そうですね？ まあいいでしょう」

「本題に入りましょうか」

「・・・なぜ第三世代機の設計図をわが社に？」

「たしか、娘さんがいらっしやいましたよね」

その言葉にシリウスの眉がぴくっと動いた

「確かにいますが・・・それが何か？」

「最近私も通っているIS学園に来ましてね、話してるうちに仲よ

くなりまして」

「ほう、そうですか」

「ですがね」

「・・・そこから先は言わなくて結構」

シリウスは青い顔でこちらを睨んだ

「何が目的だ」

「別に脅すわけではありませんよ、ただ取引をね」

「取引？」

「こちらは第三世代機の設計図、それと今回の事件は黙っておく」

「・・・こちらはどうぞすればいい？」

「この第三世代機をシャルロットに渡すこと、シャルロットをデュノア社の束縛から解放すること、あと、デュノア社長貴方がシャルロットに謝ることだ」

「・・・分かった条件を飲もう」

「理解が早くて助かります」

さて、これで仕事は終了だ

「この製作は俺がいないと無理なんで手伝いますよ」

「好きにするといい」

俺は開発局へと足を進めた

リョーマ、デュノア社へ（後書き）

と今回こんな感じです

ラファール・デエースの武器の名前は北欧神話の怪物と武器のなまえです

ありがとうございました

シャルロット、父と和解する（前書き）

今回はシャルロットがデュノア社に行く話です
どうぞ

シャルロット、父と和解する

（寮内）

「本当に行くのか？シャルロット」

「うん、父さんを・・・信じてみたいんだ」

さっき父さんからメールで話があると送られてきた

電話だけで済む会話ではないようだ

もしかしたらISのデータを取りそこなったことについての責任を負わせられるかもしれないけど

メールにはシャルロットではなくシャルロットと書いてあった

男と偽るために練習していた時も男として学園にいたときもずっとシャルロットと言っていたあの人がシャルロットと書いていたのだからその可能性に賭けてみたいんだ

「そうか・・・なら私は止めないでおこう」

「ありがとう、ラウラ」

ラウラは頬を赤らめて別に・・・といってそっぽを向いた

僕はその姿を見て少し微笑み

フランスへ向かうために荷物をつめていた

（デュノア社内）

「後はそこだけだな」

「はい！」

中々いい働きをするな、ここの研究員達は

ドイツほどではないが優秀な奴らがいる

・・・ドイツにいる奴らは優秀だが変人しかいないからな、義父さんも義母さんも研究に没頭すると周りが見えなくなつて止めないとひたすら研究をして休憩を全くしない。この前は三日も休憩しないで研究をしていたらしい

「・・・・・・・・」

上でシリウスがそわそわと落ち着きなく動いている話をして分かったことがある

あいつは自分のためなんなんでもする男でもあるが

シャルロットの母でシリウスの愛人である、エレオノールを何より優先していたようだ

腹を割って話してみると外見ではわからない事も見えてくるものだ
そういえば昨日シャルロットに連絡をしたと言っていたからそろそろ来る頃か

さて、見つかるには早すぎるから部屋に戻るとするか

くデュノア社前く

「何だか久しぶりに感じるね・・・」

学園に行ってから三ヶ月くらいしか経ってないのにね・・・

覚悟を決めて社内へと足を進めた

ロビーで少し従業員と話した後社長室に案内された

社長室に入ると父さんが座っていた

「こんな場所ですまないがくつろいでくれ」

父さんの言葉に少し呆然としてしまった

会社内では常に緊張していると言った父さんがくつろげと言ったのだ

「今日は社長とテストパイロットの関係ではない、親子の関係だ」

「親子・・・」

いきなりの事で思考が追いつかない

親子という言葉が頭の中でぐるぐると回る

それと同時に怒りがこみ上げてきた

「何を・・・いまさら・・・」

「シャルロット・・・」

「今まで父親として接してこないで！母さんが死にそうな時も連絡したのに来なかったじゃないか！」

「・・・」

「母さんが死んだ時も来なかった！その後はたった二回しか話していないじゃないか！なのに・・・今更・・・」

「そうだな・・・私は小さな男だ・・・ルイーズに逆らうことが出来ず・・・お前達に辛い思いをさせ続けた」

ルイーズとは本妻の人の名前だ

「別にルイーズを本気で愛していたわけではなかった、しかしルイーズがいなければ金が入らなかった。最初は辛い日々だった、好きでもない女性と居続けることが。そんな時だった、エレオノールに会ったのは」

「母さんと・・・」

「そうだ、とても優しく、美しい人だった。私は彼女といえるだけで幸せだった。しかし、ルイーズにばれてしまったのだ。しかし私はごまかし続けエレオノールを・・・シャルロットお前と共に実家に帰らせた」

「捨てたんでしょ」

「そうなるのか・・・お前達を守りたかった。しかし私には勇気が足りなかった」

「守りたかった・・・」

「ああ、そうだ。しかしそれ以降ルイーズの部下達が常に私を見張るようになった。だから会いに行きたくても行けなかった」

「もし、不倫がばれたら・・・私達はどうなったの？」

「最悪の場合、殺されてたかも知れん」

「！！」

「ルイーズは容赦がない奴だ、使えないものは即座に切り捨てる」

そんな・・・なら

「母さんが死にそうな時も、死んだ時も？」

「ああ、行きたかったのだがルイーズの部下たちの目が光っていたせいで行けなかった」

父さんはとても悔しそうに呟いた

「僕が会社に行った後も・・・？」

「そうだ、そのせいで仕事の話しか出来なかった」

「・・・なら今なんで？」

「ルイーズは・・・病気で死んだ」

「・・・え？」

「先月の事だ、心臓発作でな」

「そうなんだ」

「それでも私は人に言われてようやくシャルロットにメールを送れた・・・こんな臆病な父ですまない」

「それでも・・・話してくれてありがとう」

父さんの本音が聞いたことで胸にあったつかえが取れたようだった

「積もる話もあるがまずこれを」

「これは？」

父さんから書類の束を貰った

「お前に渡す第三世代機のデータだ」

「第三世代機・・・？」

「見てみれば分かる」

書類に目を落とした

IS名 ラファール・デエース 疾風の女神

「すごい性能・・・」

リヴァイヴ以上の性能に武器の数、さらにビーム系の武器と実弾系の武器

接近戦でもビームランスに実剣さらに特殊兵機のニーズヘッグは一夏の零落白夜とほぼ同じ効果になっている

「こんなものをいったい誰が・・・？」

「呼ぼうか？」

「うん」

父さんは携帯を出してその開発者を呼んだ
しばらくして誰かがドアをノックした

「入ってくれ」

父さんがそう言うのとドアが開いた
その奥にいた人物を見て僕は驚いた

「リヨーマ・・・？」

「ああ、そうだ。シャルロット」

黒い軍服を纏ったリヨーマが立っていた

「・・・どう・・・して？」

「お前のため以外に何がある？」

「え・・・？」

「ラファール・デエースの特徴を良く見てみる」

「・・・僕が乗ってたリヴァイヴとほぼ同じ・・・」

「そうだ、そいつはお前のために俺が造った機体だ」

「どうして？」

「前のままここに来てたら監獄行きかもしれないなかったんだろ、そしてその方法を解決するために色々悩んでいたんだろ」

「うん、そうだけど・・・でもリヨーマにはあまり関係ない・・・」

「お前は俺の大切な仲間だ、充分関係ある」

「・・・あ・・・」

「だから、それを造ったんだ」

「だったら言ってくれてもいいのに」

「驚かせたくてな」

「・・・あれ？じゃあ父さんに僕と話すように言ったのって？」

「俺じゃないぞ」

シリウスは驚いたように目を見開いたが無視した、シャルロットにはばれなかったようである

「とりあえず俺は退散するぞ、親子水入らずを邪魔したくないのである」

「そうか・・・感謝する」

「また、あしたね」

「ああ、あした」

さてと、明日はデエースにリヴァイヴのコアを移すのと性能テストをしなくてはな

く研究施設内く

「これよりコアの移し替えを始めます」

「「はい！」」

作業は順調に進んでるようだな

「リョーマ」

「どうした、シャルロット」

「ニーズヘッグの使い方なんだけど、これって近接武器？」

「いや、中距離でも使用できる。そのことも書いてあるはずだが」

「え？あつ、ほんとだ」

えへへとシャルロットは恥ずかしそうに頭を掻いていた

「作業終了しました！」

「終わったか、シャルロット。フィッティングを始める」
「うん」

この作業は俺が三分で終わらせた
その最中研究員達がこの世のものとは思えないものを見るような目で俺を見ていたが無視した

「さてと、最後は模擬戦をやる。シャルロット、構えろ」

「え？もっ、もしかして、リョーマが相手？」

「そうだ」

「・・・生きてられるかな・・・」

「加減はする、もちろんな」

俺はヴィント・ホーゼをソード状態にしてシャルロットに斬りかかる
シャルロットはビームランス、グングニルを呼びヴィント・ホーゼにぶつける

一旦離れ再度斬りかかるが、シャルロットは冷静に俺の攻撃を受ける
首、胴、足と狙いを下に下げたり、フェイントをかけながら斬りかかって全て受け止めている

「槍を使ったことは」

「一度もないよ」

「そうとは思えない槍捌きだな」

俺はヴィント・ホーゼをライフル状態に変え、中距離から撃つ
急所を的確に狙うがかわされ逆にアサルトライフル、フギンでこちらの急所を狙ってくる
それを回避しつつヴィント・シュトウースをマシンガン状態にしたまま攻撃をかける

「失礼な、ヴォーダン・オージェを発動しただけだ」

「本当に？」

「ああ、最後のはニーズヘッグを当てた後お前に隙が出来たからお前が負けたんだ」

「そうだね、使ってみて始めてわかったけどあれを使った後の動きは結構難しいよ」

「以外と簡単だと思うがな、当たった瞬間発動するわけだから腕なり足なり掴んでダメージを与えた後、投げればいいんだからな」

「あっ、その手があったんだね」

気づかなかったのか、まあ初めてであれだけ動ければ上等だろう

「俺は明日帰るがシャルロットはどうする」

「僕も明日帰るよ」

「いいのか、もっと話さなくて」

「いいんだ、ねえリョーマ」

「どうした」

「僕のことシャルロットじゃなくて別な呼び方で呼んでくれない？」

「・・・」

「だめ・・・？」

上目遣いでシャルロットがこちらを見てくる

普通の男ならその姿に何かしら思うのだろうが、俺にはたいして意味無かった

「そうだな・・・なら、シャロはどうだ」

「シャロ・・・うん、分かった。ありがとう」

そういうとシャルロット・・・いやシャロか
シャロは顔を赤らめながら走っていった

・
・
・
・
・

「これは・・・もしかして・・・」

リョーマ・ボーデヴィツヒ 16歳、始めて自分が他人に好意を持
たれていることを知る

シャルロット、父と和解する（後書き）

「もしかしたら、シャルロットは兄上を慕っているかもしれない」「ほんとに!」

「ああ、ただ兄上は気づいてないが」

「もしかして、リョーマさんも鈍感?」

「いや、リョーマの場合恋愛感情がないだけだと思うが」

「でも一夏よりはするどいわよ」

「だが、シャルロットが兄上とくっつけば、一夏（嫁）をめぐる競争相手がなくなると言うことだ」

「でも、ラウラ。そうなると思うけどシャルロットがアンタの姉になるけどいいの?」

「・・・そうだな、別のかまわんな」

「あのゝ人のコーナーを勝手に使わないで頂けます?」

「」「アンタは黙ってなさい」「」

「・・・はい・・・」

「畜生・・・また来週・・・」

織斑宅にて（前書き）

今回で夏休み終わるかな
リアルだと一年が終わりそうだけど
どうぞ

織斑宅にて

〽織斑宅前〽

ついに来てしまいましたわ

一夏さんの家に！

な、なんて理由をつけましょうか・・・

や、やはり「来てしまいました」でやるしかありませんね！

私は緊張しながらインターホンをおした

「は〜い」

「私、セシリアですわ」

「今度はセシリアか、開いてるぞ〜」

「で、では。お邪魔します」

私はついに一夏さんの家に入りました！

・・・そういえば一夏さん「今度は」とおっしゃっていましたが・・・
もしかして

「お〜い、鈴。って何やってんだ？」

「うえ！？ な、何でもないわよ！」

二階では一夏さんと鈴さんの声が聞こえました

やっぱり他の人も来てたんですね

そして二人が降りてくると同時に
ピンポーン

「今日は多いな」

「「・・・・・・」」

私は鈴さんのほうを向く、鈴さんもこちらを向いていた

「絶対あいっら（あの人達）よね（ですわね）」

「「お邪魔する」」

案の定箒さんとラウラさんでした

「あれ？シャルロットは？」

「そうですわね、彼女なら来ると思ってたのですが」

「シャルロットならフランスに戻ったぞ」

「え？それ大丈夫なの！？」

「昨日帰ってくるとメールがあったから大丈夫だったのだろう」

一夏さんは今お昼を作りキッチンへと消えていきました

「しかし、来るなら来るで誰か1人くらい事前に連絡くれよ」

「仕方ないだろう、今朝になってヒマになったのだから」

「そうよ。それとも何？いきなり来られると困るわけ？エロイ物でも隠す？」

昼食のざるそばをすすりながら、箒と鈴が答える。大人数になってしまったため、昼は手軽に作れる麺物になったのだった

「私も箒さんと同じですね」

「私は突然やってきて驚かせてやろうと思ったのだ。どうだ、嬉しいだろう」

セシリアも似たような理由にした

ラウラはそばつゆに次の麺をいれながらしれっと告げた

「そういえばリョーマは？」

「兄上はドイツに行っているぞ」

「少し遅いんじゃない？ 帰るの」

「何か用事があったみたいだったぞ」

「へー、で午後はどうする？ みんな室内っつか、うちの中がいいんだよね？」

こくん、と一糸乱れぬ動きで全員がうなづく

「（わざわざ一夏が帰省をしている日を狙ってきたのだ）」

「（外に出たら台無しじゃない、バカ）」

「（なにか、今まで知ることのなかったことの一つは得たいものですわ）」

「（織斑教官の暮らしていた家としても、興味がある）」

そんなことを各々に想いながら、箒に鈴、セシリア、ラウラはざるそばを食べ終わる

一夏が後片付けをしていると
ピンポン

「うん？ 誰だ？」

「「「（・・・ついに来たか・・・）」」」

「邪魔する」

「お、お邪魔します」

リョーマたちが勝手に入ってきた

「二人一緒って珍しいな」

「ああ、空港で一緒になってな」

「ねえリョーマ、ドイツで何を？」

「ああ、ちょっとした野暮用をよな」

「シャルロット、大丈夫だったのか？」

「うん、むしろ分かり合えたよ」

「それで、この後どうしたもんかな。うちはあんまり皆で遊べるものとかないぞ」

「まー、そうだろうと思って、あたしが用意してきてあげたわよ。はい」

そういつて鈴がだした紙袋には、トランプから花札、モノボリーに人生ゲーム、その他様々なカードゲームとボードゲームが溢れていた

「おー。そういうや鈴はこういうの好きだったな」

「そりゃそうよ、勝てるもん」

「つまりテレビゲームでは全く勝てないと言うことか」

「うっ、うっさいわね！アンタはゲームしたことあんの？」

「もちろん、ないが」

「私達はずっと軍にいたからそういう遊びはしたことないんだ」

「あ・・・ごめん」

「「謝る必要はないが」」

「じ、じゃあこれで遊ぶか！皆希望とかあるか？」

一夏が重くなった空気を切り替えようと少し大きい声で言った

「あら、日本のゲーム以外にもありますのね」

「あ、これやったことある。材木買うゲームだよな」

「ほう、これが日本の絵札遊びか。なかなかミヤビだな、こんど、帰国する時に部隊に土産として買って行くでしょう」

「私は将棋がいいのだが、あれはふたりでしかできないしな」

「良くこれだけのゲームを持って来れたものだ」

「じゃ、全員でやれそうなやつからいくか」

そういつて一夏が取り出したのは、バルバロッサという名前のゲームだった

「「ほう、我がドイツのゲームか」」

俺とラウラはそろって言った

「それで、これはどういうゲームなの？」

「このカラー粘土で何かを作って当てていくゲームよ質問とかしていいわけ」

「え？それでは、作る人間の技量に左右されるのはなくて？」

「そういうわけでもない、むしろ逆だな。上手く作りすぎると、すぐに正解されてポイントが入らないからな。適度に分からないくらいがいいわけだ」

「んん？ということはつまり、下手すぎるとやはり不利なのではないか？」

「いや、質問次第なんだよ。答えに当たりをつけて、質問で埋めていけば大丈夫だ。どっちかっていうと、造形どうこうよりこういう質問をするかがこのゲームの鍵だぞ」

経験者である鈴と一夏、そしてやったことないのになぜかルールだけはわかるリョーマが最初説明役に回ると言うことで、このゲームが始まった

こねこねこね・・・。

「できたっ」

「それじゃスタートね」

シャロからサイコロを振り、ゲームが開始される

「えーと、一、二、三、と」

「あ、宝石を得ましたわ」

「わたしは・・・質問マスか。よし、ではラウラの粘土に質問するぞ」

「受けてたとう」

「ちなみに回答は「はい」「いいえ」「わからない」よ。「いいえ」を出されるまで質問できるから、最初は大分類ではじめるとお得ね」

鈴の説明を聞きながら、ふむふむと箒がうなづく。そして再度、ラウラの粘土を見た。その粘土は「ゴゴゴゴ・・・」と静かな威圧感を放っているような円錐状のなにかで、見当がつかない。実際ラウラ以外は「あれはなんだ？」と気になっていた

「それは地上にあるものか？」

「うむ」

「よし・・・では、それは人間より大きいか？」

「そうだ」

と言ううことは道具の類ではないのだろう、しかし、人間より大きいということかなり限定されてくるのだがまだ全員分かっていないようだった

「それは都会にあるものか？」

「どちらともいえないな。あると言えばあるが、ないとも言えない」

この回答で俺以外が頭を悩ませた。特にほぼ全員が同じ考えだった

らしくこの回答は混乱しか生まなかった

「人間の作ったものか？」

「ノーだ」

「はい、質問終了。箒はこのまま回答も出来るけど、する？」

「う、うむ。そうだな。外しても失点はないようだし、答えよう」

正式なルールの場合には紙に書いて製作者だけが見るのだが、今回はあくまでお試しゲームなので回答情報を全員で共有するというルールに鈴が変更した

「なら答えは？」

「油田だ！」

ずびしっ！物体を差して箒が答える

「違う」

がくっとうなだれる箒だったが、箒以外の全員が「なぜ油田？」と箒の回答にもちんぷんかんぷんの顔をするのだった
そんなこんなでゲームは進み中盤を過ぎる

「そろそろ正解しないと、製作者も得点入らないぞ」

「・・・ほんとにやったことないのよね？」

「ない、が見たことならある」

ちなみにシャロの作った馬はすぐに当てられてしまい、本人に得点は入らなかった

このあたりの進行得点での正解による得点がバルバロッサの特徴であり、ベストなのは「そう言われればそう見えるような」造形であ

る。中盤で正解されることにより、正解者だけではなく製作者も得点が入ると言うルールなのだ

ちなみに箒の作ったものは「井戸」だった。俺的には分かりやすいものだったが他の連中は難しかったらしく苦戦していたがシャロの質問がうまかったこともありベストタイミングで正解している

そして問題はラウラとセシリアの二強である

ラウラは相変わらず謎の円錐物体、俺は何なのか目星がついているが、セシリアの謎の細胞体のようなものは目星が全くつかなかった

「そ、それは食べ物？」

「違いますわ」

「それはビルより巨大か？」

「いや、巨大だ」

すでに自分の粘土は当てられている箒とシャロは、とにかくラウラとセシリアが何を作ったのか必死で考えては質問するが、かすりもしない

そうこうして、とりあえずのお試しゲームは終了した

「で、ラウラ、これはなんなんだ？」

「まて、俺が聞いてみよう。ラウラ」

「はい、何でしょう。兄上」

「これは・・・山か？」

「はい！そうです、さすが兄上！」

「いやいや！山はこんなに尖ってないだろ！」

「むっ・・・失礼なことを言う奴だな。エベレストなどはこんな感じだろう」

「それなら「やめとけ、一夏」なんでだよ？リョーマ」

「バルバロッサは「そう言われればそう見える」がベストなゲームだ。これはその典型とも・・・言えなくはない」

「納得いかねえ」

「諦めなさい、一夏。ラウラは正解されなかったから減点ね。それでセシリアは？」

「あら。誰もわからないのかしら」

皆して俺を見るがあれが分かるのは作った本人だけだと言うように首を横に振ってやった

「我が祖国、イギリスですわ！」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

全員が沈黙。ちなみにこれまでの回答一覧は「潰れたジャガイモ」「原初細胞体」「ぐちゃぐちゃのピザ」「藻」「ボロ布」「怪我をした犬」「ジャンプ中の猫」

「まったく、皆さんの不勉強には驚きますわ。一日一回世界地図を見ることをおすすめします」

「その粘土を持って世界地図を見ることをおすすめしよう」

ほんととは皆「イギリスの形を知らないわけじゃねーよ！」と突っ込みたいのだろうがあ自信満々のセシリアを見ているとおそらく突っ込めないのだろうから俺が突っ込んでおいた

はつきり言って今言っておかないと大変な事になる・・・かもしれない

「ま、まあ大体ルールは分かったでしょ！じゃ、次からは全員でやるわよ」

七人がテーブルに集い、またこねこねと粘土をいじり始める
さっき作ったものは当然つぶして作り直したが、シャロの馬があま

りに見事でつぶすのが惜しい気がして俺はそれを手のひらに乗せた
「しかし、シャルロットは器用だな。これは置物に出来るレベルだな」

「そ、そんなことないよ四本足だってだけだってば」

「いや、これをロバだのラクダだの言う奴は目が節穴な奴だけだぞ。なあ一夏」

「ああ、そうだな。本当にうまいぜ」

照れているシャルロットを見ながら、女子四人組は「どうしてシャルロットばかり」と思っているような顔だった

俺は目線を自分の手元にうつす・・・これがなんだか分かる奴いるんだろうか

言われて見れば分かるを追求しすぎたようだ

一夏達が昔話に花を咲かせてる間も俺は集中して粘土をある形にしていた

そして第二戦が始まる

「分かった、カマボコだ」

「ちがうわよ！しっつれーね、あんたは」

「ラウラのそれ、人・・・？」

「違う、何故分からん。完璧な造形だぞ」

「今度こそ分かったぞ、セシリアのはトマトだな？」

「箒さん、これがトマトに見えますの？」

「リョーマのは・・・乗り物？」

「そうだな」

「世界中にある？」

「あるだろうな」

「人より大きい？」

「ああ」

「この家にもある？」

「あるぞ」

「「「「「・・・・・・？？」」「」「」」」」

やはり以外とわからないようだな

「大勢乗れる？」

「乗れない」

「なら・・・なら・・・うゝん」

シャロも皆も全く分からないようだ
そうして楽しんでいて自国が四時を過ぎた頃唐突に予想外の人がや
ってきた

「なんだ、にぎやかだと思ったらお前達か」

織斑千冬、その人である

私服姿は白いワイシャツにジーンパンという行動的な人柄を良く栗原
しているそれで、服のしたではタンクトップが豊満な胸を窮屈そう
に押し込めていた

「千冬姉、おかえり」

「ああ、ただいま」

その後のふたりのやり取りはまるで夫婦のようだったと言っておこう
・・・千冬さん、そういうのは自分でやらないんだな。だから一夏
の家事スキルがあんなにあるわけか

「そういえばもうこんな時間か・・・皆いつまでいるんだ？夜まで

なら夕飯の食材を買ってこないと——」

その言葉を聴いて女子達目がキラーンと光った

「夜は私が作ってやろう！なに昼の礼だ」

「そうね！あたしの腕前も披露してあげちゃおうかしらね」

「じゃ、じゃ僕も作り側で参加しようかな」

「俺も試したい料理があるから作るぞ」

「無論、私も加わろう。軍ではローテーションで食事係があったかな、期待しろ」

「そういえば、前に私のお弁当を食べてから随分経ちますわね。そろそろ恋しくなってきたのではなくて？」

それはない——という突っ込みをセシリアにしているであろう一夏は壁の時計を見た

「それじゃあ、五時くらいに出るか。近くにスーパーがあるから、そこに行こうぜ」

そんなこんなで会話がまとまり又、少し雑談に花が咲いた

「そういえば、リョーマ。あんた何作ったのよ」

「そうですわよ、リョーマさんが皆の当てましたのに一人だけわからないなんてずるいですわ」

「結局誰もわからなかったのか、答えは・・・ISだ」

「うそっ!？」

「・・・ほんとだこれ、打鉄だよね？」

「ああ、そうだ」

「言われて見れば確かに・・・ああもう！ムズ過ぎんのよ！」

「それがこのゲームの醍醐味だ」

と言う会話をしているとすぐに五時になり皆で買い物に出かけた

料理の話はカットしておこう

セシリアの料理？を思い出したくないので

「・・・・・・」

テーブルには六人六色の手料理が並ぶ

その中でひととき異彩を放つのはやはりというかどうしてもという
か。セシリアとラウラの料理だった

箸はカレイの煮つけを、鈴は肉じゃが、セシリアはハッシュドビー
フ・・・・なはず

シャロは唐揚げ、ラウラはおでんなのだろう

「リョーマのはなんだ？」

「ああ、これはグラタンだ」

「「「「「グラタン？」」「」「」「」

「ああ、食ってみれば分かる」

「よし、じゃあ食べよう」

全員が席に着いたところで一夏がまず先に言った

「「「「「いただきます」「」「」「」

そうしてその後も楽しい時間を過ごしたのだった

とある部屋

「――以上が、織斑一夏の報告になります」

薄暗い部屋、三人の女がテーブルを囲んでいる

ふたりは席につき、中央の1人は立っていた。それはさながら王に仕える忠臣のようで、室内には厳かな緊張感が横たわっていた

「そろそろ動くべきかしらね」

中心の人物が呟く。しかし、その超えは透き通り澄み渡っていて、小声であってもしっかりと二人の耳に届いた

「正直、この件に関しては、対応が遅すぎる気がします」

「各方面からの苦言も相当数……。もう、待つべきではないかと・
・」

262

じつと、王の言葉を待つ忠臣は、その視線をテーブルへと移す
室内の三人は、本年度の新入生の専用機持ちの多さそして完全なるイレギュラーの存在、その本格的な対応を迫られているのだった

「ふむ……」

窓の外を眺めていた王が、くるりと身を翻す

「決めたわ、そろそろ動き出しましょう。我らが我らであるために」
「では!？」

「近く、機を窺がって接触します。あなた達はバックアップを」

「りよ、了解しました」

「承知……」

くすりと、王は笑みを浮かべる

それはさながら獲物を見つけた猛禽類のようで

それはさながら冷徹なる氷河の女王のようで

見るものを魅了して止まない、そんな笑みだった

「覚悟してもらいましょう。織斑一夏」

満月を背に、女は微笑む

ぱちん、と扇を閉じる音が静かに、しかし確かに響いた――

織斑宅にて（後書き）

今回も原作をほとんど用いた奴でした
と言うわけでまた来週

生徒会長ついに現る（前書き）

今回から二学期が始まります
ちなみに俺の高校は二学期が終わりました
どうぞ

生徒会長ついに現る

くアリーナく

「でやああああっ！」

気合の入った一夏の声が響きわたる

九月三日、二学期最初の実戦訓練は、一組二組の合同で始まった
クラス代表同士で始まったバトルは、一夏が最初は押していたのだ
が次第に鈴が巻き返し始めていた

その理由は単純にして明快

第二形態となった白式の、さらに加速した燃費の悪さにある

それに加えて一夏は無駄にエネルギーを消耗させるためすぐにガス
欠になるのだ

「もらい！」

「!？」

一夏を地面に叩きつけた鈴が逆さまの格好のまま一夏に衝撃砲を浴
びせた

それが十発ほど直撃したあたりで、試合終了のブザーが鳴り響いた
言うまでもなく一夏の敗北で

く食堂く

「これであたしの二連勝ね。ほれほれ、何か奢りなさいよ」

「ぐう・・・」

「情けないものだな、セカンドシフトした意味があったのかと問い
たいぐらいに」

「ぐふっ！リヨーマ、ひどすぎる」

「事実だ、一撃必殺の意味を把握しなすぎなんだ、一夏は」

「むう・・・言い返せない」

俺達は皆で席に着きそれぞれの料理を食べ始める

一夏はサバ味噌煮定食

俺はザワークラウト、簡単にいえばキャベツの漬物。ドイツの名物料理のひとつだ

漬物なので酸っぱいらしいのだが味覚がないのでさっぱりだ

「ラウラ、それ美味しい？」

「ああ。本国以外でここまでうまいシュニッツェルが食べられるとは思わなかった」

ラウラは同じくドイツ料理のシュニッツェル（仔牛のカツレツ）を一切れ切り分ける

「食べるか？」

「わあ、いいの？」

「うむ」

「じゃあ、頂きます。えへへ、一度食べてみたかったんだ、これ」

ラウラから分けてもらったシュニッツェルを頬張って、シャロは幸せそうな顔をする

「んー！おいしいね、これ。ドイツってお肉料理がどれもおいしくていいよね」

「ま、まあな。ジャガイモ料理もおすすめだぞ」

「野菜料理も忘れては困るな」

「リヨーマのは何？」

「これはザワークラウトといって、キャベツの漬物だ」

「漬物って・・・、それだけで足りんの？」

「随分食べたが最初は丼物と同じくらいあったんだぞ」

「そんなに？酸っぱくないの？」

「味覚がない奴に味を聞くな」

「あ・・・ごめん」

「・・・ふむ、ラウラ食べてみる」

「分かりました・・・酢っぱい？」

「・・・だそうだ」

ラウラは、余程酸っぱかったのだろう、水を一气飲みしていた
その後ドイツのお菓子の話になり女子たちは大盛り上がりだった
その後は一夏が

「はあ・・・しかしパワーアップしたのになんで負けるんだ・・・」
「だから、燃費悪すぎなのよ。あんたの機体は。ただでさえシールドエネルギー削る仕様の武器なのに、それが二つに増えたんだから
尚更でしょ」

「うーん」

「武器の使い方ぐらいなら教えても構わんど、零落白夜と同じようなものを作ったから」

「本当か！頼む！教えてくれ」

その後いろいろな話を続けているとあっという間に昼が終わった

次の授業では一夏が見知らぬ女子生徒に絡まれて遅れたと言っていたが織斑先生には届かず
シャロのラピッド・スイッチの餌食になった

～放課後～

「・・・で、いつまでついてくるつもりなんです、楯無代表」

「あら・・・いつから気が付いていたの？」

「食堂から」

「最初からかあ、さすがはドイツの死神ね」

「それで、何の用です」

「相変わらずだなあ、こんなキレーなおねーさんに話しかけられてるんだから。もっと喜ばないと」

「そういった感情がないことは調べてあると思うのですが」

「まあそうだね、今日はね挨拶に来ただけなんだ」

「なるほど、一夏が遅れた原因は貴方でしたか」

「ご名答」

楯無代表はパン！と扇子を開いたそこには『正解』と書かれていた

「それじゃ、明日ね」

「全校集会でも開く気ですか」

「おお、そこまで読まれるなんて」

「やれやれ、お祭りが好きな人だ」

「ふふん、じゃね」

そう言って楯無代表は校舎の裏に消えた

あの人が本格的に俺たちに介入するとなると、今まで以上に騒がしくなるな

面倒なことだ・・・まったく

生徒会長ついに現る（後書き）

今回はこんな感じで

短くまとめました

日曜は舞えと同じくらい長くなるかな？
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119w/>

I S 天才以上完璧未満

2011年12月22日13時48分発行